
遥か遠い観空

遍駆羽御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か遠い観空

【Nコード】

N3917Z

【作者名】

遍駆羽御

【あらすじ】

ただ一人、価値観を共有出来る妹が、最後の家族が死んだ。

それは今まで月見遥が普通の学園生活を代償にしてまで、ライトノベル作家という仕事を得て妹との世界を守ろうとした生活の終焉を意味していた。学園の屋上へと足を運ぶ。再び、妹との、家族との生活を手にする為に。

だが、そこに辿り着き…遥が見たのは見知らぬ人物だった。

彼女は自分の事を朱と名乗り、不思議な魔法「アリアの一種 フレイ」と呼ばれる剣を顕現させる。

その奇跡の後、朱は遥の妹 観空の下へと遥を連れてゆくと述べ、
遥は朱と共に異世界へと旅立つ。
辿り着いた世界で観空と再会し、今まで通り平和な日々に戻れると
思ったが…。

序章、あたしの知らない世界、私の新しい日常

序章、あたしの知らない世界、私の新しい日常

>
—
<

十一歳の小学生だった妹　月見観空がぺちゃんこになって死んだ……。

酔っ払い運転の乗用車が歩道へと進入し、妹を突き飛ばし、そのまま五メートルくらい引き摺って乗用車は何の躊躇いも見せる事無く、逃走したと目撃者の四十代主婦は重々しい表情であたしに語ってくれた。

あたしの中にある慟哭という感情が死に場所はどこだぞ、月見遥と囁いた。霊安室で妹の死体を前にして二時間もの間、泣き続けたあたしにはそれが自分にとって残された手段であるかのように思えた。

病院から抜け出して、あたしと観空との思い出が詰まった学園——詩乃学園を仰ぎ見ていた。

夜闇という漆黒色に一つだけ目立った所々、薄汚れた灰色の学園はそそり立っていた。あたしは考える事無く、正面玄関へと足を運ぶ。

あたしはいつものように自分の下駄箱を開き、真新しさを残した清潔な青色のスリッパを手にとった。

「はーねえ、いつもありがとうございます。これ、プレゼントです」
もう、何処にも存在していないはずの妹の声があたしの耳に木霊した気がした。詩乃学園では自由に上履きとしての役割を果たすスリッパを持参するシステムになっていた。男勝りなあたしは百円シヨップで適当に取捨選択すれば良いや程度に考えていた。だが、百円シヨップに行く手間をせずに済んだのだ。いつもなら気を使うと

いう事をまるで学習しない妹がさくらんぼのように赤面しながらあたしにそう言つて青いスリッパを手渡したのだ。咄嗟に周囲を見渡す。

古い木材で作られた下駄箱の群が六列くらい規則正しい間合いを開けて並んでいる。あたしはその間合いを一つ、一つの隙間を確認してゆく。観空が実は生きていて学園にいるのではないかという期待に胸を膨らませる。

結局、野球部が部室の倉庫に仕舞い忘れた『朝露ノ遥たん、はあはあ』と油性ペンで走り書きされたバットが放置されているだけだった。

はあと小さく溜息を吐き、何の意図もなく下駄箱付近にある硝子のみ機能性だけを追求した鏡を見入る。

そこに映っているのは肩にぶつからないくらいの長さの宝玉みたいな紅い髪、生気のない輝きを失った血のような真紅の瞳、シャープな顔立ち、ついで胸は女性だと判別できる程度にある小説家 朝露ノ遥が詩乃学園指定の紺色尽くしのブレザーと短めのスカートを無駄な皺のなく着こなしていた。ここまでならば、あたしはあたしをメインヒロインに抜擢したファンタジー物を一作品拵えるだろう。だが、こいつには致命的なモノが欠けていた。表情が鬱々しく、喜怒哀楽の感情が欠落した人間としての基本要素が抜けている美少女ヒロインに誰が萌えという文化を見出されるのだろうか、見出せるはずがない。

「はーねえは世界で一番、可愛くて美しいお姉様、か。なわけないでしょ？ 観空」

鏡に映る自分に辛口コメントを残して、あたしは世界にさらならする為に歩き出す。

喧騒のない廊下に響く音はあたしの不規則な靴音だけ。右足、左足、左足、転倒しそうになる、上体を維持し右足、左足、右足、転倒する、起き上がる、歩く。

詩乃学園は真面目な良い子ちゃんばかりが通う進学校だ。だから

なのか、埃やパン屑、おにぎりを包んでいたビニール包装紙、誰かがうつかり落としてしまった恥ずかしいラブレター、エトセトラという青春を謳歌している若者達が集う学び舎に漂う生活観というのがない。ここまで整理されていると何か圧迫感のようなモノを感じてしまうのだから人というのは不思議なモノだ。あたしの妹、観空はよく小学校からあたしを学園まで迎えにくると、こう感想を述べていた。

「凡人が少しでも私のような天才の領域に近づく為に独房のようなつまらない空間を自ら、生産し頑張っているのか。はーねえ、これを無駄な努力って言うんですよね」

数多の天才達に続く能力を持つ十一歳の同年代の中でも背の小さい妹が必死に背伸びをしながら、あたしのコンタクトレンズを本物の眩い真紅の瞳が捉えていた。

先の見えない暗い廊下を歩いてゆく。ふと、自分の靴音とは違う音に気付く。水が落ちるような音。あたしは自分の頬に触れた。生暖かい涙の粒が指に付着した。

「もう、涙は流せないって思ったのに、何処か、壊れちゃったのかな」

何度も妹の前で泣いたのにまだ、泣けるのかと可笑しくなって口を歪ませて笑った。

ただ、壊れたマリオネットのように不揃いな足取りで階段の手すりに手を置いて登ろうとした。

「あ」

足を滑らせて階段に膝をぶつける。痛々しい表情で顔を顰め、あたしは膝を片手で押えて階段を一段一段、登ってゆく。じーんとした痛みは徐々に酷くなってきた。

だが、痛みに立ち止まっていては妹のいる世界へ辿り着けない。

「今、ただいまを言いに行くよ」

空虚を見つめる双眸が屋上へと続く階段を仰ぎ見る。登る度に窓硝子が悲鳴を立てるように何度も風に揺らされて悲鳴を上げる。

あたしにはわかっていた。いや、わかっていない程、意識が朦朧としていくわけでもなく、心的病を患っているわけではない。

あたしと妹の為にあたしは生きてきた。その生き方が音を立てて崩れたのだ。

幾つモノのホテルを所有していた両親はあたしと観空には訳のわからないテロリストの集団のリーダーの解放を両親の住んでいた国の大統領はテロには屈しないという宣言で要求を拒否し、それが理由による爆破テロに巻き込まれて死んだ。親戚はあたしと両親の残した遺産は面倒を見るが得体の知れない月見家に本来、いるべきではない赤の他人だからという理由で妹を施設に預けようとした。あたしはそれを拒絶し、両親の遺産を親戚にほとんど渡し、あたしは妹と生きてゆく為に中学生時代からずっと、小説家を生業としていた。決して楽な暮らしではなかったがそれでも毎日、笑顔に溢れていた。そんな陽だまりの中をぬくぬくしていた生活は終わったんだ。一步、一步ゆっくりと階段の段差を踏み越えてゆく。コンサートホールのような素晴らしい音響で再生される足音は淡々と響いていた。

ポケットの中で携帯電話が暴れている。あたしはいつもの癖で携帯電話の着信に応えてしまった。

当然、電話に出る未練なんか、この世に残してはいない。あたしは携帯電話を持った手を握り締めて切ろうとした。

「もし、もし！ 落書堂の舟木千鶴です。遙ちゃん、これは一体、どういう事！」

携帯電話の向こう側から中年女性の甲高い声が聞こえてきた。それに混じって紙の音が微かに聞こえる。推測だけど、あたしの残した世界の恨みつらみを淡々と書いた駄文であろう。

確か、こんな文章だったと思う。

運命というのは何処まで人を弄ぶのだろうか。そもそも運命という言葉は誰の視点において形成され、何処へと帰化してゆくのだろうか。人の数だけその言葉には終着駅がある。だが、得てして人は舞

台の脇役にしか過ぎない。

そんな文章を最期に朝露ノ遙こと、月見遥の小説家としての命は既に潰えていた。

「そう言う意味ですよ、千鶴さん。今までありがとう」

「駄目よ！ そんな事観……」

あたしは自分の決意を鈍らせる千鶴さんの説得に耳を貸したくはなかった。廊下の床に強く携帯電話を投げ叩き付ける。携帯電話はあたしの意図した通り、断末魔の悲鳴を上げて身体が粉々に吹き飛んだ。それを見届けると口を開く。

「ありがとう、千鶴さん。観空と一緒に天国で見守っているから今度会ったらまた、あたしの編集者として就いてくださいね」

あたしはもう、言葉を届ける事のない携帯電話に向かってお辞儀をした。あたしはわざと笑みへと持ってゆこうと、誇張した笑窪を作る。天国には観空が待っていてくれるのだから笑わないといけない。

「観空」

その単語を一語、一語区切るように……愛しむように……両手で抱きしめた。

ふと、昔の光景が脳裏に浮かぶ。

『はーねえ、今度の小説はどんな話？』

あたしが机に向かって懸命にキーボードを操作している傍で、小さな両手が机の端を掴む。

観空の身長は低い為、両手で机の端を掴んだままでは床には足が着かない。両足を左右に揺らしながら机の脚を軽く叩いた。木製の机独特の重低音が響く。太鼓のようだ。

無邪気な動作をあたしがぼんやりと眺めていると、痺れを切らしたのか――

『はーねえ。黙秘した場合は観空特性の自白剤で無理やり吐かせるよ』

自白剤と書かれた小瓶を宝物のように両手で掲げてあたしに見せ

びらかした。どうやら、観空の自信作らしい。自白剤の小瓶を掴んだ観空の指を一本一本、ゆつくりと小瓶から離す。

『今度はね、魔法の力で主人公の両親が生き返るお話なんだよ』

『人間は心臓が停止したら約十分程で死亡するからーねえ、蘇生できない』

『そ、そうだね』

『あ』

小瓶を奪うと素早く引き出しの奥に仕舞い込む。こんな当たり前で退屈でくだらない。でも、ささやかな幸福をまた、堪能するんだ。そんな一心で固く閉ざされた扉を開く。

開いたと同時に冷たい風があたしの顔を襲った。一瞬、顔を背けた先には意外な光景が広がっていた。

「あ、あんたは？」

雪がふわつと舞い落ちる中、傘も差さずに胸の大きい妖艶な女性は仁王立ちしていた。まるで誰かを待っていたかのように口は堅く閉ざされ、赤々しい両眼だけがあたしを射抜く。

睨むとかいう負の感情ではないが、無表情な笑みを向けて女性はあたしの元へ一歩、近づく。同時にあたしは一歩、後退した。さらに後退しようとするがそれより先に女性が言葉を発する。

「もし、あんたの妹さんが別の世界で生きていたら、そこがどんな世界でもあんたは行きたい？」

紅い瞳に魅入られたように突然の問いに、あたしはすぐに応える。

「行く。もともと、この世界に居場所なんかないから直ぐにでも」

「自分の世界に本当に、本当に未練はないの？」

女性の再度の問いかけに激昂し、左手でフェンスの金網を激しく叩き揺らした。

自分の世界に未練があるだって？

身寄りのない子を捨てる社会。

自分の世界に未練があるだって？

子ども達、二人が世間の目に冷たく晒され口ばかり達者な世界に

さよならしたいくらいだ。

ふざけるな！

「あたしはこの世界が嫌いだ」

両手でフェンスに驚掴みにし、地に脛を付ける。脛からコンクリートの冷たさが脳へとダイレクトに伝わった。だが、そんな自分の無様な状態よりもあたしが気になったのは、風の流れに身を任せる雪の結晶達に混じって、流れに乗り消えてゆく自分の涙だった。あたしはそれを必死に隠すように両手で顔を隠した。

「え……み、そ、ら」

下から零れ落ちる水を吸い、黒色の生地異なる黒色が生まれる。あたしの両手に包まれた黒色の布は温もりに溢れていた。それは観空のお気に入りハンカチだった。飾り気のないところが観空らしい。

このハンカチにもエピソードがある。

「観空が使う可愛いハンカチを買ってきなさいってお金、渡したらこんな質素なハンカチを買ってきたんだ」

ハンカチをぎゅっと握り締めた。感情と呼応する。ハンカチをさらにぎゅっと握り締めた。

「うん」

女性は小さく呟く。

「あたしが、可愛くないハンカチを買ってちゃんと選んだのって言うたらー」

「月見観空なら関係ない。ハンカチには変わりないって言ったんだろ？ あたしの知る月見観空ならばそう答える」

「知ってるんだ？」

涙で隠れていた晴れ晴れとした微笑みで見知らぬ女性を始めて観た。

あの時、観空が返した言葉ははーねえ、ハンカチというのは物質を拭く為だけに存在を許されているんだ。故に可愛さといったステータスはいらない。そう言ったのだ。表現は異なるが、意味は同義

だ。

「やっと、あたしの言葉を聴くようになったね。あたしの名は朱だ」
ローブの袖の中から腕を外部に晒し握手を求める。

握手を求める手にあたしの指先が重なり合う。

「あたしは月見遥。知つての通り、月見観空の姉」

「あたしを信用してくれたよね。あたしの言葉も信じてくれる？
あんたを妹さんのいる世界に連れて行く。それが月見観空の願いだからね」

朱は両手を広げて、

「本当ですよ。例えば、あたしはこんな事もできるんだから。これがアリア」

――統べてのアリアの祖 イグドラシルよ。

我に最強の武器を与えよ。

我はイグドラシルの子なり。

言霊は勝利の剣、フレイ。――

朱の右手と左手の間の空間――何も在らぬ場所から、零という数字から有限という数字が生じてゆく。剣のような先端が生じ始める。血塗られた禍々しい朱色に染まっていた。

だが、あたしにはそうは見えなかった。脳裏に浮かぶ白銀の刀身が何ものをも切り裂き、絶命させる剣が今、虚無の世界から現実世界へと帰す。その刀身に描かれていたのは美麗な女神の何かを求めるように天へと手を掲げる絵だった。その絵をあたしがじつくりと観察しようとした瞬間、

「あ」

剣に触れた雪の粒が刹那に炎の粒へと姿を変え、コンクリートを焦がす。雪が剣に触れる度にその現象が発生し続けた。時間を置く間もなく、剣の周囲で発生する為、蛍火のように夜の暗黒に淡い紅色を添えている。

なんと神秘的な光景か。

「魔法。違う。これが現実世界の魔法。詠唱、アリア。凄い、これ

なら。本当に連れて行ってくれる？」

「はい。アリアはあたし達、世界でいうところの魔法。まさにファンタジー。要領はまあ、向こうに着いたら月見観空大先生にでも教えてもらうと良いよ」

朱は軽くフレイと呼ばれる剣を振ると既にその剣はそこに存在しておらず代わりに、あたしが飛び降り自殺をしようとしていた夜空が遮る物質を失った事で瞳に映る。

最もあたしにはもう自殺の意味はない。別の意思が芽生えていた。それを口に出す。

「行こう、観空の所へ」

「そういうと思った。戻る時の成功率は当社率百パーセントなんで安心して行こうか」

朱はあたしに向かって、何年も親友をやって来た人に話すような調子で軽やかに言葉を出した。気さくに喋る朱を何故か、あたしは信じていた。

直感という奴なのかもしれない。少年漫画で初めて出会った奴と命を賭けたチームを組む。なんていうありきたりの熱い展開を冷やかな目で、そんなの打ち解けるの早すぎと酷評する類の一人であるが。

今、わかった。事実を伴わなければ、人の感情というものに奥底から左右されないんだ。

それが直感であり、運命。

そんな訳のわからない事を脳の一部を使い考えている内に瞼が重くなってきた。そういえば、最期に寝たのはいつだっただろうか？

三日前。それとも。

「おやすみ、……。願わくば、……の夢だけはこれからも優しい世界で在りますように。だってね……世界……は」

朱が何か言っているのは理解できるが、内容が理解できない。あたしの脳が眠れと指令を出しているからだろ。良いだろ、その指令に乗ろ。最も虚ろな意識ではそれしか選択肢はない。

あたしは眠る。明日からはまた、優しい世界が待っているのだと信じて。

>二<

車が急ブレーキを掛ける音。それが聞こえるまでは私の日常は醜さの中に優しさがある世界に存在していたのだ。

私はいつものように一人で商店街を歩いていて。いつものようにピンク色のランドセルを背負いながらゆつくりと歩いてゆく。

私を通る事になるであろう通路を一般的な主婦が楽しい気に話を咲かせていた。退屈だったので少し、耳を傾けて見る。

「昨日のバーゲン、何が安かったの、細田さん？」

バーゲンとは低脳な話を話題に掲げるのだな、福与かなお腹をお持ちの一般的な主婦一。ちなみに私は『くもひろ』という食パンが安くなる食パンバーゲンにお小遣い二千円を全て注ぎ込むぞ。

「あら、城也さんは行かなかったのね、冬物のセーターが半額だったのよ」

「行けば良かったわん」

そうガリガリの体型の一般的な主婦二に、一般的な主婦一が下品な笑みを浮かべて言った。

「あら、あの子ちよつとやだ」

「あらあら」

私が一般的な主婦一と二の限られた狭いスペースである横を通り過ぎようとした時、口々に悲観に満ちた声で一と二は言った。

私は立ち止まり、反論しようとしたが無駄だという事は理性で理解している。感情に走るのは月見観空らしくない。

無駄だというのは私の容姿が一般の人間からして見れば、異様過ぎるからだ。

琴の弦のような繊細で細い髪質を兼ね備え、淡い赤い兎の瞳色の髪色がさらに際立たせる。十一歳よりも二つくらい年下に見える童

顔という特徴を生かした両端の髪を結わえたツインテールに似合う白い軟らかな布地で出来たフリルが特徴的の夜色の上衣とスカートを身に着けていた。おまけに赤い真丸とした瞳と痩せ細った体型。両前腕に巻かれた水色のリボンがチャームポイントだぞ。

複合的に見ると一般には精巧に幼女美を体現した天使は私以外、いないだろう。だが、一般的な人間程、普通を逸脱した存在に一種の不快感を覚える事が多々ある。

「可愛くない訳ではないのだから良しとしよう」

一般的な主婦の視線を背中に受けながら私ははーねえと一緒に暮らしているボロアパートの一室へと帰る為に足を動かそうとした。

「赤毛の女の子、避けて！」

「一体、何を言っ」

一般的な主婦一のカラスのような喧しい声に振り返ろうとしたが、背中に十一年を生きて感じた事のない強い衝撃を感じた。感じたという認識が脳へと伝わる前に私は青々しい空を仰ぎ見ていた。

キーキーという車の激しいブレーキ音を聞いてああ、本当にそうなのかと納得した。

身体を支える物は何もなく、ただ太陽の光が目には直接入ってきて眩しかった。なんだ、眩しいと感じて私は腕でそれを防ごうとした。無数の注射針で突き刺されたような痛みを感じるだけで腕が動く気配はなかった。首や、とにかく色々なところを動かそうとしたが動かない。

理解した。死ぬんだ、私。

私の確信を後押しするように周囲の人間の怒号や、悲鳴が響き渡る。

眠ったら暗い、暗い闇が待っているのは承知だったが、死の引力に引き寄せられ、私は深い永遠の眠りに就いた。

「あ、れ？」

私は眼を開いた。当然、そこには天国という都市があり次の生命へと生まれ変わるまで楽しく遊べるのだろうと考えていたが、別の

光景が広がっていた。開いた口が塞がらない。

背の高い高層ビル群、そのビル群の間に雑草のように転々と生えているアパートやマンションがあり、お馴染みのスーパー『くもひろ』まで存在していた。だが、ここは日本ではない。私の知る限りでは電車が試験管のような管の中を走り、その管の下には車道はなく、黒人、白人、人種を問わず様々な人々がアスファルトの床の上を忙しく歩いてゆくなんて光景を見たことがない。

「うわぁ、私が浮いているではないか！」

足元が寂しいという感覚が私自身も変だという事を教えてくれた。落ちるという現象が当然の如く起こるだろうと一気に背筋が凍ってゆく。身体も諤々と震え、急激な尿意が私を襲った。

「おい、誰か助けてくれ！」

私は両手をメガホンのようにして叫んだ。だが、高層ビルと同等の高さにいる私の存在に気付く人間はいるはずもなく、私の声は青々しい晴天の空に消えていった。

「あ、なんで。そうか。だからあっははは」

挙動不審気味に首を振るという行為が今の自分を簡単に説明してくれる新事実を発見してくれた。ビルの巨大なガラス窓に映った何処の欠損もない私が映っており、車の事故があつたという事実を証明するかのようにピンク色のランドセルは私の血で所々、赤く染まっていた。ランドセルの真ん中の膨らみが完全に埋没していて歪な平たい箱のような形になっていた。ここまでは九死に一生を得たし、傷もなんか、完治しているし。少々気味が悪いが長い人生、色々あるとでも不思議現象に対して眼を瞑れば良い。

「羽根……生えてますよ、ニートンさん」

背中には白、灰色、黒、青、赤、黄色、緑、橙色、紫、群青色、色の識別不可能な輝しい色の十一対の翼が生えていた。それを認識した途端に頭の中にある文章が漂ってきた。その感覚は私がゲーテルの不完全性定理を覆した高揚感にも似ていた。

私は禁断の果物を口にするかのようにゆっくりと紡ぐ。

「その翼、遍く世界を越える虚無にして無限。神の子、月見観空に在りて神を制する者なり。始まりのARIAを歌え。言霊は覚醒の息吹、ロストガーデン」

その言葉を言い終えた刹那、背中が焼けそうなくらい熱さを徐々に帯びてきた。もう、耐えられないと口にしようとした。だが、適わなかった。

白い光が当たり一面を包み込んだ。その光は尋常じゃないくらい、私を魅了した。かつて私に月見観空という名前を与えてくれた人の次に好きと言える程に美しい白い光は自分の十一対の翼から発生しているようだった。

周囲の人間がこちらを見ている。ここから黙認できないがきつと、同年代の一般的な子どもと同じように、こう言うに違いなかった。

「天才様は僕たちと違って赤い毛と瞳の宇宙人だ。お前はあっちに行け」

私の中に小さな殺気が生まれた。ああ、いつそう、私の前から消えてなくなれば良いのに。

白い光が完全に私の視界を奪った。足に地が付いていない事からして私はまだ、飛んでいるのだろうか。ぼんやりと意識が遠のいてゆく。気持ち良い意識の低下という感覚の中で私は溜息を吐いた。やはり、これは天国へ行く前にささやかな最後の夢だったんだ。

「夢なら、はーねえを出してくださいよ、神様。私ははーねえの膝の上で……死……」

今度は何処へと、天国か。私はゆっくりと目を瞑った。

それはしばしの間でしかなかった。

私が再び、眼を開けたら建物だけを残して眼下にいたはずの数十人という人間が全て、そこにいたという痕跡も残さずに消えていた。これが意味する事は、

「殺してしまったのか……私が！ いや、違う。いや、違う、違う。うああああああ、違う！」

その奇声に答える者は残念ながいなかった。私の心に罪悪感と

発狂してしまえば逃れられるかもという安易さが渦巻く。

「いや、違う。私じゃない。セフィだよね？」

「はい、観空」

なんだ、私の中にいる別の私がやったんだ。ほっとして誰もいなくなつたアスファルトの上に降り立った。でも何でだろう？

「涙が出る」

一閃の涙がアスファルトに零れ落ちた。

それが醜さだけの世界で初めて体験した事であり、私達の人殺しの記念すべき日ともなつた。

今の私は闇深い、深い森にいる。私を見下ろす楠の木々が不気味で恐ろしかった。だが、私は朱という仲間を待っているのだから離れるわけにはいかなかった。息を殺しながら潜む。暗闇の外套の中から出てきた私の周囲を旋回する一匹の黄色い蝶を眼で追う。

「お前は怖くないのか、ステファニー？」

天才的な閃きによつてステファニーと名づけられた蝶は頷くように、私の前で上下に旋回してみせる。一寸置く間もないまま、ステファニーはゆっくりと飛んで私の元を離れようとする。

「ステファニー、そこに行ったら、私がお前を殺めてしまうかもしれないぞ」

ステファニーは楠木と楠木の間に見える都市の灯りに誘われて、その灯りへと吸い込まれてゆく。

「だから、最初に謝罪するよ。いつか、ロストガーデンでステファニーやグランだけではなく、全てを壊すかもしれない、悲しいな」

その都市、グランは私の住んでいた東京という都市と似ていた。

いや、そういう文明が残つて復興した地なのかもしれない。

背の高いコンクリートジャングルの木々が離れた距離からでも、雄大さを眼に強く焼き付けてくれる。空を仰ぎ見ると、雲の合間から飛行機雲が見えた。それを追つてゆくと小さな点のような光が瞬いた。朱は私にとつての希望の光を取りに行った。

だが、誰だつて絶望の沼に希望を落とすような真似はしたくない

と両手を強く握り締め、地面をただ、見つめ続けた。

>三<

これは多分、きつと夢。でもこれは昔のあたしの出来事。

お気に入りの真っ白なワンピースを着て七年前のあたし――十歳のあたしはいつもの公園へと遊びに行くべく、走っていた。辿り着いた先は勿論、いつもの公園だがその公園には昨日まで無かったものがそこに在った。

公園の木陰に真夏の日差しを避けるようにして公園の隅にそれは存在していた。ダンボールで出来た家のような形状、いわゆるダンボールハウスだ。

きつと、中にいるのは中年の冴えない男性だろうと想像していたが、ダンボールハウスから出てきたのは泥にまみれて茶色になったウサギの縫い包みを引きずった四歳の少女だった。油でべっとりした真紅の髪はボサボサで前髪は目が隠れるくらいで、後ろ髪は腰の辺りまで伸び放題。身に付けている大きめのワイシャツには謎の赤い染みやら、青いペンキなどにかく、ワイシャツの清潔さとは正反対の色が目立つ。

少女はパンの耳を口で咥えながら器用に食べていた。一言も言葉を言わずに黙々と食べ、虚ろな瞳で燦々と輝く太陽を仰ぎ眺めた。

「ねえ、その一般的な子ども」

「なん、なんですか。金なんかないですよ。お菓子も持ってないです」

当時、か弱い小学生であつたあたしには奇妙な少女に話しかけられたという動揺の影響で咄嗟に変な言葉を繰り出してしまった。

そんな言葉を無視して、

「私が誰なのかを知っている？」

言葉が出なかった。まだ、小さな子どもだというのに自分というモノをわからないなんて。

しばらく、あたし―月見遥と名無しの少女―後に月見観空はセミの鳴く中、ただ立ち尽くしていた。

> 四 <

私が誰なのかを知っている？

私は知っている。今のあなたは私の妹―月見観空。

だが、妹は根本的な存在を証明したがつている。

それこそ、全てを創造した神に聞かなければならぬくらいの存在証明を求めている。

鈴虫の声が聞こえる。ゆっくりと視界を開いた。

暗い部屋。天井は低い。簡易テントと同等の天井の低さ。床はとても固く寝心地はとても悪いのだが暖かい。どうやら断熱性に優れている素材で床や天井、壁面等は出来ているようだ。

「暗くて色が判別できないけどダンボールか。昔を思い出すなあ」
額に手を起き、息を吸い吐いた。

左側にぶにつとした軟らかな感触が伝わってくる。弾力のある人肌、寝息。隣に誰か寝ているのだろうと推測し、あたしはその人物の顔を覗こうとした。

「はーねえ、因数分解を理解できないなんて脳外科に行った方が良いです。絶対に記憶障害です」

寝言さえも自分の価値観でしか語れない人物は月見観空しかない。微妙に酷い内容ではあるがあたしはその内容には目もくれず、歡喜の涙と嗚咽交じりの声で言う。

「起きて、観空」

「うるさいな。眠らせてくれよ、アカ」

眉を顰めながら器用に寝言で抗議する人物はあたしの想定した通り、真紅の髪と紅い瞳が特徴的な月見観空だった。黒い上衣に白いヒラヒラの裾が付いた黒いスカートを身に着けている。

生意気そうな童顔と長い睫毛を持つ観空は耳を巨大なウサギの縫

い包みで塞ぐ。それでは甘いと思ったのか定かではないが、身体に掛けていた白いボロボロの布の中に頭から潜る。

「起きて、観空」

「アカ。私の眠りを妨げると」

肩を揺らす度に面白いほど、左右に水色のリボンで結わえられたツインテールが振り子のように揺れる。

「妨げると少量のトリクロロメタンで眠らせて」

「こら、めっでしょ、お友達にそんな事」

小学生らしからぬサドな言葉に罰として振り子状態のツインテールを捕まえて引っ張る。

「ん、痛い。痛い」

「おはよう、観空」

「うわ」

「おはよう！ はー。くっ」

元気の良い挨拶から一変した苦虫を噛み潰したような顔をして、そっぽを向く。

「どうしたの？ ゲンコツ、強すぎた？」

「お前みたいな一般人。いや、あなたみたいな可愛いなお姉さん、知り合いの中にはいない。アカがお姉さんを助けてここに連れられてきた。気を失っていたようだから……わから……んと思うが」

「観空！ どうしてそんなバレバレな悲しい嘘を吐くの。はーねえはそんな妹に育ってた覚えはないよ」

「育てたつて。今日、出会ったばかりだ」

俯きながら観空はそう呟いた。

「その腕に巻いた水色のリボン、解いてみてよ」

観空の両前腕を指差す。髪の毛を結えていた水色のリボンと同色のリボンが両前腕に巻かれていた。それはあたしの知る観空と同じ容姿だった。

「う」

観空は心から嫌がるような拉げた愛らしい声を上げた。

「水色のリボンの下には観空が自分で傷つけた切り傷が無数にあるはずだから。あるでしょ、あたしの知らないあたしの妹に似過ぎた女の子」

「そ、そんな事よりお腹空いているだろう？　これを食べるか。ア力はこんなモノを食べたら食中毒で三日寝込んでしまうと言っているが、私の自信作」

鉄の鍋の中身をあたしに見せびらかす。先ほどまで苦虫を潰したかのような表情だったが、それを見せびらかす姿は無邪気な子どもそのものだ。

肝心の鉄の鍋の中身は色が混ざる事無く、赤、黄、緑などの色が同居する世にも不思議な液体だ。だが、鍋から香る匂いはカレーの甘みを的確に表現した昔ながらの食堂のカレーだ。

これを見せられた瞬間、あたしは怖いくらい満面な笑みを浮かべた。

「食事なんて人間が日々を営む為の動力源なんだ。ちょっとくらい面白いほうが良い。そういうつもりでしょ。食べ物を観空と同じように面白くしちゃうあたしの知らないあたしの妹に似過ぎた女の子さん！」

「腕を！　腕を掴むな！」

あたしから逃げようとしていた観空の腕を掴み、素早く身動きが取れないように観空の背中に押し掛かる。

「ダ、ダイエットして下さい、はーねえ。具体的には有酸素運動による効果的な減量」

手足をジタバタと動かし、尚も抵抗を続ける。

あたしは暴れまわる腕を捕らえて素早くリボンを解いていく。リボンの下に隠されていたのは無数の痛々しい躊躇い傷。まるでその傷跡一つ一つが深層心理の不整脈を表しているようだった。

「ほら、傷がある」

「そうだ。私が月見観空だ。でも、そうでないとも言える。セフィ、セフィという聞き覚えの無い単語に目を丸くするあたしを無視し、

観空は自分の中にいるらしいもう一人、セフィなる人物に話しかける為に目を閉じて、神経をセフィとの会話へと移行させているらしいが、

「ぶつぶつ言ってるだけだよ」

言葉というプロセスを用意しない会話がなされたらしい後、静まり返ったダンボールハウスに明りが灯される。

その明りは十一対の翼が灯す光。

その光はそれぞれ白、灰色、黒、青、赤、黄色、緑、橙色、紫、群青色。そして色が見ないくらい輝く色。それら十一色は樹の枝葉のようだ。そして樹である観空を淡く輝かせていた。

眩く光る羽根達は幼い身体を外部から守るようにして羽根を畳んでいたが、観空が見開いたと同期に十一対の羽根は展開する。同時に淡い光の粒子がダンボールに落ち、消滅した。

「あ、観空が天使に、なった」

「私は観空ではありません。私はセフィロト。観空さんの心に住む代償を必要としない完全なるアリアという奇跡を生み出す者。私が示せる完全なるアリアの一つ、ダアトをお見せしましょう。勿論、月見観空の意思によってです」

―我はイグドラシル。七つの世界の根源。

奇跡は我の必然。

示す奇跡は永久たる傷の癒し。

人たる肉体の維持。

言霊は未知なる英知、ダアト。―

この世の者とは思えない気品に溢れた立ち姿。その立ち姿は子どもも観空にはないような気がするが、演技かもしれない。いや、演技だろう。

紡いだアリアが直、効力を発揮しだす。

薄い光に帯びた両前腕にある傷が、独りでに過去の艶やかな肌に戻るかのよう塞がってゆく。

人間の自己再生の限界を超越した能力。それは間違いなく魔法だ

った。

「傷が治ってゆく。魔法、何も代償なく奇跡をもたらすライトノベルにおけるファンタジージャンルに必須の力。凄い！　凄いよ、観空」

完全に傷が治った前腕の肌をまじまじと見つめたり撫でたりした。しまいにはあたしは観空の成した偉業に対して憧憬の眼差しを向けながら歓喜の拍手した。

「観空？　まだ理解していないのですね、私という存在を。次に私が表へ出る時には理解できます。戦いの場で」

「何、言ってるの？　観空？」

あたしの言葉に対して何故か、落胆の溜息を吐いた後、観空は指を鳴らして十一対の翼を仕舞う。

「はーねえ。仕方ない。超常現象の類か、精神分裂症に観えるし、考えようによっては」

また、落胆の溜息を吐く。

「観空、精神分裂症？」

あたしは疑いの表情を観空に向ける。

「違う。でも、こんな事が出来る化け物だったか？　月見観空というアインシュタイン級天才は」

戯けた言葉で自分を誤魔化そうとするが……。

「観空」

あたしにはわかっていた。それが苦し紛れの言葉だという事を。

「これだけじゃない。今の私は簡単には死なない。腕を切断しても、心臓を貫かれても！　瀕死の状態ならば、自動的にダアトが発動するからだ。これが月見観空か！　私は車に轢かれて死んだ。そうでしょ、はーねえ！」

確かに観空は永遠に失われた。だが、どう観ても観空だ。百三十センチのチビでここまで情け容赦もなく言える少女は観空の他にはいない。しかし、車に。矛盾した解決できない難題はあたしを悩ませた。

「う、うん。けど、どう見たって」

あたしの観空だと言葉にしようとした。

「今の月見観空はエデンという国を滅ぼした存在。人間のほとんどは水分で構成されている。だが、私はアリアマター、感情共鳴物質で構成された、」

言葉を切り、

「人外という存在だ！」

捲くし立てるように、観空は真実を淡々と述べた。

「そんなこと無い！」

すつと立ち上がり、観空をウサギのような真つ赤な瞳で睨みつけた。自分の言うことが全て真実だと語る強い否定の瞳。充血し、涙を溜め……止め処なく、観空の髪の上に零れる。

観空はその瞳に耐えられず俯き、何かを抑えるようにスカートの裾をぎゅつと握り締めた。

あたしの流れる涙、観空の濡れる髪の毛。観空の髪の毛から一滴、一滴と観空のスカートの裾に落ちてゆく。それは染みとなって観空に訴えかける。

あなたは月見観空で良いと。

「わかるものか！」

観空はあたしの顔に自分の黒いハンカチを投げつけ、ダンボールハウスの出口であるボロボロの白い布を乱暴に捲る。そのまま、振り返る事無く走ってゆく。

すぐに観空の後を追いつけようとするが、見えない重力に足を止めざるを得なかった。

見えない重力。それは何を述べれば良いのかという人との対話において最も大切な内容だ。今のあたしにはその重力に贖う術はなかった。

「あ、ああ、どうして」

そう呟きながら、この世界での最初の景色を見渡す。

あたしの身長―百六十センチなんぞ虫けらと言わんばかりに四十

メートル前後の楠木が群を成して周囲一体に自生し、それぞれ立派な青々しい葉を付けている。まだ、身は熟していないところから秋ではないようだ。この楠木達が空気を正常に保持しているからだろうか、空気を吸う度に段々と気持ちが悪く落ちていく。まるで自然の精神安定剤のようだ。

空を見渡す。

望遠鏡という近代の素晴らしい発明品を使用しなくとも、はつきりと星の海を望むことができる。だが、今はそれに感動する余裕はなかった。

ベガ、デネブ、アルタイルが出ている事から、この世界が自分達のいた世界ではない事を確認する。ベガ、デネブ、アルタイルは夏の三角形だ。これはテレビのクイズを観ていた時、夏の三角形と呼ばれる三つの正座は何？ という問いに対し、観空が一般人はこんな簡単な問いにも答えられないのかと同情的な物言いで答えていたから覚えていた。

「どうしてって」

あたしは背後から朱の声を聞いた。振り向くが、誰もいない。

耳から聞こえた声を追って、外から見ると意外と大きかったダンボールハウスの裏手にやって来た。その人物はこちらへ来いと手招きしていた。

焚き火をじっと見守りながら、朱は白い歯が覗く笑みを魅せる。

とても爽やかな口調と焚き火はとても合っているのだが、サスライの旅人？ 悪く言うとかバグだらけのロールプレイングゲームの旅の魔道士のようなダサイローブは似合っていない。

「朱さん」

そう言っただけで朱の間迎えにある朱が座っている丸太と同じくらい大きな丸太に腰を落ち着かせた。

「あんたも月見観空の正体をわかっていないからだ。ごめん、ちょっと、話がきこえちゃった」

朱は自分のすぐ隣に置いてある赤い色のバッグを開き、手を入れ

る。

「いえ、良いです」

「ま、これでも食べて落ち着きなさい」

バッグからパンを取り出す。

ふつくらとしたその福与かな佇まいはとても美味しそうだ。当然のように涎が口の中に充満してくる。溜まらず、あたしは手を伸ばした。

「ありがとうございます。でも」

人間は時として第六感という超便利な感覚が働き、手にしたパンを二つに千切る。

そこから悪魔が覗けた。パンの中に本来、餡子やクリームといったモノが入っていると見たことのない青色のドロツとしたおぞましいスライム状に複数の謎の錠剤が乱雑に突き刺さっていた。

「食欲が激しく出ない観空料理は要りません」

それを言うのが必然のように諳んじた。いくら愛しい妹が作ったであろうパンだとしても、料理ではない工作という工程で生成されたものなど食べられるはずがない。言うなれば、ラジコンのタイヤを食べられるか？ 否という事だ。

「やっぱり、そう。やっぱり、あたしの方が常識人だったんだ」

朱は疲れた表情で炎を見つめながら弾んだ声で言った。

「はあ」

やっぱりと声を上げるまでもなく、常識ですという意味での溜息が出た。

「まともな料理なんて観空料理しかないし、困ったなあ」

「ちよつと、良いですか？」

観空作のパンを丸太の上に置く。それを待っていたと言うばかりに、ふんわりとした毛並みがチャーミングなリスはパンに近寄る。

パンを目の前で見た瞬間、リスは慌てて逃げた。近寄る時よりも速い。やっぱりね……。

「ん？」

朱は飯盒を用意し、その中に米を入れて手ごろな石を両端に置き、飯盒を小枝に通し、火の上に吊るす。その一連の動作はとても洗練されていた。

「観空もあたしがこの世界に来る事を希望していたんですね」

「本音ではイエス。本音ではないところではノー。複雑なんだよ、本音をはっきり言うにはね、優しくない世界だから」

「優しくない世界？」

「鮭ふりかけが残っていたか。観空にしては珍しい」

先ほどのバッグではなく、綺麗な瑠璃色の布の上に置いてあるピンのランドセルから、鮭の絵が描かれた布袋を取り出すとあたしの方へと投げた。

あたしが両手で布袋を掴むのを確認してから、

「これとご飯で食べてね」

飯盒の鉄板を小枝で軽く叩いた。

「ありがとうございます」

「あんたのいた世界はこれから終わるんだ。終わった原因は第三次世界大戦の最中、隕石に混じって強制的に撒布されたアリアマター。感情共鳴物質とも呼称をされている。当時の人々は事を極秘裏にして軍事使用しようと考えた。そして突き止めてしまったんだよ……。核を越えた悪魔の所業を成す業をね」

感情のない預言書のようにあたしにとっては未来、朱にとっては過去を語った。

「もしかして魔法、アリア」

「空気中にある間には一切、害は無い。人の感情とイメージに呼応して空気中のアリアマターは様々な性質へと変化する。これがアリアのメカニズム。それを利用したアリアボックスと呼ばれる爆弾が全ての文明を滅ぼした……。人って愚かだよな？」

「……」

言葉に出せるはずがない。まだ、あたしには未来だと思っていた話。それとは別に朱が言う事が真実であるのなら、あたし達の世

界はもう、終わってしまったのだ。煌びやかな街の灯火、しっかりと整備させた道を我がもの顔で走り続ける自動車の群れ、朝の時間帯の人々の群れ。その終わらないと思えるほど怠惰なゆっくりと過ぎてゆく風景がもう、何処にも存在しないかもしれない。

「最初はちよつとした利権争い。アリアというモノを調べていた観空が言つてた。自分を守る為には他国を完全排除しなければならないつて考えたのか。最初のアリアであるロストガーデンを生み出し、一撃で日本大陸ほどの国土が消滅した。この辺の詳しい事柄は和国つていう人外達の国で調べるしかない」

朱の紡ぐ言葉の一つ一つに衝撃を受け、指が小刻みに震え、足に力が入らなくなってきた。子どもの頃、観空と一緒に映画館で観た映画ではもつと未来は輝いていた。違う。どうして。どうして。

「和国、日本？」

「そう、正確に言うくと日本にいた生き残った人ね。人間の器で気軽に使えるようにする研究の生き残りで他の人間達から差別されている存在。虐殺の対象でもある。その国の人以外はアリアを生涯に一度しか使えない」

「一度？」

「使つたら死ぬから……二度目はないんだ」

「観空と朱さんは……」

「あたし達はそれとは違うけど……例外つてやつ。強いアリアを使おうとしない限りね。お、客人のようだ」

「すいません！ 助けてください！ 姫様を！ アリアマスター、朱様！」

楠木の影から慌てて長身の男性が現れた。切り方が乱雑な前髪に左右の髪の毛は外側に跳ねていて、そんな髪型とは正反対に地味な茶色の制服をきつちりと着こなし、両腰にはそれぞれ刀を帯刀していた。

「そのファンタジーネームで呼ぶつて言うことは姫様というのは、朝露ノ雫お子ちゃまですか。全く、あの姫様は。また、一人で軍勢

を相手するってお馬鹿な事を言っ、個人行動を取っているんですよ」

姫様という人物を小馬鹿にするような赤ちゃん言葉混じりで朱はそう言った。

「朝露ノ雫って？」

「無礼者！ 呼び捨てとは」

あたしの問いには答えず、火の上にある飯盒を躊躇なく蹴り飛ばす。蹴り飛ばされた飯盒は蓋が開き中の米が軟らかな土の上に零れ、泥色に米粒が染まってゆく。それを朱とあたしは見つめた。あたしの目に恐怖が宿ってしまう。

「ご、ごめんなさい」

「ああ、良いんだよ。無礼なのはあちらさんですから。この子は月見遥。兵器、月見観空の姉君です」

「し、失礼しました。兵器にはこの事は御内密に。殺されてしまいます」

月見観空という名前を出された途端に軍人の態度は一遍し、軍人はまだ観め恐怖を避けるべく地面に手と膝を付けて頭を下げた。

こつまでさせるほど、観空が恐ろしい対象になっている事に違和感を感じる。

「殺されるってそん」

「さて、それよりもお子ちゃま姫を助けに行こう、遥と、名は？」

あたしの反論を妨げるように早口に言った。

「俺は霧神瑠多。先週からそのお子ちゃま姫の護衛役だ」

腕を伸ばし、友好の証である握手を朱に求めるが……。

「ん、瑠多。行くか」

霧神に背を向ける。

「ああ」

それは想定されていた事なのか、霧神は動じず業務的に答え走り出す。朱とあたしもそれに続くが、スポーツという爽やかな生活の潤いから長い間、遠ざかっていた為、何分もしないうちにあたしと

朱達との距離は離れてゆく。

「ちよ、ちよつと、速い。置いてかれる！」

「しょうがないな。お姫様抱っこだ」

見かねた朱は引き返し、軽々とあたしを両手で抱きとめ、先ほどと変わらないペースで走り出した。

「うきや」

まさに走るという表現に相応しい猛走に驚き、情けない声を上げた。

楠木と楠木の合間を縫うようにして、左右ジグザグに道無き道を進んでゆく。勿論、足元は何処かのハイキングコースのように歩き易いという事はなく、歩く障害となる大きな岩や道を塞ぐように倒れている楠木や雨で削られて出来た半径三メートル程の水溜りを走り抜けた。

先の見えないほど暗い闇の中に軍人が、プロが恐れるほど、絶望的な事態が待っている。その実態は自分の安い憶測など越えてゆく。生唾を飲んだ。

>五<

静寂な夜明け前という時間を恐怖の時間へと変える重々しい足音が聞こえる。

四名の従者に左右前方後方を守られながら雫ちゃんは足音から逃げてゆく。

危機的な戦闘を迎えなければならない事実を知っていたら、奇抜な格好をして来なかった。雫ちゃんは自分の格好を見渡す。確かに十五歳の雫ちゃんにぴったりのコーデイナイトだ。

上衣は漆黒の色に、両肩には造花の紫の薔薇。漆黒のスカートは両手で裾を持ち上げなければならぬくらい長い。裾には白いレースが付いていて走る度にひらひらと風に揺れた。これで胸と身長さえあれば、神秘的な少女というフレーズにぴったりなのだが、走る

度に胸は揺れない。雫ちゃんはきりつとした威厳に満ちた表情で前を見据えているが、身長が低いせいで見えるのは前方の兵士の汗で服から透けて見える隆々たる逞しい背中。

「姫様はお逃げください！」

雫ちゃんに対し、後方の兵士がそう叫んだ。

叫んだ兵士は足を止めて、両腰に帯刀していた日本刀を引き抜く。芸術品とまで各国から謳われる日本刀の刀身は所々、刃毀れしており多量な赤い血により半分、紅く染まっていた。だが、兵士はそれを見てチツと舌打ちして道を引き返して行った。その兵士の後を続くようにして、姫様である雫ちゃん――朝露ノ雫の元から離れて後に行く。

「雫ちゃんより弱いあなた達がお逃げなさい！」

頼りない容姿とは裏腹に凜々しい声が戦場に響く。これでは闘えないと判断し、スカートの裾を迷う事無く、手で千切り短くした。

ポニーテイルの位置を両手で直しながらアリアを詠唱する。読みなれた詩のように。

――全ての主神。雫ちゃんはあなたの心に詩う。

捧げるべきものは雫ちゃんの根源。

示す奇跡は貫く雷光。天空の覇者の如く一点を制す。

雫ちゃんを邪魔する者に裁きを。

言霊は神々の雷、ミヨルニル。――

そのアリアが完成した時、雫ちゃんの片手は柄の長い槌を握り締めていた。それが奇跡の試行の結果だった。

「姫様、お願いですから逃げてください」

兵士の一人がそう言いながら雫ちゃんの腕を手取るが、払い除けて銃を持った十人からなる部隊へと突っ込んだ。

部隊は突っ込ませはしないと、雫ちゃんに狙いを定めて硬い引き金を引く。卵が弾けたような怪音の後に銃弾が乱雑に雫ちゃんを目掛けて殺到した。

一発の銃弾が頬を掠める。裂けた皮膚から鮮血が溢れた。それを

痛みで知りながら、目を渴開き横に槌を振るう。

すると雲ひとつ無い夜空から一筋の雷光が現れ、銃弾を雫ちゃんに撃った兵士達の身体を通り過ぎてゆく。兵士達も突然の事で悲鳴を上げる間も逃げる間もなく、墨のように黒く焦げた物体が鈍音を立てて背の高い雑草の中へ消えた。

かつて同僚だった黒い物体を見ながら言葉無く、雫ちゃんの力に衝撃を受けるが……もう、遅い。

何故なら彼の頭上には槌を持った雫ちゃんがいたからだ。口を歪ませながら、躊躇無く振り下ろす。頭蓋骨が見事に陥没し、目を見開いたまま、絶命した。生死を確認せずに獣のように駆けてゆく。たった、数分で人を殺害したというのに精密機械の如く次の獲物を探した。

「強い。あれが姫様のアリア、ミヨルニル。その名が示すとおり、打ち砕くもの」

「ひ、姫様に続け！」

「おう」

「ああ」

それぞれがそれぞれを励まし合い、雫ちゃんに続いた。

五十人いた雫ちゃんの護衛隊が隣国のグランに、一方的に壊滅させられた時点で四人という人数は口に出さなくとも戦力的には絶望的だ。それでも兵士達は祖国である和国に忠誠を誓う身として美しく戦い続ける。

「あれがアリアか！ 怯むな！ 前出る！」

銃を持った二十人もの屈強な男達が小柄な雫ちゃんの前方を塞いだ。一斉に撃たれたら間違いない血だるまになるだろう。避ける算段を思考する間もなく、銃弾は放たれる。

「姫様！」

四人の兵士が一斉に雫ちゃんの盾になるべく、走り出した。一人が間に合い、雫ちゃんに敬礼して銃弾が頭、腕、右手、左手、右膝、左膝、心臓、肺……様々な部分に減り込み穴が開き、血を噴出す。

空に舞った血が周辺に落ち、土を赤く汚した。飛び散った血液は雫ちゃんの上衣にも付着する。付着した血を小指でなぞる。倒れている自分を守った兵士に気を取られているうちに楠木の背後から無数の銃弾が放たれた。

そんなの予測していた。人形如きが雫ちゃんを殺せるはずがない！
「ミヨルニルを……ただの攻撃アリアだと思っな！」

激昂の雫たけびと共に槌を空へと投げる。投げた槌は黄色い光に姿を変え、網目状に地面に突き刺さる。網は見事に銃弾を捕らえ離さない。

「何！ 銃弾が囚われただ！」

「こんな不細工な弾は入りません。返しますよ。とりゃああああ！」
網目状の光に触れ、自分の方へと強く引っ張り離す。網に張り付いていた銃弾は加速度を付け、放たれた方向へと飛翔してゆく。楠木の幹が血に染まった。

どうやら、意図した方向へと正確に命中したようだ。ほっと息を吐く暇もなく、銃弾が雫ちゃんの処へと放たれた。横に跳び倒れ込む。

「っ」

完全に避けたと認識していたが、その認識は甘かった。左足から血が流れ出す。

撃たれた箇所を左手で庇いながら、右手で地面を着き、立ち上がろうとするが左足に力が入らず再び地に伏した。上衣は砂に混じれ、繊細な肌に砂粒が付着している。

そんな状態の雫ちゃんを守る為に残り三人の兵士達が自分達の身体で壁を作る。前方、左側、右側に陣を組んだ。

前方の兵士が刀を地面に突き刺して叫ぶ。

「姫様を守れ！ 言霊は冷徹なる氷の刃、アイスソー」

「調子に乗るな、人外ども！」

言霊が完成する前に突如、出てきた敵兵に心臓を抉られる。

「うぎゃあああ」

前方の兵士は絶命の悲鳴を上げるが、倒れる事無く姫様―雫ちゃんを守る為だけに立ち尽くした。

左側の兵士が敵兵の首を刀で跳ね飛ばす。

「う」

跳ね飛ばした首は勢い良く楠木に打つかつて、草の中に落ちた。

緑の色がすぐさま、赤色に染まりきる。

「あ」

その残忍な人の殺し方を目の前にしてそんな間抜けな声が雫ちゃんの口から漏れた。スカートの中の熊さんパンツが湿ってゆく。恐怖のあまり、年相応の感情が戻ろうとしている。姫としての覚悟という陳腐な鎧が脱げた。

「死んじゃうよ……雫ちゃん……このまま……」

せつかく、みーちゃんが雫ちゃんのとこに帰ってきてくれたのに死にたくない。お人形じゃないお人形がいるのに。雫ちゃんは歯を食いしばった。

「もう、姫様は十分、闘われました。逃げてください」

左側にいた兵士が憔悴しきった雫ちゃんの両手を持ち上げ、そのまま抱えた。

「もうすぐで私達には兵器と味方が届く手筈になっています。後退しましょう」

右側の兵士がそう言った。

が……彼の言う兵器とは雫ちゃんの脳裏に思い浮かぶモノは一つだ。アリアを唯一、無限に使用できる国である和国をも超えるアリアの詩い手、月見観空。みーちゃん。

小さなみーちゃん、雫ちゃんだけのお人形を汚いお人形の血で汚さなければいいのか？いいえ、それは自分が許さない。

「アホ！ 可愛い、可愛いみーちゃんを戦いなんかに出すか！ ボケ！」

兵士の両手を振りきる。

「言霊はミヨルニル、神々の雷」

今の自分の状態では完全な状態のミヨルニルは使えないと考え、力を増幅させる前言霊を省略し、槌を手にした。前文を述べていないアリアと述べているアリアとでは威力の差が違いすぎる。今のミヨルニルでは普通の槌同様の打撃と同時に電気的な衝撃を与える事しかできない。普通のアリアの詩手ならば自分の力をセーブして戦う前文無しのアリアが通常手段。だが、姫様である雫ちゃんは十分にその訓練を行ってはいなかった。

「敵はたった四人だ」

「和国の姫は生け捕りにして食用肉にする」

食用肉という言葉が兵士達の耳に入った。兵士達は互いの顔を見て頷くと雫ちゃんを残してその言葉を言った敵国の兵士に襲い掛かる。二人の兵士が向かってくるといふ事態に焦燥し、それが一気に反撃という形に爆発した。震えた指で発砲、発砲、発砲を何度も繰り返す。

その結果、

「うあ」

「姫様、お逃げ下さい……うっ」

辿り着く事無く地面に伏した。二人は二度と起き上がる事はなかった。

「ミヨルニルさえ使いこなせないのか。こんなところで死ぬるかあああ！」

自分一人しか生存者はいないという事実に冷や汗を掻く。

もうすぐ来るであろう数十人の敵兵の足音を聞き、もはやヤケクソと言わんばかりに走った。

「あひゃん、いや」

「待て、姫。相変わらず、猪のように猛進する事しか知らないんですか、雫さんは」

音も無く雫ちゃんの背中からナイ胸をむにと驚づかみする。そのやる気のない棒読みの声はよく知る人物だった。

「冬架！」

そう呼ばれた女性は、よおと言う代わりに右手をちょこんと上げた。左手は依然として胸を掴んでいる。どうやら、雫ちゃんの胸がお気に入りようだ。

無口な口調に合うようなフランス人形風の顔立ちに左目は漆黒の前髪によつて隠され、エメラルドグリーンの右目は雫ちゃんの愚行に対して頭にきているのか、怒りのような感情が見えた。

左右のツインテールは紫の薔薇の着いた黄色の輪ゴムで形成され、地面に着くか、着かないかの位置まで伸びている。いわゆる不思議ちゃんという系統の女性だ。肌の艶がある事から二十代の女性である事がわかる。ノースリーブのワイシャツをだらしく、着こなしても様になる……悔しいくらいに。チェックのスカートとそのワイシャツの隙間にあるおへそに嫉妬を覚えた。

「冬架！　じゃありません。今回は特別です。朝露ノ漚しか冬架さんは認めていないのですが、今回だけ力を貸しましょう。ただし、力はかなり抑えます。馬鹿姫の力量では扱いきれませんので。私と一緒に勉強したアリアの詩を紡いで」

冬架は胸を掴むのをやめ、雫ちゃんの美しい高貴な金髪の髪の毛を小指でくるくると弄ぶ。

「ありがとう、冬架。え」と

「ごめ、ごめん」

棒読みな為、謝罪している気がしない。だが、それは毎度の事なので何も気にせずに、上空に向かい手を上げる。その手に冬架は手を添える。

そして奇跡を起こす言葉を詩う。

「我が」

「我が」

冬架に続き、雫ちゃん。

「契約によりて我は感情を欲し」

「契約によりて我は望みを欲し」

二人の手の触れた箇所から淡い光が発現する。

「その元で交わせし無限の軌道！」

「その元で交わせし無限の軌道！」

その言葉を雫が言ったと同時に冬架の身体が淡い光に帯び、雫ちゃんの指先近くの上空に留まる淡い光に吸い込まれてゆく。そして、現れる和国最強の神剣。

雫ちゃんの蒼眼に闘志の火が灯る。

「言霊 悠久なる王 エクスカリバー」

幾つもの伝説を築き上げ、その剣に斬れない物はないとも謳われた和国最強のアリア エクスカリバーが雫ちゃんの両手に今、在る。それも二本。

伝説では第三次世界大戦において和国の人々を助けるため、朝露の祖先がロストガーデンを防いだともされる。その他にアーサー王と呼ばれる人物がマーリンと呼ばれる魔法使いから手渡され、彼を英雄にまで開花させたと言われる最強の剣だ。

一本目は片刃の刀身、二本目は両刃の刀身だが、どちらも柄は黄金である。その黄金の中に複数の小さなダイヤが散りばめられていた。

雫ちゃんの両腰には二本の神剣を納める金色の鞘が出現し、淡い光の粒―アリアマターを放出し、それぞれ二本の神剣の柄へと消えてゆく。

「人外が一人で何が出来る！」

楠木の森からその言葉を先頭にして、銃で武装した何十人もの人間が雫ちゃんを睨んだ。

エクスカリバーという剣があまりにも有名すぎる為、その力を誰もが知っている。曰く、持つ者に永遠の体力を与える。曰く、斬れない物は存在しない。優勢なはずの彼らを脅かすのはその伝説が真実なのではないかという恐れ。そして人は得てして得体の知れないモノには脆弱だ。

優勢だった彼らと雫ちゃんの立場は一気に逆転した。それを理解した雫ちゃんは思わず、笑みを零しまった。

「何を微笑んでいる馬鹿雫たん」

両方の剣から声が、冬架の声が聞こえた。

「雫ちゃん達の力にチビってるよ、こいつら」

「チビったのは熊さんパンツたん、だ」

余裕の会話をしている間に何十人もの銃から銃弾が発射された。

雫ちゃんが片刃のエクスカリバーを振るっただけでそれは無効化され、破片が水溜りの中に落ち、泥水に浸かった。瞬時に五十メートルも移動し、首を一閃する。

「人外！」

一人の敵兵はそう言い残して絶命した。

「あれ？ 左足の痛みがない」

左足を見ると紅く血は付着しているのだが流れる気配がない。

「説明していなかったが、二本のエクスカリバーを使用している時はエクスカリバーが痛覚を消し、疲労を全く感じる事はない」

「私に続け！ 至近距離ならば奴だって！」

その言葉に数十人もの敵兵が殺到した。一人の人間を殺害する事など容易い。物量で圧せば容易く勝利できる。だが、その法則は通じない。雫ちゃんはそれを可能とする奥義を思い出した。

そして、実行する。

「死んじゃえ、人形ども！ エクスカリバー融合。真なる悠久の王、冬架！」

エクスカリバーが一本の大剣へと化した。その大剣の長さは十メートルにも及んだ。突きの構えを取り、地面を蹴り、そのまま突撃する。走り抜ける度、人間が串刺しになってゆく。

五人もの人間がエクスカリバーに突き刺さり、刀身が一瞬輝いた。すると、突き刺さっていた人間が黒灰と一瞬にして化し、地面に落ちた。

雫は膝を付き座り込む。雫の左足から血が勢い良く流れ、窪地で水溜りを形成していた。

「あああああ」

痛みに耐え切れず苦悶する。

「思った以上にヘタレだ。エクスカリバーの本来の力に耐え切れな
いなんて。誤算ですね」

人の形を形成した冬架が蹲る雫ちゃんを見てそう冷然とした態度
を示した。冬架に一応、給料をあげているのは雫ちゃんが統治する
和国なのに酷い仕打ちだ。

鋭い風が雫ちゃんの頬を撫でる。

「跡形もなく吹き散らせ血を……」

「もらった！」

二つの声が雫ちゃんの頭上から聞こえた。

「な」

地面の影を見て上を向く。

「雫たん！」

雫ちゃんの頭上に二人の敵兵がナイフを持って殺到する。

もう、駄目だ……。ここで雫ちゃんの人生は終わる最期に、

「みーちゃん、和国をお願いします」

俯きながら静かに呟いて眼を瞑った。

何秒、待っても雫ちゃんに終りは訪れない。はっとして頭上を見
入る。

強い光線が頭上の二人の敵兵を貫いていた。

一人は光線が頭に当たり即死し、泥水の中へとダイブした。もう

一人は光線が足に突き刺さり、頭から硬い岩に落ちて首の骨を折り、
泡を吹いて絶命した。

光線に見えたのは、淡い光―アリアマターで形成された剣だった。

「誰？」

「誰？」

冬架と雫はその剣が飛んできた方向へと振り返る。

そこにいったのは屈強な男でも、美麗な女アリア使いでもない。

幼いツインテールの女の子だった。両前腕には水色のリボンが巻か
れている。月見観空だ。みーちゃんだ！

はーねえに会わず顔がなくなってしまい、途方に促れていたら…
…変なモノを発見してしまった。奴当たりには調度良い！

私の周囲にはアリアマターで形成された剣 ケテルが十本浮かんでいた。嗚咽しながら青い顔をしてゆっくりと歩む。

「みーちゃんなの？ 翼がない。完全なるアリアの象徴が！」

馬鹿姫、基、雫はそう言い、私の身体を支えようとするが無視した。虚勢を張らないと立っているのがやつとだ。

十一対の翼を私の時でも展開してアリアを使用できたら、馬鹿姫とじやれる余裕があるものを。和国の人間ではない私がアリアを使用するには自分自身を形成している身体に含まれるアリアマターを使うしかない。それは命を削る行為に等しい。尤も、そんな芸当が可能なのは私だけらしい。人間はアリアを貯蔵できないからな。つまりは化け物の証という事だ。

「咄嗟に……力の発現と……力を抑える事は……セフィは苦手なんだ。それよりもまだ、いる。セフィ。ケテル完全開放……」

十本のケテルを伴い、私は楠木の群衆へと入ってゆく。

「観空。貴女の身体が！」

「この状況を打開する為にやるしかない。ケテルならいける。コントロールは私が付ける」

走りながら自分の中にいるセフィロトに言った。

「ですが」

「今はそういう気分だ。大丈夫。私は、ばけもの、だ」

流れる涙を吹こうとしなかった。

楠木が一本も生えていない場所へと出て、敵兵が六十人いる事を確認した。十本のケテルが私の意思により、敵兵へ次々と心臓部に的確に突き刺さる。

「みーちゃん。雫が冬架と！」

悲痛の叫びが楠木の森に響き渡った。左足が痛みにより動かない状態の雫では不可能だ。

「冬架を完全に使いこなせないからまだ、姫なんだろうが人間。人間と化け物ならば、化け物が戦うのが道理だろう？」

そう叫びながらも敵を殺害する手は止めない。私、自らもケテルを握り締めて、一人の敵兵の喉元を割切る。

「うが」

低い唸り声を上げて倒れてゆく。返り血が左目の中に入った。

「違う！ みーちゃんは化け物じゃない！」

『そんなこと無い！』

はーねえの言葉が脳内に再生される。

その間にも六十人いた敵兵が三十人へと減っていた。

「言霊は最期の剣、ケテル」

九本のケテルは私の言霊とともに現れる。九本というのが不満だと、唇を噛んだ。

「骨を打ち砕け！ これが化け物の戦いだ」

『そんなこと無い！』

九本のケテルも首、眉間、目、頭等の人間の最も弱い箇所突き刺さり、ケテルの本数分の人間が倒れてゆく。

「げほ。血なんて関係ない。私は人間じゃない」

私は気づかぬ間に、肩に一撃、両足に一撃ずつ、銃弾を受けていた。だが、私は無意識に骨や筋を痛める事無く避けていた。それでも多量の血は流れ、嗚咽する。同時に血が口から吐き出された。

「心臓を貫け！ 肺を打ちぬけ！」

言葉通り、近くで肩を震わせていた若い兵士の胸と肺を二本のケテルを手にして突き刺した。抜くといった無駄な動作は一切しない。僅かな時間で私の意思から外れたケテルは消失してゆくからだ。

『そんな事ない！』

「もう、やめてくれよ。小さな女の子が血塗れになる事、ないだろう！」

土下座をして命を乞う兵士に対して宣告する。

「駄目だ！ 化け物には慈悲なんかない。そう……慈悲なんか……」

ないんだ！」

頭を地に伏していた兵士の頭部から串刺しにする。ケテルの先端が顎を突き抜けて見えた。

化け物だからこんなにも惨い戦い方が出来る。月見観空ではなく、化け物としての方が存在は確立されるのではないだろうか。今の月見観空がそれなのだから。

>六<

あたし、月見遥は観空の話を冗談だと思いながらも何処かで、もしかしたら思っていた。

朱さんと一緒に楠木の森を抜けて広い広場のような開けた場所に出る。

そこにあつた光景は今までの月見観空というあたしの妹の存在の定義のようなものを完膚なきまでに崩壊させてくれるものだった。望んでいないのに……。望んでいないのに！

「はーねえ、こんな私でも私は、月見観空？」

あの優しかった観空が悪魔のように微笑んで涙を流しながら、

「あああああああああああああ！」

獣のように叫びながら既に息の切れた兵士の胸を何度も光る剣のようなもので突き刺して、突き刺していた。

「ああ……本当な……んだ……みそら」

涙と共に観空の話が、朱さんの話が全て真実だという事がわかった。

そして、この光景。観空の周囲に広がる数分前までは人間だったモノ。赤く染まった血溜まりの中に腕、足、手、頭、上半身のみ、下半身のみ。それは一体だけではない。少なくとも四十人以上もの五体不満足の人間が転がっていた。

一筋の月光に照らされた観空は疲れ果て体育座りをして、じっと私を見上げていた。

その哀れで円らな瞳は昔のように語っていた。

『私が誰なのかを知っている？』

あたしは昔のように答える事ができなかった。

人というものはなんて儂く脆いモノなのだろうか。まるで溢れそうなコップの水のよう……。

そう……あたしの心の中に響く。

一章、灰色の世界

一章、灰色の世界

>—<

漆黒のカーテンを被ったような夜空を体育座りで見上げながら、私は私という怪物を見つめていた。両手を仰ぎ見る。肌色であるはずの十本の指がべつとりとした血で染まっていた。血が指から前腕を伝い、肘の先端から零れ落ちた。肘から何度も膝へと滴り落ちる。それは何度、見ても慣れない光景だった。だが、そうしなければ、この世界に居場所などなかった。

いや、この世界にさえ居場所はない。

「私は……人間にも、和国の人間にも、なれないし！　そもそも、私は本当の私は何なの」

「観空」

「はーねえ」

「あんたの本当の名前が分からなくても、あんたの誕生日が分からなくても、あんたの出生が分からなくても……」

「うわぁ」

私は月見観空という仮の居場所を見ず知らずの月見遥にもらった時のように、両手では「ねえ」に抱きしめられた。

「あんたが月見観空という仮の居場所を手に入れた時から、あたしは観空の姉になるって決めたんだから。姉は妹をこうやって静かにぎゅって抱きしめてあげるもの。束縛もしないから自由に自分を見つけないさい」

「はーねえ」

だんだん、眠くなってきた。目を瞑る。誰かが髪を撫でてくれている。ここが私を見つける為の居場所。

あたしは眠りについた観空の髪を撫でる。血に塗れて汚れてしまった水色のリボンを解き、スカートのポケットに仕舞った。

「観空には血は似合わないよ」

ルビーのように煌びやかな赤い髪を手にとっては撫でる。

「みーちゃん！」

あたしと観空の元に訳の分からない熊さんパンツ丸見え痴女と、サラリーマンのヤル気なさを纏ったワイシャツの女性が猛前途、走ってきた。どうやら、みーちゃんとはあたしの超キュートな妹の渾名のようなのだ。

痴女は右手を振り上げて、左足を左手で庇うようにして歩いている。乱雑に結ばれた包帯が巻かれている事から怪我でもしているのかな。観空よりも背が高いけど、観空に似て裏のない無邪気な笑みを浮かべている。可哀相な母性本能を刺激させられた。警戒という防衛本能を遂行すべきなのだろうが……その時にはなれず啞然としてしまった。

痴女の後をやる気の無さそうに片手を振り上げるという痴女の真似をしながら、ワイシャツの女性が後に続いていた。

二人はあたしが目視できる位置に止まった。

「誰？」

むっと睨み仁王立ちする痴女の熊さんパンツを凝視しながらあたしは言った。痴女の熊さんパンツは少し、染めている様で熊さんの黒い鼻の色が濃くなっていた。

あたしは両手で口を押さえ、笑いを堪えた。笑っては駄目だ。でも、熊さんパンツにお洩らしても。

「あなたこそ、誰？ みーちゃんに何をしようっていうの人間！」

言霊は神々の雷、ミウルニル」

人間ってあんたも人間だろう？ って言おうとしたあたしはそれを言えなかった。いや、答えはすでにあったのだ。

痴女の手から具現化される淡い光が徐々に、急速に何かを形取っ

てゆく。痴女はアリアで形成された光状の槌を両手で構えた。

いきなり、敵対心剥き出しと思いながらも人を殺すような迫力で迫ってくる痴女にこう言うしかなかった。

「魔法、アリア！」

「死ね、人間！」

脳天に渾身の一撃を繰り出す為息を荒くさせて、止まる事無く痴女は走り続けた。

あたしは妹の頭を抱きかかえながら自分の死を確信して、せめて観空だけは無事で、と願って目を閉じ、最後の抵抗とばかりに罵倒を浴びせる。

「ふざけんなよ、熊さんパンツチビリ女あああ！」

「それには同意です。やあ、馬鹿な雫たんにお似合いです」

ワイシャツの女性はあたしが月見観空の知り合いであろうと理解しているのか、平然と棒読んでいた。ならば、助けなさいよ。

「おっと、ストップ。何やってんだ！」

聞き覚えのある声に恐る恐る目を開けた。

猛牛のような痴女の前に声を荒げながら朱が空から現れたのだった。どうやら、アリアというのは空をも自由に飛べるようだ。今は朱のダサイセンスのマントが、風に翻る姿が稀代の英雄のように思い、マントに向かい、両手を重ねて拜んだ。

「止めるな、人間を殺すんだ！」

痴女は朱を鋭い眼光で睨みつけた。

「人間なんだけど、過去の人間だよ。ほら、連れてくるっていでしょ、姫様」

にこやかな顔で朱は痴女に言った。

「あなたが……みーちゃんの姉の月見遥」

痴女はあたしの顔をじつと見て、自分の言った事が本当かどうかを区別しているようだ。くりくりした蒼い色のお目目がキュートだ、抱きしめたくなる。目のくりくり度が何処となく観空に似ているような気がした。

「……むうむうむ」

そうアニメ声風の唸りを上げて、

「私のはーねえは世界で一番美しい。セミロングの髪は艶々。あ、そうだ。紺色の制服を着るとさらに美しくなるのだ。一度、馬鹿姫にも見せてやりたいものだ」

いきなり、澄ました観空口調で喋った痴女。

「怖いんですけど」

石化したように不気味なくらい静であるあたしの正体検索中の痴女を見てそう言葉を出した。

「は、はじめまして、お姉様あ！ 雫ちゃんは和国の姫、朝露ノ雫です。いずれは正式にお姉様の義妹になるもんでーすう」

先ほどの殺気に満ちた声から一変して猫撫で声に変わった。女優もびっくりな代わり映えだ。

「ちよつ、何、このネジの外れた人？」

あまりの態度の変化の早さに驚き、反射的に後退りした。

「病気ですから気にしないで。私は冬架。よろしく」

冬架と名乗った女性は人形のように直線的なお辞儀をした。棒読みがアイデンティティーなのか、また、棒読みだ。

「よろしく……何……これ」

ついにファンタジーな様相を見せてきた現実に対処しきれず、脳が強制的にシャットダウンを起こし、上体が地面へと落ちそうになる。

「お、お姉様！」

俊敏な身のこなしであたしに駆け寄り、両手で身体を支えた。それを確認するとあたしはすっと、気を失った。

ちよつと穴掘りへとか言う朱と別行動を取る事になって、楠木ばかりが自生する森を出てから約三十分。さらにあたしが冬架からの世界での現在の時刻を聴いて十五分。時刻を聞いた時に冬架から貰った腕時計は午前四時三十分を差していた。

馬車の窓の景色が変わってゆく。大きな建物が何一つとしてない草原が目に見え込んでくる。横転して放置してあった為、錆付いている軽自動車。窓ガラスの破片は既に何処にも見当たらない事から途方もない年月が過ぎたのだろう。その自動車が横転している場所は通常では考えられないマンシヨンのベランダのような場所だった。もつとも…マンシヨンという具体的な場所は憶測だ。マンシヨンのベランダ部分だけが残り、砲台を損失した戦車の上に乗っかっていった。

景色が変わる中、そんな絶望的な風景があたしの心を不安という感情に震わせる。

先程から黒い雲が上空に居座っており、その影響で陽は陰り、ダークグレイ模様の空が世界を包んでいる。下界にはダークグレイの色が感染してゆくような悪意に染まっていた。それは人がここで争ったという痕跡。

かつては人間の力で舗装されていただろう大地は背の高い草が自生し、その大地の上には大小問わず乱雑に人の骨が転がっていた。小さな頭蓋骨も含まれていた。その頭蓋骨は何か硬いもので叩かれたのか、見るも無残な亀裂が頭上から顎の部位に掛けて走っている。恐らく、七歳くらいの子どものものだろう。

「馬車を止めなさい、霧神」

普段のおちゃらけた雫の声からは予想のつかない凜とした声が木製の馬車内に響いた。その声に馬車内でトランプを使った婆抜きをしていた冬架、あたしは雫を見る。

「はい、雫姫」

馬の愛くるしい声と同時にゆっくりと馬車は停止した。それを待てないばかりに立っていた雫は手に持っていたカードをソファアの上に投げ捨てると、そのまま、外に出てゆく。冬架は雫の投げたカードを手に取り、むすつと頬を膨らませた後で外に出た。あたしはそれを拾い見る。

ジョーカーだった……。

取り残されたあたしは膝の上に乗せていた観空をソファアの上に起こさないようにゆつくりと置く。観空の可愛い寝顔を見つめた後、左頬に軽いキスをして雫達を追いかけた。

「やはりか」

「そのようですね、雫たん」

骸骨のそばに置いてある水色のリボンが結ばれたカチューシャを冬架は握り締め、無表情棒読みな冬架には珍しく、涙を流しながら諦めにも似た怒りの表情が見え隠れしていた。

頬を伝う涙に冬架本人も驚いているらしく、涙に触れた。

近くには泥水が入った皿とその上に乱雑に置かれたスプーンの上には腐敗した肉が在る。

「人間の所業なの。だとしたら、あたし達、人間はなんて罪深い」

そうあたしの口から無意識に溢れた。それはかつて、あたしの著作したライトノベル『魔法の園のアリス』で主人公亜理須が魔法の力を得て何でも願いを叶える代わりに人の心の声を聞いてしまうという亜理須が言った台詞だ。ちなみに亜理須のモデルは月見観空だ。

「その人は……」

「……」

「奈式風羽。月見観空先生の教え子の一人です。観空先生にみそらん先生というあだ名を付けて慕っていました」

静かに両手を合わせて死者への哀悼を奉げる雫の代わりに、隣でじつとしている冬架が淡々と答えた。

「どうして……こんな」

「食べられたんですよ、和国の外の人間に」

あたしの呟きに対して冬架は充血した目を擦りながらそう言った。カニバリズムという言葉がある。それは人を人が食べるという行為の事を示す。絶対的なタブーである言葉を日常に有り触れている事実であるように断定した冬架。あたしはただ、条件反射のように言うしかなかった。

「なんで！」

服も何も身に着けていない骸骨という残酷なそこにある真実をも
う見てもらえない！

目を背け、観空の眠っているウサギ耳付きのピンク色の馬車を見
つめる。涙で歪んで見えていた。

「和国の人間を食べれば、自分達もアリアを無限に使えると真実で
あるかのように信じられているんですよ」

淡々と雫が語った。

「あるはずがないのに」

「手遅れだった。今日はこの子の搜索の為に観空さんと朱たんとい
う最強のアリア詩い手なら安心と思っていたが、こういう結末なん
で。流石に冬架さんでも堪えられない」

まだ、冬架とあたしが沈痛な表情を浮かべているのに対して、雫
は涙を流すことも悲痛な表情を浮かべる事無くあたし達の間を通り
過ぎてゆく。

「涙を流している暇なんかありません。早く人間を一人残らず根絶
やしにしてやる」

そこにいるのは馬鹿姫 朝露ノ雫ではなく、和国の復讐姫 朝露
ノ雫だった。

>二<

「ここ、東京、だったの？」

古ぼけた案内標識に東京という文字だけが辛うじて読み取れた。
その読み取れた標識によりあたしはそう驚愕の声を上げた。

案内標識は長い間、雨に曝されてきた為、雨が流れた後がくつき
りと残って、青さが薄くなっていた。

道路のコンクリートは無残にも剥がれて柔らかい土が見えていた。
こうなってしまうと、文明の利器である自動車は満足に走る事はで
きないだろう。

「これじゃあ、車も走れない」

「和国には車を作る技術なんてありません」

あたしの膝の上で猫のように左頬を擦りつけながら観空は気だるそうに答えて立ち上がる。

「そう、なんだ。それより、もう起きて平気なの……観空？」

「私は化け物だ。これくらい。それより脱ぐ」

そう言い、観空は自分の着ている血塗れの上衣を投げた。

「わぷつ。むう、みーちゃんの匂いつきお洋服う」

投げられた上衣を目にも止まらぬ速さで雫が回収する。額には先程の婆抜きで負けた罰ゲームとして『みーちゃんの奴隷』と墨で書かれていた。続いて投げられてきたスカートもばっちり回収した。その変態ぶりはあたしの今までのファンタジーにおける姫様像を完全にぶち壊してくれた。だが、雫の変態ぶりは留まる事を知らない。「冬架！ グランから奪取したデジカメを持ってきたか？」

観空のちよつこんと存在する桜色の乳首を凝視し、舌なめずりをする雫にデジカメが手渡される。すぐさま、観空の谷間など存在しない芸術的なまでに平地な国宝的な胸をデジカメを構えて撮った。連続してピッコンという間抜けな音がするが観空はそれに動じる事無く、ソファアに座った。

「雫たん、後で観空さんの可愛い写真を私様にも見せてください」
悪乗りする冬架。

「わかつてる、わかつてるん。ふんふんふん。らんらんらん、みーちゃん、すごかわいい、ふんふん、らんらん、雫ちゃんのみーちゃん可愛ゆい」

「馬鹿だな。身体の形なんてただの飾りだろう」

奇妙なダンスを踊りながら、雫はまだ、筋肉というモノが発達していない今にも折れそうなほど細い未成熟独特な太ももを撮る。ついでにくびれない幼児体系なお腹も撮った。

あたしは馬鹿姫と悪乗り不思議系女性の愚行に頭を抱える事しかできない。これが本当の固まるという文章表現なのだろう。

とはいえ、観空がだらしない格好をしているのは姉として許せな

い。

「はい、お洋服。着てなさい」

馬車に備え付けられている白い箆笥の中から勝手にゴスロリ系のブラウスを取り出し、あたしは観空に手渡した。

「ああ、馬鹿姫がくれた百着目の服ですね。とても動き難い服だからそこに捨てておいた」

着るのがとても嫌そうにブラウスを見つめる。その瞳はえっ、こんな襟元に赤色のリボンが付いている軟らかそうな素材でできた薄い赤色の上衣に、おまけにレースの裾付き。スカートは乙女チックな赤いリボンの刺繍が左右二つずつに薄い赤い色……なんだこの大人な観空様には似合わないと言っていた。その心情を知り得たのは長年、姉という立場にいるあたしだからだろう。得した気分になり、含み笑った。

観空は自分で白い箆笥を覗くがそこには大人サイズの洋服しかなかった。仕方なく、手に持った夢いっぱいのブラウスとスカートを着る。

着終わるのを待ってましたとばかりに雫が隠し持っていた赤色のリボンでツインテールを形成した。その犯行は僅かな時間内に行われた。

そして、素早くシャッターボタンを押す。

「雫たん、保存しましたか？」

「保存しました、冬架」

「らぁんらぁん。らぁん」

「ららりやりやぁん」

観空の生着替えという思いがけない釣果に雫と冬架は両手を繋ぎ、二人の中心が輪のような形になるように保ったまま、狭い馬車の中を縦横無尽に踊る。一人は乱雑にただ、楽しく。もう一人は無表情な機械的な踊りを魅せた。

「楽しい人、達」

あたしのファンタジー世界が馬鹿姫に踏み壊されてゆく。

「狭いのには踊るな、馬鹿姫」

観空の足元付近に雫の白いハイヒールが来た時、大げさな動作を付けて白いハイヒールの爪先を踏んづけた。

「うぎゃあ。何、するんですか、みーちゃん。仮にも私は和国の姫。みーちゃんは怖くないんですか？」

痛みに飛び上がりながらも偉そうに言う馬鹿姫。

「無礼な態度を取った罰を受ける前にエクスカリバーを粉碎して、和国を壊滅させる事くらい簡単にできるぞ」

至極真面目に和国壊滅プランを頭に巡らせるくらいはやるあたしの妹はそう言った。

「具体的には……ガソリンを撒いたダンボールハウスの中に雫を閉じ込め、火炙りにするというビジョンが頭を過ぎり、どうしてもにやついてしまう」

「うわあ、みーちゃんからどす黒いモノが！」

雫が観空の周囲から放出される悪意を感知した。

あたしはテーブルに置かれた小瓶にあるパンの耳を一本、手に取り言った。

「観空がキレタ。たまには良いかな」

あたしはパンを半分に折り曲げたり、また戻したりしたと自分でも意味不明だなと思うことをしていた。

「あ、本当だ」

冬架は何処か面倒そうな口調で棒読む。

馬車が左右に激しく揺れる。あたしは咄嗟にテーブルに掴まった。揺れはすぐに収まった。

「よく兵器を刺激するような話が出来ますね、姫様。私には恐ろしくてできませんよ」

霧神の声がした後、馬車は元通り、規則正しい微動を起こしながらゆっくりと前進した。

「みーちゃんは優しい人だから怖い事できません、ぷにい」

弾力のある幼い子独特のマシユマ口のような観空の頬を人差し指

で押す雫。

「それはどうかな。殺すよ、人間」

「そんな事言つて、ぷにいゝ。できないぷにいゝ」

さらに調子付いて観空の頬を押す雫。

「それはしないと思いますけど……生死に関係ない悪戯的な仕返しはしますからあまり、観空を刺激しない方が良いと思いますよ」

早速、仕返しをする為に動き出そうとした観空をあたしがぎゅつと抱きしめ、自分の膝の上に乗せ、手に持っていたパンの耳を観空の口に咥えさせた。

雫はバレバレのアイコンタクトで冬架に何やら合図を送った。冬架はこくと首を縦に振る。

「そんな事あるわけないぷにい」

オリジナルの語尾を付け、観空の両頬を交互に冬架は人差し指で押す。

「ふ、まあ、馬鹿姫。それでも飲み、お前の好きな砂糖入りのコーヒーだ」

器用に観空はパンの耳を咥えながら言った。

観空は不気味な笑みを浮かべると、妖精のレリーフが描かれた青色の箱を開け、そこに数ある瓶の中から一つの瓶を取り出す。

「ぷにい！」

観空の提案に雫はそう声を出して喜んだ。

観空はパンの耳を手を使わずに口で器用に消化しながら、コップをテーブルに置き、瓶の中の砂糖入りコーヒーをその中に入れてゆく。仕上げに青色の箱を開け、青色の箱の中を冷やしていた幾つもの氷の中から大きな氷を一つ選ぶと、それをコップに入れる。勢い良く、雫の頬にコーヒーの露が飛び散った。

「最近、下痢気味だなんて感じた事はないか、馬鹿姫？」

「うわぁーい、ごくごくう」

観空の言葉を聴かずにテーブルの上に置かれたコップを両手で支えながら勢い良く飲み干す。飲み干した後、雫は唇を前腕で拭く。

雫が飲み干したのを確認してから観空は、

「ほれ、原因はこいつだ」

と言って雫の隣にある脱ぎ捨てられた観空のスカートの中から小さな小瓶を取り出す。

その小瓶のラベルには『すぐつく効く下剤』と観空の適当な字で書かれていた。

「あ！ こつちでもこんな妙なモノ作ってるの、駄目没収！」

あたしは観空の手の中にある下剤の小瓶を掻っ攫う。

「はーねえ！ 私の自信作、返してくれ。もう、馬鹿姫にしか使わないから」

「駄目」

馬車の窓から小瓶を投げ捨てた。小瓶はガードレールの残骸に打つかつて、小瓶が割れる音を響かせる。物欲しそうな瞳で窓の枠に両手で掴まり、その間にだらしなく顎をつけている観空の視界から小瓶は消えていった。

「ちよつ、今の下剤入りなんですかあああ」

両手で腹部を押さえながら、空のコップを片手に持ち苦しそうに言った。

「常に馬鹿姫の飲み物には下剤入りだぞ、自作だぞ、お前の為に自作だぞ」

自慢の下剤を失い、落胆している観空は投げやりな声を上げた。

あたしは馬鹿を極めると下剤の無効力化を手に入れられるのかと一人、頷く。感心したのではない。呆れたのだ。

相変わらず、窓から見えるのは灰色の世界だ。

人の骨が無数に広がり、ボロボロになった汚い布切れが宙に舞う。駅前で見かけるような巨大ディスプレイが今は何も映す事無く、地面に寝そべっている。巨大ディスプレイの破損したモニタから楠木が映えている。その周辺にも廃材を縫うようにして、あるいはその上に新たな自然が息づいてきている。

灰色の世界は始まりの世界でもある。

曇っていた世界は晴れ渡り、息づく全てのモノを照らす。

四輪で馬一頭の力で進む人の乗る籠のみの馬車が数多く通り過ぎてゆく。あんなにも凸凹していた道から石を敷き詰める事によって舗装された道へと変化してゆく。

周辺で道の整備をしている土木関係者が手を振る。彼らは皆、奇抜なウサギ耳付きピンク色馬車が自国の姫、朝露ノ雫専用の馬車だと誰もが知っているらしい。そんなにも親しげに接する事が出来るのは雫の馬鹿能天気な性格がそれを可能にしているのだろう。

あたしは観空の良い遊び相手だ程度にしか好感を持ってないのだ。観空と雫の二人を観察する。

観空は喚き散らす雫を完全無視し、ぼんやりと窓の枠に両手を出して、子犬が自動車の窓から身体を乗り出しているのと同じように観空は身体を乗り出していた。その間にも雫が喚いていた。

「自作なんですかぁ。さすが、みーちゃん。賢者様！　っていうと思いますか！　あ、お腹さんの具合がぁあぁ！」

「賢者って称号、お前の周辺の人間しか言っていないだろう。というか、簡単に人の渾名を増やすな。コアラんみーちゃん、死を招くもの、全てを知る者、破壊神とか何の脈絡がないだろう、馬鹿姫」

お腹を抱えて蹲る雫に下痢止めと書かれた小瓶を手渡そうとしたが、観空は躊躇する。結局は渡す癖にとあたしはくすっと含み笑った。案の定、馬鹿姫である雫の為に適正の量だけ、錠剤をああとという唸り声を上げている瞬間を狙って雫の口の中に放り投げていた。

「苦いよ、みーちゃん」

「当たり前だ、薬だからな」

「さすがは馬鹿姫。あの兵器は姫様の事を気に入っているようだ。姫様の和国の為ならば、ロストガーデンを使う事を意図はないだろう。だが……馬鹿姫は……」

雫と観空の漫才のような会話を盗み聞いていたのだろうか、霧神がそう小さく呟くのをあたしは風に乗ってきた霧神の声で知った。嫌な奴は何処の世界にもいるものだと思いを横に振った。

「何？ あの大きな門」

前方の窓を覗くと東京タワー程の高さとベルリンの壁のような果てしない長さの両方を兼ね備える壁が見え、その中心くらいに大きな門が見える。驚愕のあまり咄嗟にそれを指差しながらあたしは質問したのだ。

「あれはアリアゲートです。壁が周囲を囲み、門は前門と裏門両方あり、その周囲内にある和国の領土をいかなる攻撃からも守つてくれます。エクスカリバーに次いで朝露家の奥義とされるアリア 天使の羽根が前門と裏門に付与されているから可能となっているのです」

自慢げに、観空は解説をした。これには実は意味がある。自慢げにという事は褒めて、褒めて、構つてのサインである。全く健気な子だ。すごいねという意味を込めて観空の頭を撫で撫でした。

「えへっ！ 凄いでしょう、お姉様あ」

本来、自慢げにするべきはずである雫もやはり、自慢げに言つたでもちよつと待てよ小説家、朝露ノ遥。こんな若い子がそんな凄い術を使えるはずがない。自分が物語を書くとしたら使えるのは杖を突いた老魔法使いだ。待て待て、それよりも気になるファンタジーワードを話さなかったか。あたしは首をちよつこんと傾ける。

エクスカリバー？ エクスカリバー！

「エクスカリバーがあるんですか！ あの最強の剣のエクスカリバーを手にとってみたいんです、あたし！ エクスカリバーを貸してください、馬鹿姫さん！」

観空の解説の中に『エクスカリバー』という憧れの聖剣の名が挙がつていた事を見逃すわけもなく、雫に問い詰めた。雫の偉そうな態度を無視して、雫の両肩を激しく揺らす。

「ばかひめゝ違うよ。めがまわるうゝ」

「……」

雫の哀れな姿を見て自分は黙つていようと冬架は沈黙する。それが命取りですよ。

「冬架さんがエクスカリバーを所有しているんですか！」
それがそういう事を意味すると勝手にあたしは解釈した。

「私がエクスカリバーです。尤も、唯一使いこなせるはずの朝露ノ
雫姫がヘッポコなので、エクスカリバーたるお姿はお見せできませ
ん」

雫のように目を回したくない冬架はあっさりと断った。

「いや、いや、見たい、見たい！」

憧れのエクスカリバーを見てみたいという一心だけで冬架の両肩
を揺らし続ける。あたしの心には今、二本の剣が金色に輝いている！

「みーちゃん、何でお姉様は壊れているんですか？」

今も冬架の両肩を機械的に揺らし続けるあたしを見ながら漠然と
問う。

「はーねえは物書きでエクスカリバーは物語の中ではよく最強の剣
として描かれる事が多い。だから憧れているんだ、強大な聖剣にな」

>三<

みーちゃんの姉であるお姉様が望むのは聖剣エクスカリバー。正
義を行う為の力。でも、雫ちゃんが望むのは全てを破壊できる魔剣
のような力。それを持っているのに怖がって使うことができないみ
ーちゃんを見て言った。

「そんなに、いいもんじゃないですよ。雫ちゃんはみーちゃんの口
ストガーデンが良かった」

みーちゃんの力を私にちょうだいと言った。

みーちゃんはいつものような雫ちゃんを馬鹿姫と呼ぶ時の年相応
の無邪気な子供の仮面を投げ捨てて、悲しみも嘆きも哀れみも同情
も、そして諦めも混じった混沌とも呼ぶべき深い笑顔を浮かべなが
ら、

「馬鹿姫、本当の化け物の力を望むな……。いいもんじゃない」
そう雫ちゃんにだけしか聞こえない力無い声で呟いた。

時刻は午前八時を差している。その腕時計の短針を見つめながらあたしはようやく城下町へと到着したのかと思い、窓から城下町の風景を眺望する。

奇抜なピンク色の馬車がアリアゲートの前門を通過してゆくと、そこにはモーセが海を真つ二つにしたような光景が広がっていた。馬車が通過する予定の通路右側に数え切れない程の国民。

「お帰りなさいませ、姫様！」

とカフェから丁度出てきたメイド喫茶の女性店員が深く頭を下げた。

「姫様！」

と八百屋の中年店長がご自慢の大根片手に馬車の方へと手を振った。

馬車が通過する予定の通路左側に数え切れない程の国民。

「姫えええええ、萌え！」

と雫が印刷された紙袋を両手いっぱい持って、リュックサックを背負った男性が叫んだ。

「姫様、和国に栄光あれ！」

自分の横をピンクの馬車が通過するのを見計らって老人はあらん限りの声で叫んだ。

「悪い人間達から私達を守ってください。姫様あ」

ピンクの馬車の窓が開いている事に気づいた七歳くらいの少女が両手を伸ばして小さな黄色の花を窓の向こうにいるはずの姫様に手渡そうとしているのだろう。少女は自分の長髪が乱れるのを気にする事無く、走り続けた。あたしが席を立ち上がるのを観空がそつと手で制する。

「渡しておこう」

一生懸命、馬車の横を並走している少女に優しく微笑みかけ、観

空は少女の手の中にある花をそつと摘み取った。

「いやあ！ さつさとあんななんか消えればいいのに！」

少女は咄嗟に観空の手を払う。少女の先程まで満面の笑みを浮かべていた顔が今や、凍てついた絶対的拒絶を浮かべて観空を睨みつけ、眉はあまりの恐怖から顰めている。観空が触れた指先が汚いと言わんばかりに指を摩りながら足早に去ってゆく。

「何、あれ？」

あたしはその光景を見て腑抜けた声を洩らした。強大な力を持つ観空の存在は彼らにとっては英雄のようなものではないのかと憤りすら覚えた。

「あ」

観空はそんな間の抜けた声と一輪の小さな花―菊芋をあたしの両手の半分サイズの両手で強く握り締めながら……何かをぶつぶつと呟いた後、あたしの横で涎を床に垂らしながら眠っている雫の頭に菊芋の花をそつと乗せる。

菊芋の花があんな小さな子まで、雫という姫様を信頼しているという証なのだ。その証を無意識に雫は両手で抱き、外的から身を守るかのようにぎゅつと。あたしだけは同情して良いよねと俯き、雫を見下ろす観空に視線を送った。きっと、あたしが観空の一番欲しい証をいつか、探すよ。

「馬鹿姫、お前のファンからだ」

観空は雫の口から流れる涎を指で拭き取る。拭き取るその指を、
「ぱくりん」

目を覚ました雫が口に含んだ。

「おい」

苛立つ観空の声には耳を貸さずに口に含んだ指を舌で器用に舐めるべし、舐めるべし。

「れるれる、れるれる……うん、みーちゃん味」

「返せ、私の期待をな」

みーちゃん味という訳の分からない新味覚を生み出した雫に対し、

観空は物理的な暴力に訴えるべく目を左右に走らせながら強力な打撃を与えられる武器を探していたが見当たらない。そんな観空の肩を叩き、冬架は自分自身の顔を指差す。あたしの解釈が正しければ、私を使えと言っているのだろう。すぐに観空は冬架の腕を掴んだ。

「冬架パンチ、どぴゅーん」

冬架はそんなやる気のない声を出し、拳を形取り零の脳天に直撃させた。

「うぎゃあ」

相当、本気で打ちこまれたようで律儀に菊芋をテーブルに置いて、遙の膝の上で頭を抱えて悶えた。それを哀れに感じたあたしは観空と冬架に対して言う。

「めっ」

二人のおでこにでこピンを食らわせた。冬架は無表情のまま、動じる事がなかったが、観空はでこピンが到達する瞬間から目を硬く閉じていた。

「姫様！ 何故、兵器をまだ、廃棄なされないのですか！」

二十代くらいの優男が言った。

「兵器などなくても私達のアリアで敵を粉碎出来ます！」

三十代くらいの主婦らしい風貌の女性が勇敢にもそう声高に宣言した。

「朱様、アリアマスターがいるじゃないですか！」

十代の学生服を着た少年が石を馬車に投げつける。

「こら、何をする少年！」

霧神が注意するが、十代の学生は馬車に向かって投石を続けた。

「どうして！ お前、五十万人もの人間を一瞬にして殺せる兵器の癖に！ お前が躊躇しているから……和国の人間、友達がどんどん死んでゆく。もう、お前なんか頼らない！ さっさと消えろ！」
十代の学生服を着た少年を含めて……街の人……皆が憤怒している。

「小さな女の子は純真でいるべきなのに。勝手だ、この国の人は」

呟いた。心が冷めていた、あたしは。

「兵器廃絶！」

「兵器廃絶！」

「そつだ、兵器廃絶だ！」

群衆が一齐にそれらの言葉を大合唱した。不協和音のようにリズムなく、雑音で聞くに堪えない罵声だ。馬車の中にいる姫様ではなく、兵器―月見観空の精神を揺さぶるように響く外の罵声に、観空は両耳を塞いでしやがみ込んだ。

「私……私……兵器……違う。違う。私がやったんじゃないセフィがやったんだ。兵器はセフィの方だ」

念仏のように否定の言葉を繰り返す観空に対して、ある疑念を抱く。セフィロトという人物は存在しないのではないか？ この過酷なバッシングや生きる為に枷られた殺人を、自分の心で処理出来ないが故のバグ―セフィロトなのではないかと。それを確かめるといふ事は同時に月見観空という幼い妹を無限の後悔地獄に追いやる事になるのでは？

出来ない！と両目を閉じ、両目を開き馬車の外に向かって叫ぶ。

「うるさい！ 観空は兵器なんかじゃない！」

最後の語尾を息の続くまで叫び続けて、両肩を上下させながら深い呼吸をした。それでも呼吸が不安定になる。見えない人々の観空に対する憎悪が痛い、あたしは床を叩きながらそう感じた。

冬架は無表情だったが、民衆の態度が不快だと思っているらしい雫はソファ―に深く腰を掛けながら沈黙を守った。

「さつさとグラン国も滅ばせよ！ エフェリル国も、カイト国も！

滅ばせ！」

「兵器は役に立ってなんぼだろう！」

人々の罵声は兵器を乗せた馬車が視界から見えなくなった後もしばらく、続いた。警備兵の後日談によると幾つもの場所でデモ活動が起こり、その鎮圧のおかげで通常業務が滞ったとの事だ。

人工的に作られた丘の上に白亜の城は存在していた。丘の斜面は険しく人が徒歩で城へと行く事は不可能だ。その為、人が登らないように注意書きの看板が丘の関所の前に設置されていた。雫の直筆で『遊び半分で登山すると死にます、牛です。雫より』と書かれていた。

そんなとても親切な馬鹿姫様―朝露ノ雫が現代の王、朝露ノ真が病死してから事実上、白亜の城―朝露ノ城の主であり、和国のトップだと観空が馬車内で語ってくれた。

白亜の城へは関所を通り抜けて、最期の橋と呼ばれる橋を渡るしか手段はないようだ。そんな厳重な防衛に対し、城には砲台というモノが一切ない。開けた庭の奥にある城の左右には見張り台として高い塔が併設され、城の中からも行き来出来るように城と繋がっている。

城の外壁は全てコンクリートと防衛のエリアで生成されたオリハルコンで形作られており、かつて世界の文明を滅ぼしたロストガーデンの一撃にも耐えられると和国の国ではポピュラーな宗教―零聖女教の経典である『朝露ノ預言書』には語られている。そんな事柄を馬車内で自慢げに紙を見ながら雫があたしに話した後、後で自分の部屋に来るようにと耳打ちされて今現在、雫の部屋に一人で訪れた。

「突っ込んでいいのだろうか？ ファンタジーと思ったら、これかよ」

あたしはそう呟いた。明らかにファンタジーにありがちな中世ヨーロッパ文化がこの部屋には溢れていない。代わりに壁には観空の写真が無数に貼られている。全ての写真に雫が書き込んだと思われるコメントが波線のような筆裁きで書かれていた。みーちゃんとお風呂場にてみーちゃんのおむねに触ったきねんというコメントに対して目の前にいる和国の姫―朝露ノ雫を殴りたい衝動に駆られた。

部屋中には畳が敷き詰められていた。畳特有のい草の草汁ばい香りが漂う。日本人であれば、落ち着く事の出来る香りだ。質素な布団が置いてあるのだが、子猫の形の枕が二つある。一方の子猫の枕の方には水色のリボンが無造作に置かれていた。これにより瞬時に誰と雫が寝ているのかを理解した。

「あの馬鹿姫めええええ……」

羨ましさと怒りを込めた囁きが雫の背中に刺さる。いっそう、本当に刺さればいいと素で思うあたし。

「何、呟いてるんですか、お姉様？」

雫はそう言った後、扉を開いて緑茶を持ってきた冬架を部屋に招き入れる。冬架はテーブルの上に緑茶の入った湯呑みを二つ置く。

「ごゆつくり」

冬架は二人にお辞儀して部屋を後にした。一連の動作が流れるようだ。

「呟く？ あっ……思っていたより違うなあって」

「そうでしょ、そうでしょ。雫ちゃん、さすが姫様って感じでしょ」「はい」

引き攣った不細工な笑顔で囁いた。心の中でそんなわけがないというツツコミを入れておく。

「それよりお姉様に未来の義妹からこの国での注意事項です。その一、決してお姉様が普通の人間さんである事をばらしてはいけません」

「うん。それは研究所の……」

朱が言っていた事が脳裏に過ぎり、やはりここは優しい世界ではないんだ、とあの馬鹿無邪気な雫の顔が別人のように無表情無感動な表情を装っている事から察した。

「知ってるんですね。モルモットにされた化け物さんの子孫達ですから、弱いアリアならお腹減っちゃうくらいの代償で使えるんですよ。その二、決して過去から来たなんて言うてはいけません」

「その三、決してみーちゃんと仲良くしたり、お姉様だって言うて

はいけません」

「何で！」

その無慈悲な発現に声を上げながら雫に詰め寄った。

「恐れられているからですよ、残念なことに」

雫はぼろぼろと涙を流しながらあたしの腰を掴む。

「そんな、優しい子なのに」

「それを誰がわかりますか！ みーちゃんはエデンと呼ばれる敵国を一撃で滅ぼしました、たった一撃で。英雄にするにはあまりに功績が凄いです。雫ちゃん達でも到底、できる技ではありません。相容れないからこそ、周辺国と虐殺し合うしか選択のないこの国のように…… 本当に残念です」

「姫様」

「立場上、雫ちゃん、いえ、私は演じなければなりません。頼りがいのある絶対的な君主という存在を」

雫は自分の背ほどある窓ガラスを覗き込み、そこから見える草の上で昼寝をしている観空の姿を悲しげに見つめながらそう言った。

「あたしには、姫様のように守るべき者が多くいません。あたしには観空さえいれば良いのです。観空と同じ待遇で構いません。あたしは自分に嘘を吐く必要はないのですから」

あたしの目には猫背になった雫の背中が寂しそうに映った。

「はい、承知しました。では観空の元に行きましょうか」
深く雫は頷いた。

「あたしは何処かで浮かれていた……ごめん」

雫が部屋から出ていた後、呟いた。

この世界で何処か自分の小説に出てくるファンタジーを無理やり見出して、現実から少しでも逃避したいと考えていたが……それは卑怯だという事に、自分の気持ちに全身全霊で素直になる事の出来ない姫様の後ろを着いて行きながら反省した。

いつか、この世界が現実になつてしまうのが怖かった。だが、ここでは立ち止まれないと木製の扉にそつと触れた。

城下町、そこには必然と人間どもが群れを成す。昼時である現在は当然のことながら、人間と人間の間を掻い潜らなければならぬくらいの混雑さとなる。身長の高い私、月見観空のような固体は歩き難いだろう。だが、人間は底知れない恐怖には脆弱な貧相でとても可哀相な精神しか持ち合わせていない為、私の通り道は自動ドアのように開けてくれていた。

私と目があったものなど、殺さないでくれと口走りながら走っていった。

改めて私を勝手に兵器扱いしている人間の城下町を観察する。

レンガで構築された家にしつかりとした窓。だいたいの建築物が煉瓦建築だ。一階建てもあれば、二階建てもある。だが、三階建てというものはこの国へと入国してから見た事がない。そこまでの建築技術を市民生活へと提供できないのかもしれない。憶測だが、全てを自給自足で賄っている和国では日本のような爆発的な経済発展は見込めないと考える。単純に競争相手がいないからだ。

とはいえ、寿司屋や、ケーキ専門店、和菓子専門店、刀剣店等の店が連なり、そこへと人間達が吸い込まれるように入ってゆく。まだ、この国の経済は破綻していないようだ。だが、遠くない未来にこの国は破綻する。回避しようのない理由――圧倒的な物量と圧倒的な生産力、科学力を持つ周辺諸国による攻撃に晒されて……。

「平和なものだ」

「形だけの平和だよ」

「むにゅー」

アカの腕を両手で掴んでいる私の頭を、アカは乱雑に撫でた。

アリアマスター、朱……渾名、アカ。和国の連中……いや、この世界の連中で最も長い付き合いではあるが、この人が喜ぶ感情以外の感情を私に見せた事は一度もない。感情の読めない人間というの

は相手に感情を読ませないようにしているのだが……自然体のように思える。馬鹿姫なんぞはそういう性格だと考えているのだろう。

嫌い。そう、天才特有の残酷な冷静さを持つ私と同種の人間である存在など敵以外の何ものでもない。だが、紅蓮の髪と同色の瞳を持ち、素顔を隠すかのようにマントのローブを深く被るアカという性格偽造者に私は懐かしさのようなモノを感じていた。今、両手で掴んでいる細い腕に抱かれた記憶？ 妄想？ 願望のようなものが時々、疼く。今も。

「可愛いのに避けられているね」

にこやかに毒舌をふるったが、アカという人物を知る私からすれば私の事を心配しているという意思表示を含んだ善意の言葉だと簡単に解釈できる。

「兵器、兵器とうるさい人間どもは所詮、何もできない。そんなの物理的脅威にはならないし、何とも思わなければ精神的脅威もない」心配、要らないと回りくどくアカに伝えた。

「ふん、ただ精神が図太いだけではないか、兵器」

私とアカの背後にいる一般兵が、確か霧神とかいう名前の奴が不機嫌そうに鼻を鳴らした。反論するのはとても面倒だ。

「そうとも言える」

「面倒だと言わんばかりに言っな」

心を読んでいたかのように嫌味を言った。

「さてと……」

両手でお腹に触れながら今朝からパンの耳しか食べていない事に気付いた。

「その人間。ここの店のお惣菜を全てくれ」

これから行く蒼代学園の生徒に配るのも良いだろうと考え、一軒のお惣菜屋の棚に並べてある商品―唐揚げ、ハンバーグ、豚汁、肉じゃが、キュウリの漬物、野菜サラダ、おでん、たこ焼き、鯛焼きの入った木箱を一つ残らず、指差した。

「え、全てですか、兵器様？」

中年男性くらいの容姿であるための店主は私の姿に怯えているのか、額に大量の汗を掻きながらも答えた。

「全てだ。さつさとしろ、殺すよ人間」

私に何か意見を述べたそうな顔を伺う店主に必要ないと、殺気を込めて低い声で言う。

アカには子どもが背伸びしてるよと思われるのか、ニコニコしたまま成り行きを見守っている。

「全てですか、これ、全部持てるんですか？」

私のスリムでクールな容姿を保ちつつ、それでいて縫い包みのように愛くるしい姿を凝視して言った。

店主の述べたい愚言は想像がつく。

「ちび、幼女、小さなお嬢さん、小学生には無理だと思っただろう」それが故に私はちよつと遊びたくなつた。わざと敵と対峙するような鋭い細い目つきで店主を射抜く。

「は、はい」

「私もそう思う」

「遊んでるよ、無邪気だね」

何を思っているのかは理解不明だが私を時々、雫や冬架、アカといった人間はすぐ、頭を撫でたがる。そう、今のうちに。まるで子ども扱いだ。

「殺気に満ち溢れているのは気のせいかな」

一人、意味を理解していない私達側にいるべき霧神一般兵がそう言った。

「はい、これで全てです」

店主は素早く、布袋詰めを完了させ、空になった木箱を退かして、棚の一番上にそれをずらりと並べた。

六袋という事は一人二袋のノルマだ。店主は命の危機から開放されたと言わんばかりに荒々しい息を吐きながら、手拭で額の汗を拭く。

「ありがとう、一般人」

礼を言い、お金を店主に手渡す。私の背後でぼつーと突っ立ている霧神の手に次々と荷物を握らせた。先程までは一人ずつ持とうと思ったが、袋を最小限に抑えるために乱雑に詰められ、袋の破損する可能性があるモノなど持ちたくない。霧神は黙って成り行きを見守っていたが、奴はそんなに使える奴ではない。当然、反発されるだろう。

「おい、何故、俺が持たされている！」

「こんなに可愛い少女に全ての荷物を持たすというのは社会の倫理上不味くないか？ 想像してみる」

「う、確かにそうだな。兵器とはいえ、お前は幼女だ」

ささやかな抵抗だろうか、納得していないような感じを首を傾げる事により表現する。私はヒトラーみたく完全無欠の独裁者ではないからその事は見逃してやろう。だが、世の中にはパンドラの箱の最期の中身のように触れてはならない事柄が存在する。それは私を表すのに幼女という言葉を用いる事だ。用法が間違っているだろう！

「あちゃあゝ霧神。それは不味い」

「何が不味いのですか？ 朱様？」

アカの言葉に耳を傾けた瞬間を狙い、助走をつけて素早く上空へ低時間の飛翔！

「ほらね」

どうやら、アカは私の気配に目を向けることもせず読み取ったようだ。

「観空ちゃん可愛いよキック！」

掛け声と同時に私を幼女―未成熟と罵った霧神の背中に一撃を喰らわせた。だが、身体を反らす様子もなく、背中を摩りながら霧神は叫ぶ。

「幼女じゃないか！」

条件反射的ツッコミでも入れる癖があるのか、哀れにも霧神はまた、あの言葉を言ってしまった。勿論、許すなどという事はしない。跳び蹴りでは今度は清算できない。私よりも怖いアカの手によって

「レディに失礼だ。あたしは男性には常々、ジェントルマンでいるべきだと考えていてね」

アカは霧神にバイバイと手を振った。その笑顔はきつと、霧神が最後に見る人の表情だろう。じつくり、味わえ、霧神。

―統べてのアリアの祖 イグドラシルよ。

我に最強の武器を与えよ。

我はイグドラシルの子なり。

言霊は勝利の剣、フレイ。―

アカが紡ぐ完全なる言霊は絶大な効果を発生させる。一瞬にして具現化された女神の刻まれた刀身を持つ剣。それは知らぬ者にとつてはただの美術品のような剣。だが、ここにいる私を含めて三人は知っていた。それは生存を脅かす普遍的恐怖だと。

「おい、アカ。それはやり過ぎ!」

「朱様」

その絶大な力を喰らう前に、霧神は失神して石の敷き詰められた道に頭から倒れ込んだ。随分と芯の通ったヘタレだと手を差し伸べて起こそうとしたが、アカの手に遮られ止められる。

「可愛い少女に幼女と言う言葉を当てはめる兵士さんは、あの場所に連れてゆくべきではないでしょう。ねっ、観空?」

アカは道端に落ちた六つの袋を手提げ部分同士を結んで一つの袋のように持ち易くする。そしてそれを右手でいとも容易く持ち、左手で私の手を強引に引っ張った。

「うわあ、アカ!」

私達は霧神という荷物を残して、和国の中でも裕福な階層に当たる人々が行き交う通りを足早に立ち去って行く。

一時間くらい私達はあれから歩き続けている。あんなに賑わっていた先程の場所とは異なり、同じ和国の城下町で在りながらもひっそりとしていた。それもそのはずだ。建物は幾つかあるが木造の一戸建ての狭い民家がまばらにあるだけだ。どれもが屋根が吹き飛んだ所を雑に板を打ち付けて雨露を凌げる程度にしたり、壊れた窓を

そのままにして風が荒み放題だったり、もう既に人が住んでいない全壊した建物等、荒んだ景色が続く。だが、それとは別に子ども達のはしゃぐ声が聞こえてくる。大人たちの日々を過ごす声が聞こえてくる。

私の姿を見た瞬間、彼らは「観空様、お帰りなさい」という大人の声、「みーちゃん、遊んで、遊んで」という子どもたちの声を発した。それらから察するに先程の城下町で賑わう場所にいた富裕層とは異なり、貧民層の人間は私に対して過剰なまでに親しみを込めているようだ。

そんな通りを抜けてすぐの場所に木造の校舎が建っていた。校舎を構成する木材は傷一つなく、綺麗な肌だ。この木造の校舎は建設されて一年しか経っていない。

校門には蒼代学園という表札があり、整備されたグラウンドを通り抜けて、校舎内へと入る。そして下駄箱の直近くにある職員室へと、私とアカは扉を丁寧に開き入った。

職員室という木のプレートの掛かった部屋は和国の城下町とはイメージ的に異なり、どちらかというと古き日本テイスト漂う部屋だ。職員の机や椅子は木製。私の住んでいた世界にあるパーソナルコンピュータは存在していない。その代わりにどの机にも乱雑に紙の束が塔のように積み重なっていた。その一つ一つが重要な書類なのだろうが、あまりにも乱雑だ。だが、それらは学園内部だけで通用する内容である為に利用価値は皆無だろう。手に入れても情報を人から人へと伝えるネットワークが和国では形成されていない為、徒労に終わる。一番身近なネットワークは富裕層の方々がよく利用する馬車での運送屋のみだ。

隅には私の身長よりも四十センチほど背の高い鏡が置かれていた。フレームは飾り気のない緑一色である。

「こんにちは、キャシーさん」

「こんにちは、キャシーさん」

それぞれ白い上衣とジャージのズボンを着込んだ茶髪のショート

ボブという容姿である中年の女性にお辞儀をした。中年の女性はキヤシーという名前でこの学園が建設される前は溼聖女教のシスターだった。今は学園の国語教師だ。

椅子に座りながら書類の上をキヤシーの黒瞳が忙しく動いていた。

私達に気づき、書類に目を離して、キヤシーはお辞儀をしながら、「こんにちは、朝露ノ溼様、朝露ノ詩衣夏様」

私の事を朝露ノ溼、アカの事を朝露ノ詩衣夏と呼んだ。

何故、そうキヤシーが呼ぶのかというと、あまりにもその人物に似通っている為だ。だが、本物という事は決してない。和国の公式発表では朝露ノ溼と朝露ノ詩衣夏は事故死したと発表されていた。その事を思い出した私は愛想笑いを浮かべた。

「そんな名前で呼ばないで下さいよ、縁起が悪いじゃないですか」
そう答え、近くに置いてあった木製の椅子に腰掛ける。

「癖なんだろうけど、いい加減にあたし達の名前を呼んでくださいよ。とはいえ、もう諦めていますけどね。あ、これお土産です」

アカは自分の持つている六つの袋を少し前に掲げた。

「いつも悪いね、溼様、詩衣夏様」

アカがキヤシーの机の上に置いた六つの袋の中身を確認しながらキヤシーはそう言った。

「いえ、私にできるのはこれしかないですから」

私はキヤシーの机の上が食べ物の入った袋で埋まってしまったのを横目で見、流石に買いすぎたかとツインテールの右部位を手でふわっと触る。

「足さえあれば、もつと役に立てるんだけどね。本当に情けないよ」
キヤシーは自分の左足の存在しない膝から下の部位を悔しそうに眺めながら重苦しく言った。

目で追うと、キヤシーの左足の存在しない膝から下の部位は無く、その部位に当たるズボンの布地は何処からとも無く入った隙間風で微かに揺れていた。

「キャシーさんは十分過ぎるほど働いてくれます。おかげで蒼代学園を成り立たせる事が可能となっているんですから」

同情するような偽善者笑顔で業務的に私はそう言った。私の知る限りではキャシーの失われた部位は周辺諸国の人間に食われたらしい。近所の噂なので信憑性に疑問があるが。このような悲劇というモノに慣れていないと、目を反らした。

「戦いのない世の中に備えて平和利用を主とするアリアの使い方と過去の日本義務教育を中心とした勉強。それに部活。天才だよ、凄様」

「天才だから当たり前だ」

天才か。幼い頃から天才と周囲から賛美されている為、聞き飽きた言葉だとそっぽを向く。

「ふふ、背伸びして。なんでこんな良い子が和国でも兵器として恐れられる存在なんだろうね。世の中、狂ってるよ」

キャシーの溜息交じりの微笑みはどうしようもない人の罪を体現しているかのようにだった。

世界は常にどうしようもなく、狂う事を私は知っている。私が元々、いた世界は観空―子どもを平気で捨てたり、自分の意思が通らないからと小さな悪口―精神的殺人から大きな戦争―肉体的殺人までしたがる。全く、は―ねえの小説―空想よりも逸脱した混沌的な醜悪さに彩られている。だから、諦められるんだろうねと唇をかみ締めた。

「人は脆弱な生き物だ。私は腕をもぎ取られたり、心臓を刺された程度では死なないからな。差別されるのも当然だ」

その言葉を否定するかのように乱暴な音が突如、部屋に響き渡った。

振り返ると扉が開いており、

「随分と冷めたモノの見方をされるんですね。おはよう、兵器ちゃん」

いつものみーちゃんという親しみが偽りと言わんばかりに冷たい

視線を私に投げかける。それがここでは普通の光景なので私とア力は動じる事はない。

馬鹿姫、また始まったとばかりに、相手にしないという脱力した視線を雫に投げかけた。

「ひ、姫様」

キャシーは驚愕のあまり、左手を隣の机に置いてある書類の山にぶつけてしまった。思わぬ力を受けた書類の山は紙の雪のようにゆらゆらとゆっくり床に落ちる。

「どっちが本当なのだか、わからん」

だが、実際は民の目があるからそのような態度を取るのだろうと、小学生のたのしくない算数の問題を解く時並みの刹那さで理解していた。だが、その事を暴露すれば子どものように暴れてみーちゃん馬鹿つと言っだろう。察する事の出来る私は自嘆した。

「今日はどのような用件でこのような貧民街のボロ屋敷に……」

口を必要以上に開きながらキャシーはそう言った。

「喜べ。兵器ちゃんのお姉さんを連れてきた。当然、ここへと住んでもらう。これで貴女の家防衛もオーケーだぜ、マイケルう。凄い、これは買いだね！ 今なら雫ちゃん寝顔写真付き！」

「は、はい。仰せのままに、姫様」

商人がモノを消費者に買わせる為にやるコントを一番、それから遠い和国の馬鹿姫が職員室中に響くアホ声で演じているのを目の当たりにして、キャシーはああ、朝露ノ澪様が生きておられたならと思いつつ、地面に跪いて首を垂れるのだろうと私はフロイトみたく精神分析した。

それに満足して何度も頷く雫。

「雫ちゃんは失礼させてもらいますよ」

「じゃあな、王の器にない者よ」

せつかく、雫が頑張っているから遊んでやるとい意を込めた変わった挨拶をした。

「じゃあねん、覚悟のない大量殺戮兵器ちゃん」

一方、雫は締りの無い笑みでそう言った。

雫と私の両者がすれ違おうとした瞬間、雫の手を握る。振り向く雫。

「ロストガーデンは使わせない。ならば、奪うしかないだろう。目の前にある絶対的な力を王ならどのようにして奪う。王なら？」

「エデンを消滅させる力を持つ存在に強攻策か、兵器ちゃん？」

馬鹿姫の仮面を脱ぎ捨てた修羅姫が楽しそうに嘲笑った。

「浅いぞ、人間」

お前は王に相応しくない優しい人間だから強攻策などできないと握った手に圧力を加える。

「さすが、雫ちゃんのお人形」

雫は自分自身の顔を右手で隠しながら、震えた声で言い私に背を見せ、歩を進める。

場の空気を読まずにまたしても扉が大きな雑音を上げて開かれた。その扉の向こうから現れたのは紺色の制服に身を包んだ月見遥ことはーねえだった。

「雫ちゃん、何処に行ったの！ 足、速いよ。あ、いた」

はーねえは雫を見つけるや否や、雫の所に駆け寄った。

だが、

「雫」

その謎の一言を言った後、雫ははーねえには目もくれずに職員室を後にした。

「ん？ どうしたんだろう」

首を捻るはーねえの手を私はぎゅっと、握り締め捕まえる。

「雫様のお姉さんはそこにいらっしゃる方かい、雫様？」

「雫？ まあ……そういう渾名ね」

はーねえはそう呟いた後、

「はい。観空の姉の月見遥と言います。これから観空共々、よろしく願います」

微笑みを零し、編集者に挨拶する時のような四十五度、腰を曲げ

たお辞儀をした。

「はい、よろしく。じゃあ、私は子供たちの夕食を用意しないといけないから、詳しい話は、そうだね…… 零様に聞いてね。零様、頼める？」

慌てて引き出しに閉まっていた腕時計を取り出し時計の針を気にしながらキャシーはそう言う。

ちらつと覗くとキャシーの腕時計は十二時三十分を差していた。

「そうですね、学生達がお腹を空かせてますね。私の弟子が暴れだしちゃう前に準備の方、お願いします」

キャシーの慌てた素振りがそのせいだと気付き、苦笑しながら私はそう言った。

「はいよ。遥ちゃん、またあとでね」

まだ、出会って間もないはーねえに気さくにも手を振った。その大らかさにはーねえはきょとんと呆然とするしかなかった。

「言霊 一時の浮遊 スカイ」

そうキャシーが呟くと、キャシーの腰が椅子から一センチほど浮く。それを見届けると静かにキャシーは歩き出した。歩き出したというよりも上空一センチほど浮き歩いたといった方が正しいだろう。そのまま、キャシーは職員室を後にした。このような浮遊系のアリアをここまで使いこなすのはキャシーとアカ、私しかない。尤も、朱と私のアリアの技術は、それとは次元が違う。

「アリアって何でもアリだね」

ふと思いつくままに零したはーねえにアカは残念そうにはーねえの耳元で何やら呟く。

すると、はーねえは赤面してしまった。

はーねえのお陰で誰もが喋りにくくなった空間を土足であがるように突如、それは扉のノブをぶち壊して現れた。

「お腹すいたあ！ キャ…… あ、観空先生！ 帰還なされていたんですね。今回は救助任務だったんですね？ きつと、観空先生の事だから成功ですよね！」

自分の破壊した扉のノブを右手に持って、壊したという事実を忘却の彼方へと忘れてきたような喧しい声を発した。

その男の子は非常に類を見ない特徴を持っていた。例えば、大きな口に見える犬歯。ウェーブの掛かった首筋までの黒髪。蒼代学園の女子の方の制服。女子の制服は純粋を表す白色のブレザーとプリーツスカート。黒いニーソックス。十五歳の男の子としては絶対に間違っているその容姿。だが、童顔である為、恐ろしいほどに全く違和感がない。

「誰ですか、観空？ この女の子は？」

初対面であるは一ねえがその男の子―踝深瑠の正体に辿り着いていないようだ。

また、馬鹿が目の前に現れたという哀れみの瞳で深瑠を見つめながら深瑠を指差し、断言する。

「変態。それ以上でもそれ以下でもない」

「いや、違う。この子は男の子で踝深瑠君。奈式風羽っていう生徒とこの学園で一二を争うアリアの詩い手で、最強のアリアの詩い手である月見観空の二番目の弟子」

「すぐさまアカが私の故意による失態のフォローをした。」

「へえ、偉くなったね、観空」

とんでもない俊敏さで私の両脇に両手を通してブロック。そして私の髪の毛はミキサ―内のバナナのように弄ばれた。

「うわぁー、はーねえ。髪の毛がぐしゃぐしゃああああ」

甲高い声を上げて喜んだ。じたばたと振り回す私の両手を今以上に動かせば、はーねえの両手を振り解く事が可能だが、そうしたくない。嫌だけど、楽しい。楽しいけど、嫌だ。

「あたしは月見遥。よろしく深瑠君！」

「よろしく願います。過去の世界の人だと観空先生から伺っていたのに適応力、凄いですね。未来はもっと、進歩していると思っ

ていたでしょう」

「進歩か……。人は進歩していないよ。いつの時代も人が人を殺す。

それは何か理由が、あるからだ。けど！ あたしはあれが、あれが！ 理由に成りえる事柄があるなんて思えない！ 人間は確実に退化しているよ」

人を殺し、人を喰らうという行為。はーねえは当人しか知り得ない何かを押し殺し、私に気付かせないように、あらゆる事に興味がある小説家、朝露ノ遥の顔をした。それは怒りのように思えた。だからこそ、聞けないのだ妹の私は。

「見てきたんですね。奈式ちゃんだって、もう。和国の法律では三十日以内に行方不明者が発見されない場合には、死亡って事になるんです」

はーねえ、奈式風羽の死を私が知らないと思っている……。

奈式風羽は私の一番弟子というだけではなく、いつも私に付き従い、人々から恐怖の対象となっている力と十一歳には似合わない英知を持つ私を崇拜していた。私に学んでいる風羽は私の加護を受けているから死ぬ事はないと勘違いしていた。出会ったばかりの踝深瑠もそう思っていた。それから抜け出せなかった風羽がクレアル収容所にいる和国の人々を助けに行くと言うのは時間の問題だった。止めるべきだったという後悔が私の頭をずっと堂々巡りしていた。

私の罪が一つ、増えたのだ。馬車の中から見てしまったのだ。この世界に来てはじめての友達であり、一番弟子にあげたお気に入り、水色のリボンがあるはずのない荒廃した土地にあったという事実と小さな亡骸。それでも、自分を氣遣う姉の為に黙っていようと大人びた。それでも、二番弟子である踝深瑠の為にいつもどおり接しようとして大人びた。

「奈式風羽があそこにいた者ならば……私は……兵器にもなり得なかったのか」

ふと、死者の声を思い出してしまった。

『みそらん先生、約束してください！ 先生の力でいつか、二十一世紀の平和だった日本を私に見せて下さいね！ ストーカー小学生からのお願いですよ？』

遠い夕暮れの中で、記憶の果ての夕暮れの中で、死者は今……微笑んだ。薄い緋色の影に染まる笑顔と遠慮している薄い笑窪が印象的だった。

だから、ここはおれた。

「観空、あなたは……」

「先生、奈式ちゃんは死んだんですね」

「あ……ああ……あ……」

はーねえと深瑠の問いに対する答えを鼻水で口の中が粘着いて、発音の悪い声で必死にそう言った。

「僕は、僕は涙を流す事ができないんです。でも、こんなに涙を流したいなんて！」

近くの机とは離れた場所に無造作に置いてあった椅子に深瑠は腰を掛けて、背もたれに背をつけて眉間に皺を寄せて眉毛を垂らしても、涙すら出ない嘆きの表情が観られないように天井を仰ぎ見る。

深瑠の涙は深瑠の両親の肉片と共に喰われてしまったから、深瑠は心で泣くしかないのだろうと私は哀れむ。

「私は、私は、もう遅いかもしれないけど」

その言葉を口にした時、

『私が誰なのかを知ってる？』

生きていると認識した時から零である月見観空の人生を費やすに値する命題が頭に鳴り響いた。それは頭痛のように鳴り響いた。

「私は兵器だ。第三次世界大戦中、世界の文明を消滅させた唯一の言霊、神の裁き……ロストガーデンの詩い手！」

否定を肯定に変える為に叫んだ！

兵器。慕ってくれた友達の為に私は選択した。

無意識に十一対の翼は開く。白、灰色、黒、青、赤、黄色、緑、橙色、紫、群青色、輝色の翼達は復讐心に反応してよりいっそう、その色を神々しくさせた。そしてそれは禍々しくもあった。光に包まれた私の身体を見た朱、遥、深瑠は目を眩ませる。その隙に慌しい足音を立てながら扉を乱暴に開けた。

目の前の光が消え去り、あたしの妹である月見観空も姿を消していた。理性というモノで怒りという感情を自生出来る妹は怒という感情を何処か冷めた目で見下ろしていた。何でも理性で片付けようとするのだ。だが、あの全てを焼き尽くすかのように鋭い目つきの紅い瞳はそれとは異なっていた。

哀という感情しかない小さな新しい妹に昔、名前をプレゼントした。

『あんたは本当の自分を見つけるまで月見観空ね』

そうしなければ少女はいつか、哀さえも捨てて、生きる事を冷めた目で見えるようになる。当時の小学生だったあたしでも、それが分かるくらい観空は自分を求めている。

『うん！』

仮であっても自分というモノを見つけた観空は微笑んでいた。子どもらしく、何も考えずに。

だからあたしは叫ぶんだ。

「違う！」

それなのに足が動かなかった。この世界の月見観空という人間があたしの知る月見観空と微妙に違う。だが、本能のようなモノー思い出が知っていた。月見観空が兵器であるはずがないと。震える足で無理やり、扉へと歩を進める。一步、二歩、誰かの手があたしの指に触れた。観空の手のようにお日様みたいに暖かい手。

その人は言う。

「そうじゃないなら行こう。今の月見観空ではロストガーデンに飲み込まれる。絶対的な自分を確立していない観空は最強最悪のリアを撃てない！」

手のぬくもりに一瞬、朱の中に月見観空を感じた。いつも微笑む朱という人間は一体、なんなのだろうという訳の分からない疑問を

抱きながらも朱の言葉に耳を貸した。

床の上を翔る慌しい音。私は怒りに身を任せて獣のように猛く走り続ける。

それは何に対する怒りか！ それすらも既に証明できない。証明しようにも数字では計れない未知の仮定―感情だけが存在した。

何人もの、生徒が観空先生と私の事を呼ぶが子どものように泣きじゃくった顔を見られたくない私はそれを無視して、階段を二段飛ばしで駆け上がった。

「うわあああああああああ、うくつ、どうして私は誰も救えないセフィ！」

「観空さんと私の力は強すぎるから誰も救えないんです」

同一人物の口から二つの意思がはつきりと交差する。自分の力ではどうにも出来ないと言園中に響く声で泣き喚く私と、毅然とした態度で冷静な分析をするセフィロト。

「何人！ 何人！ 一体、何人！ 殺された！ あんな馬鹿姫に言われなくともロストガーデンを今あ、うわああ、使ってやりゆ！」

第一セフィラ開放、第二セフィラ……」

背にある白、灰色の翼が大きく羽ばたく。まるで私の行為を歓喜するように、賛同するように。

「ダメです、それは。人の器では到底、使いこなせない。神でない限り……。偶然、一度目は成功したのです！」

ロストガーデンを蒼代学園の屋上から放ち、グラン国を滅ぼそうとする観空の計画を邪魔するように自らの口から出てきた言葉と別の意味によって階段の踊り場に足止めされる。それは金縛りにも似ていた。

「あれが？ 成功だって！ 罪のない人を殺したのに！ 国を滅亡させたのに！」

この世界に突如、私が現れたと同時に無意識で放たれたロストガーデンを忘れる事などあるはずがない。そこで生活していた人々が

たったの一秒もしないうちに素粒子へと還った。人のみを排除した素粒子分解アリアを思い返した瞬間、唇が震えた。

「では今、貴女がやろうとしている事は罪でないというの？」

セフィロトの適切な問いに自分の罪が蘇る。

自分さえ現れなければ、ロストガーデンは放たれる事はなかったという罪。

これが罪ならば世界は幾千年もの間、罪という雨に打たれている。いや、罪だ。けど、けど、だけど！」

罪と復讐との間で苦悩のあまり、しゃがみ込む。

目をぎゅつと瞑り、生前の奈式風羽の姿を思い描く。

髪先が軽くカールの掛かった腰まである長い金髪に、深瑠と同じ白いブレザーに、プリーツスカートに、素足のままで黒い長靴を履くスタイル。百五十センチという長身。そして私から貰った水色のリボンは右前腕のみに巻かれていた。七歳の少女特有の雛人形のような見事なまでに可愛いという言葉がぴったりに洗練された顔。今はこの世界にない。風羽を壊したあいつ等が生きている事こそが罪。罪じゃない！ 第三セフィラ開放！」

私は再び、立ち上がり、屋上の扉を開けて穏やかな昼の一時を破るように慟哭した。

日中の眩しい陽光にも目もくれず、遠い先を睨みつける。その瞬間、黒い翼が大きく羽ばたく。待ちわびたぞという声が今にも聞こえそうな禍々しさを渦巻いて。

『みそらん先生！ アリアは意思がキーになってアリアマター―感情共鳴物質が意思に答え、力が具現化される。でしたら私にも撃つてようになりますか、ロストガーデン』

意思の籠った風羽の言葉を思い出す度に力が漲ってゆく。

「第四セフィラ開放、第五セフィラ開放、第六セフィラ開放……第七セフィラ開放……第八セフィラ開放……」

無表情で淡々とロストガーデンを行う為の準備を進める。青、赤、黄色、緑、橙色の翼が大きく羽ばたいたと同時に淡い光の礫が私の

身体を包み込んだ。いや、体内にあつた身体を構成するアリアマターが体外へと放出されて包み込んでるように見えるのだ。それは鬼気迫るという言葉がぴったりの光景だ。

光り輝く空間から十メートルくらいの櫛の杖が出現し、私の前に浮遊する。

何百年もの年輪を重ねてきた木の杖に無数の枝葉が巻きついていて。その櫛の杖に浮遊しているアリアマターが虹の曲線を描くように吸い込まれた。

「馬鹿な！ ロストガーデン！」

アカは扉を開けて口を開けたア水面のまま、その場に固まっていた。ロストガーデンの絶対的な恐怖がそうさせているのだろう。

「アカ、私は止めないぞ！」

私はアカに向かって鬼気迫る声で強く叫んで、

「第九セフィラ開放、第十セフィラ開放……」

同時に紫、群青色の翼が大きく開花した。両手を広げて歓喜の表情に満ち足りる。

やっと、殺せる！ その一言に集約された紅い瞳が多くの他者の血を望む。

櫛の杖を私は手にしようと右手を伸ばす。

「はあ、はあ、はあ、はっ、ああああ！」

何処からともなく、人の荒い息とはーねえの声、

「やめなさい！ み、観空あ！」

私の右手を激しい痛みが襲った。

「え」

私の気は反られ、櫛の木は完全な具現化を成立させる事無く、意思があるかのように白光の空間へと戻ってゆく。

私は赤く腫上った自分の右手を摩る。

卓球のラケットを握り締めたはーねえが涙を浮かべ、郵便ポストみたく顔を赤くさせて怒っていた。

「お姉ちゃん！ うわあ」

はーねえに目を向けたとき、再度……頭をラケットで力なく叩かれた。それに驚き情けない声を発してしまった。

頬を膨らませて怒ってますよという表情で、はーねえは私の瞳をじつと睨みつける。

「観空のしようとしている事は虐殺の連鎖に加わる事だよ！ 連鎖は一体、誰が終わらせるの！ 稀代の天才さん！」

空気中に浮遊されたアリアマターが自分の中に戻ってゆくのを見つめながら、呆然とはーねえの言葉を聞いた。そして知る。当たり前の世界にそれが終わったという実例がない事を。

「終り……終り……なんて存在しない。何処で終われば良い。何処まで私は殺せば良い」

頭の中で幾つモノの具体案が浮かぶ。周辺諸国のグラン、エフェリル、カイトをロストガーデンで壊滅寸前にまで追い込み、昭和時代の日本と同じ平和憲法の道を歩ませる。だが、それでも和国がかつてのアメリカのような存在になり、理由をつけて人を死に追いやるのではないか？

新たな展開が新たな虐殺の連鎖を生む。そうならば、ロストガーデンという力は無意味だ。

「姫様はロストガーデンがどうしても欲しいようだ。和国の言いなりになり、全てを滅ぼすのか？」

アカは陽気な表情でどす黒い和国の政策を噂話程度の手軽さで話した。そのような話術が真実だという事を物語って、決して空想などではないと私の胸に言葉の刃を突きつけた。

だが、望みどおり、ロストガーデンを使い滅ぼしたとしても、テロという形で何十年も報復に告ぐ報復が待っているであろう。かつての中東のように。

「それでは終わらない。人の感情はそう容易くないからな」

「泣きなさい観空。きつと、奈式風羽さんはあなたに復讐なんて望んでいないから」

冷静に分析しようとする大人びた私に対して、はーねえは自分の

打った私の右手を両手で摩りながらそう言った。こんなにほんわかった光景はこの世界にはそぐわない。けれど、知っているのだ。この世界にはないほんわかった平和という世界を。

どうして一人一人が許しあう心を持てないのだろうか……。だが、自分は持てない。その事に酷く罪悪感を感じながら小さな妹である私は姉の胸の中で、

「あ、あい、おねえちゃん。うわあああああ！」
ただ、泣きじゃくる。

それが許される世界が姉妹なのだから。

「うわあああああ！ ごめん、助けられなくて」

観空は遙か遠い空に、手の届かない場所に行ってしまった友人に、生まれてはじめて出来た友人に謝った。

私が目をそつと瞑ると、風羽と交わした会話の数々が映画の名場面のように思い出せた。

四月、風羽の両親がグラン兵に殺され、私が風羽を助けた。私の姿が風羽の愛読書『朝露ノ預言書』の中に出てくる朝露ノ漣に似ている為、何度も漣と呼ばれた四月。私は、

『私は観空だ。覚えておけ、凡人』

七月、こんな暑い日は泳ぎたいと言った私を満足させる為に、風羽が子ども用プールを用意した七月。私は、

『心地良いな。私の生徒も入れ』

そして月日は経ち六月。梅雨時に熱を出した風羽を遠慮がちに尋ねた私の六月。私は、

『早く元気になれば、ストーカー小学生』

少しの間、記憶の海に漂っただけでも私の中には風羽という存在が浮かんでくる。すぐに思い出せる存在。それが友達。

「私は学問という分野ではなく、友情という分野を学習しておけば良かった……そうすれば」

私の悲痛な泣き言には「ねえは優しく相槌を打つ。

「風羽ちゃん、友達になりましたしょうって言えたのに！ 自分善がり

の友達ではなく、本当の友達に」

「きつと、風羽ちゃんは観空の事、友達だっと思っていてくれたよ」
私ははーねえの言葉に頷き、広大な風景を俯瞰した。

レンガ創りの大小、様々な形の家々に住んでいるのは命ある人々。
その先に目をやると草木の生えた緑の色に溢れた原風景。

咽るような排気ガスの含まれていないそよ風が優しく、はーねえ
の髪を揺らしていた。

私はさよなら、最初のお友達と風に乗せるように声ではなく、心
を乗せた。その乗せた心は風羽ちゃんへと届いているだろうか？

> 八<

数分前、あたしは淡い期待を抱いていた。昭和時代真つ只中の建
築物ではあるが、それは見せ掛けで天井には煌びやかな蝋燭の炎が
何本も灯るシャンデリア。そして二百名くらいが一斉に各自がゆつ
たりと食事してもまだ、有り余る広大な部屋の面積。壁際には有名
な巨匠達の絵。具体的に述べるならばルノワールの『ピアノに寄る
娘たち』のような何処か人を安穩とさせる生活感のある絵画が飾ら
れている。そんな夢のフアンタジー風景は瞬く間に打ち破られ、現
在の月見遥は学園の何の脈絡もない外と内の差に頭を抱えていた。
「なんだろう、これ」

あたしは四方八方、挙動を変えながらそう言い、今にも壊れそう
な木の椅子に座る。座った瞬間、軋む音がした。

現実とは得てして妄想との格差が激しいものだ。縦長の木製のテ
ーブルには蜚蜚の如き儚げな火を灯す燭台が中央に一つ、右端に一
つ、左端に一つ。行儀良く三十脚ある椅子に生徒達が座っているは
ずもなく、下は七歳から上は十五歳まで白いブレザーに身を包んだ
生徒達は思い思いの場所で食事をとっていた。椅子に座り黙って食
事をするキャシーはそれについて注意事を述べる事はない。自由な
のだ。その自由―学園を創設した観空が自分の両手を鳥の翼のよう

に見立ててあたしの目の前で言う。

「日本の学園を再現してみたぞ。この学園では日本の義務教育とリアの安全な使用仕方が無償で学べる」

「そうね。充実してるよ。まさか、日本と同じ教育制度なんて」

箸を握り締めながら皿の中にある唐揚げを弄ぶ。だが、視線は騒がしくも愉快な他者とのコミュニケーションを試みながら食事する生徒達に向けられていた。

「一時間目の数学の因数分解っていうの分かった？」

「全然わかんない。脳なんておかげで、レンジ後のチーズ」

食器の底にスプーンがぶつかる空音がする中、あたしと観空にとっては懐かしい会話を座って食事をしている二人組みの男子生徒が嫌そうに話していた。

「観空先生って可愛いよな」

「幼女だよなあ、小さなお胸」

誰かが描いた月見観空の似顔絵を何枚も持った女子生徒とそれを一枚、貰って喜ぶ男子生徒との会話があたしの耳に入った。あたしと観空がいた世界にもこのようなちよつと危ない人がいる。

自分のいた世界と同じ所もこの世界にはあるんだと周囲を観察しながら物思いに耽った。そんなあたしのセンチメンタルな心を壊すように観空は嬉しそうに言う。

「しかも、土曜休日のゆとり教育って奴だ。土曜は二度寝し放題。

私はなんて生徒の心を理解できる素晴らしいさを通り越して、考え自体が美しい才女なんだろうか」

純粹に観ていた光景が観空の一言によって純粹さが半減したような気がした。そんなあたしの想いにも気付かず、自分の存在自体を賛美し続ける観空。

「こんな天才は褒めるしかないよね、はーねえ」

ちよこんと首を傾け、円らな瞳があたしの瞳を捕らえた。褒めて欲しい。ただ、そのご褒美の為に学園を創設したかと思うほどの瞳の輝き。

それに目を奪われている間を狙い、

「よし！ とこいつはここに退けて……。うゝん、ハンバーグうまうまだぞ」

あたしが横目で見ているのも知らずに、観空は音を立てないよう慎重、かつ素早さを兼ね揃えた箸捌きで皿の上にある人参を一掴みし、床に落としてゆく。

それは熟練した技だ。歳月を経て、あたしという天敵から観空自身の好物だけを口にする為に編み出されたのだ。ハンバーグの中心に箸をぶっ刺して、そのまま大口を開けて一噛みする。

「朝露ノ澪様が生きていれば、エクスカリバー継承者は澪様だったのに。あんな馬鹿姫が使いこなせるはずがない！」

微笑ましいお子様な観空の向かい側に座る深瑠が横にいる男子生徒に話しかけた。話しかけられた男子生徒は角刈りの頭を掻きながら同意するように頷いた。某先生よりも大人な会話だ。

「そうだよ。澪様は預言書に出てくる世界を変革させる神様様じゃないかって当時は騒がれていたよね」

深瑠の友達は言った。

そんな知的な会話が行われている同じテーブルで十一歳の少女の真面目な嫌いな食べ物撲滅作戦は続いていた。天敵であるあたしに見つかるというスリルのあまり額に汗を垂らしながら、最後にピーマンを床に投げ捨てた。ばれているのにさ。その開放感のあまり、観空は天敵の顔を見てしまった。そう、鬼気とした顔を見てしまった。あたしは一部始終みていたけどね。

「こら！ 観空！ ちゃんと人参、ピーマン食べなさい！ 牛乳飲みなさい」

箸でピーマンを突き刺し、涙目の観空に食べるよと差し出した。「私は人参を食らうエオヒップスじゃない、可愛い観空ちゃんだ。ピーマンはいかにも熟してない感じの色じゃないか。ふむ、これはまだ、熟していないな」

声色を変えてより可愛く、何でも許してしまうくらいの観空の甘

い声はあたしの脳内に響いた。それは人間に媚びる猫の声にも似た愛嬌漂う声。だが、その声を視線で払い除け、食べると箸を進める。観空の唇に嫌いなピーマンが触れた。

「うっうっう……」

唸り声を上げて、観空は嫌がる。その愛玩動物のような唸り声に深瑠は反応して、観空に目を向けた。

「そっういえば、観空先生って似てない？」

先程の話題になった朝露ノ澪の顔と月見観空の顔を頭の中で照らし合わせているらしい。

「似てるね」

すぐさま、深瑠の友達は意見に賛同した。

そんな彼らの会話をあたしは小耳に挟みながら、コントのようなあたし達のやり取りは続く。

「食べられない。熟すのを待とう」

観空はピーマンを箸ごと手で払い除けた。

「食えって！ 言ってるだろう！」

そんな頭の悪い言い訳が通用するはずもなく、観空の考えとは裏腹にあたしの逆鱗に触れていた。迷う事無く、観空の口を片手のみで開けて、その中に躊躇う事無くピーマンを数個放り込んだ！

「あがぁ、あがぁ、あぐうううう」

口の中は急激に充満した苦味によって人の言葉を喋れないくらいの状況に陥っているのだろう。観空は本来、食道に通す事さえ躊躇するピーマン、人参嫌いだ。

「観空先生。十一歳だったよね？」

観空の兎目を凝視しつつ、深瑠はテーブルから身体を乗り出した。観空はロボットのよう首を上下する。

「朝露ノ澪様って五歳の時には十一個くらいアリアをマスターして、二年後に雫様にとっては母の親友であり義母にあたる朝露ノ詩衣夏様と朝露ノ澪様が城の中で謎の失踪」

人参だけはせめて食道の中に通すものかと歯で人参を押さえ込む

観空と、突破口を開こうと観空の白歯に人参を擦り付けるあたしに深溜の友達は実に冷静にそう言った。

「あがぁ、あがぁ」

興味を持ったのか、観空は舌のみを使って言葉という地球上で人間のみが確立できた技を試行した。だが、それは深溜と深溜の友達には伝達されずに二人ともはっ？ という間延びとした表情をする。「朝露ノ預言書に出てくる神様の容姿に近い少女がどうしたと観空は言ってるよ？」

観空をフォローしながらも、ついに観空の口の中に人参を入れる事に成功した。次に観空に牛乳を飲ませる為に牛乳の入ったコップを手に持つ。それだけは嫌だと机にぴったりと観空は顔を伏せた。「ど、どう考えても最強のアリア詩い手、詩衣夏様とその娘、零様が失踪なんておかしい」

とぼつちりは嫌だと深溜はあえて話を強引に続けていた。「エクスカリバー継承者問題と王位継承問題が当時、話題だったよね」

深溜の友達は牛乳を一気に飲み干す。そして続きを喋ろうとするが、その前に観空が割り込む様にして淡々と話す。

「零とかいう人間を殺してしまえば、自分がエクスカリバーと王位を継げるとでも馬鹿姫が考えたというのか。あいつはそこまで頭を使えない。未だに九九の九の段が言えないのだからな」

観空の最もな推測に深溜と深溜の友達は頷いた。

あたしが手に持っている牛乳入りのコップを観空は掴み、自分の口へと到達するのを防いだ。横目であたしをちらつと覗き、開いている方の手でブイサインを作り、堂々と魅せつけた。

深溜の手から牛乳入りのコップを奪い取り、

「飲みなさい！ わがままするんじゃないやありません」

その言葉と共に第二の牛乳入りコップは観空の目の前にコップが割れんばかりの勢いでテーブルに降り立った。降り立った衝撃で中にある牛乳が波を立てて少し零れる。零れた牛乳の白い液体が私を

飲めと無言で観空に語りかけるのか、観空はブルブルと子羊の如く震えた。

「うわあ、はーねえ、うご、ごめんなさい」

その無言の牛乳の意思を汲み取る事など到底出来るはずもなく、観空は自分の敗北を認めてあたしに頭を下げた。だが、あたしは甘くない。ピーマンのように苦いのだ！

「飲めなかったら、罰として馬鹿姫さんの家庭教師を一週間やりなさい」

それは観空に過酷な労働を強いるという刑罰にも似たお仕置きの宣告だった。

観空は頭の中では恐らくこんな想像が再生されているであろう。

第一章、家庭教師の月見観空を稀代の御馬鹿の朝露ノ雫は喜んで受け入れる。第二章、勉強はそっちのけで観空のない胸を四六時中触り、ツインテールの先っぽを頬で撫でる等のありとあらゆるレズっぷりを発揮する。そして、暗い未来。

観空はがくがくと椅子を激しく揺らし、あたしの服の袖を必死に引張る。

「凡人を何の利益なしに教えたくない」

頬を膨らませてあたしに視線を向けずにぶっきらぼうに言った。行動と心理が一致していない。

「ん、何でこの子達の先生なんてしてるの？」

意地悪くあたしは膨らんだ観空の頬を突きながら言った。罰有無よりもそちらの方を観空の姉としては聞きたい。何故なら、観空という十一歳の少女はここでも、向こうでも異質な存在で積極的に他者とは関わろうとせずにもしろ、避けて通る少女だからだ。心配だ。「それは……」

観空は懐かしむように目を閉じて、何かを思い出しているようだ。あたしは観空ではないからそれを知り得ないけど小説家のあたしだったら、こんな場面では観空は最初のお友達の事を考えているのだろう。

観空の目じりが何度も瞬いて、

「間違っている世界をいつか、修正する為にだ」

力強く、言った。

「まずは教育からってこと」

「そうです」

観空は牛乳を少しだけ飲む。そして、小さな嗚咽をした。

そんな嗚咽をした観空を可愛いと口々に生徒たちは言い放ち、愉快に笑う。拒絶の笑いではなく優しい顔でみんな、微笑むのだ。あたしの目から一滴の涙が零れた。あ

断章、世界が終わる日

断章、世界が終わる日

>—<

記憶なんて無くなればいいと何度も少女は思っていた。けれどもそれは間違いだったという事に女性になって気づいた。だが、遅かったのだ。

だから、これは少女の思い出し得る限りの愛おしい人と最後に過ごした記憶の回想とでもして置きましょう。

燃えさかる町並みは全てが本物だと言わんばかりに、夜空という部屋の中で朱化粧をしていた。

少女はそれを近くの公園の滑り台から眺望しながら、美しく気高い炎を髪や瞳に宿した自分の妹の事を思い出した。

未来が正されていないければ、妹はここへと来てしまう。

数秒、数分経ても、少女の耳に聞こえてくるのはけたたましいサイレンの音のみで少女が恐れていた、望んでいた声を聞く事はなかった。

大きく伸びをして燃えさかる町並みを見つめた後、深く頷く。

「さて、家に帰って避難の支度をしますか、もうすぐ戦争が始まるからね。観空、あんたは生まれて来ないで良かったのか？ あたしは……そうは思わない」

燃えさかる炎はアリアが起こした炎だという事は少女は知っていた。妹とその仲間達と共に今、開戦されようとしている第三次世界大戦の資料をかき集めたのだから。

この後、日本に放たれる全てのアリアの祖、ロストガーデンは放たれない未来へと改編されたはずだ。他ならぬ、少女がロストガーデン発生拠点地を破壊して回ったのだから。

「二年の努力は実った。でも、こんな未来も望んでなかった。観空、消えちゃう。どちらにしても」

少女がゆっくりと俯いたのを狙ったかのように、

「はーねえ！ 退いて！」

「未来は変わったはずなのに！ み、」

少女は背後から強い衝撃を受けて強制的に滑り台から滑り落ちた。叫び、振り向くと上空に紅いツインテールの少女、少女の妹はいた。小さな背中に二本の金色の鞘―世界樹の鞘を背負い、両前腕にはチャームポイントの水色のリボンを巻いていた。

妹は少女に御免なさいというように片眼を瞬いて、迫り来る構想ビル並みの高さを誇る光の波に目を向けた。

妹の持つ二本の小さな櫂の杖から唐突に淡い光が生じ始めて、
「言霊は永久なる、二層式ロストガーデン！」

と叫んだ瞬間に光はご主人である妹に従うように光の波へと奔つてゆく。光の波と比較して、櫂の杖から生じた光はサッカーボール程度の質量しか持ち得ていなかった。

「らいは変わったはずよ！ 観空！」

「嫌な予感がしたんだ、変わっていないよはーねえ！ もう、対策を講じる暇なんぞない！ だから」

少女を観る事も無く、妹は少女に背を向けてそう言った。

世界樹の鞘から淡い光の粒子が発現し、妹に感情共鳴物質を供給し続ける。それを利用して、光状の剣―ケテルが漆黒の空に遊泳しているミサイルを貫いていた。

「はーねえだけでも守るんだ！ 私の全てだから！」

少女は健気な妹に加勢したかったが、妹のようにアリアを扱う事は不可能だった。少女はただの人間なのだから、かつて兵器と呼ばれていた妹とは違いすぎるのだ。

少女は奇立ちを隠せず、地面から右足を離し、再び、急速に地面へと付けた。

「アリアが、アリアが、あれば！ 言霊は勝利の剣、フレイ」

言ってみたとこで魔法のようなアリアが使用できるはずがない。そんなクソゲーのようなご都合主義設定は世の中にはない。ただ、あるのは目の前にある実に合理的な必然と必然が絡み合って生じた思い通りには絶対にならない現実という融通が利かない設定だけだ。アリアを顕現させるべく、四苦八苦している少女を愛おしむように目を細めて妹は見つめていた。

その間にもミサイルが四方八方と飛来してくるが、全て妹の生み出したアリアー光の剣、光の矢、水、炎の鎖がそれらを粉碎する。そして、光の波も櫂の杖から放たれた光によって進行を食い止められていた。

「はーねえ、悪い神様にならないで下さいね」

少女の聞きたくない言葉を妹は天真爛漫な表情で掠れた声を微塵も隠さず言い切った。

それはまるで別れの挨拶のような言葉だった。むしろ、私はこれから死にますと言っているようなものだ。

少女は鮮やかな赤い光が乱連する夜空に手を伸ばした。けれども、掴みたい小さな、小さな指先の持ち主は遙か、上空に存在していた。それを横目で一瞬、妹は凝視し、

「言霊は私の勝利は愛おしき者の無事、ネツアク」

と優しい声でそう言った。

妹の背に様々な輝きを魅せる十一対の翼がずっと消え去り、一対の巨大な赤い翼を形成する。

その翼が緑色の光を降らせて、少女が手を伸ばして掴もうとする少女の手から逃れるように消えた。

少女の伸ばした両手は微かに震えていた。

「あ、あ、ああああ」

予想外なのか、予想できたのか、解らない展開に放心するしかなかった。ただ、少女は思っていた。

これがあたしの書いた小説ならば、ハッピーエンドにするのに！
どんなにご都合主義と言われてもするのにと。

「はーねえ、可愛い……を育つててください。また、……と会えますから」

記憶の混濁がある妹の言葉は一部再生出来ない。

妹は赤い翼を羽ばたかせて、光の波へと飛び込んでゆく。小さな身体は光の波の中に掻き消えた。数秒の間もなく、光の波は消滅し、深紅の薔薇の花びらが輝き咲いた。

それが妹の姿を見た最期となった。

空から二本の世界樹の鞘と一粒の小さな赤い光がふんわりと降ってくる。

二本の世界樹の鞘は公園の砂場に突き刺さった。小さな赤い光は少女の身体の中に溶け込んでゆく。

一瞬！一瞬にして妹が使用していたアリアの全知識が頭の中に駆け巡った。激しい頭痛が伴うが、抵抗する事無く、その知識を吸収してゆく。

ミサイルが少女を目掛けて飛んでくる。少女は手を掲げてそれを妹の仇であるかのように睨み付けた。

見開いた瞳から赤いコンタクトレンズが落ちるが、少女の裸眼は朱色に塗り替えられていた。

唇をかみ締め、ぼそりと叫ぶ。

「失せろ……。失せろ！失せろ！全部、消えてしまえ！」

少女は鬼気迫る形相で世界を嘲笑った。そして、覚えたてのアリアを諳んじる。

―我はイグドラシルの後継者、朝露ノ遥。

舞え美しき線！飛び散れ血よ！

代償は我が全てで支払おう。

言霊は炎天の鎖蛇、ゲブラー。―

少女の掌から数多の炎の鎖が飛び出し、ミサイルを貫通した。それでも止まらず、暴れ狂うようにミサイル以外の民家や、ガードレール、滑り台、公園の片隅にある古くなったダンボールハウス等を爆ぜさせる。

人々の怒号と悲鳴の中、少女だけが世界樹の鞘を握り締めてにやりと笑う。

「観空を！ 観空を！ 還して！ どうして！ どうして！ あたしは復讐する。いろいろ頑張って運命は変わっていったのにどうして！」

咳き込みながら、涙を流し鼻水を啜りながら、

「どうして！ あたしは世界に復讐する。その為に神になる」

そう決意を示した刹那、人間であった少女自身が虫けらのように思えた。

ああ、神になれたんだ。なれて幸福だという感覚が身体を駆け巡った。それは少女をようこそ、本当の知的生命体である神の領域へと祝福しているようだった。

記憶を頭の図書館に収め直した。

「そろそろ、会いに行きましようか？ そうでないとなあなたが死の恐怖からアリアの少ない過去で詩衣夏のアリア、フェアリーテイルを使用してここまで来た意味がないものね」

薄暗い部屋の中で女性は微笑んだ。

女性の紅い髪だけが周囲の黒という絵から外れて際だっていた。

机の端から掌を走らせて、手探りで紅い瞳のレンズを手繰り寄せた。

女性は溜息をふうと吐くと、つくづく運命とは皮肉だ、自分をこの世界に導いた同質のアリアを使用できるのだからと慮した。

そのアリアを噛み締めるように詩う。

――我はイグドラシルの後継者、朝露ノ遥

示す奇跡は一瞬間 翼無き翼を背に

代償は我が全てで支払おう。

言霊は一瞬間跳躍、フェアリーテイル。――

アリアが完遂されたと同時に女性の姿は闇に溶け込むようにして、その空間から消失した。

二章、姉妹

二章、姉妹

> 一 <

夜は人が眠る時間、みーちゃんの世界と周辺諸国には電灯というミョルニルのような電気を溜めて置く装置があるらしいが私、雫ちゃんの治める和国にはそんな便利なものはない。みーちゃんは現代社会には必要なモノだが、そのお蔭で人は安息せずに夜も生きる為に働き続ける。灯りさえなければ、人全てが眠りに就くしかないのにと語っていた。みーちゃんの国の人は雫ちゃんよりも御馬鹿なんだね！ そうしようとしないうちで。

雫ちゃんは微睡に何度も襲われながら隣に眠る雫ちゃんだけの人形を見つめた。

お人形は雫ちゃんの部屋に來た途端、壁際にあるお人形だけの撮った写真を引つ掻くように剥がして持ち主である雫ちゃんにお説教をしてから、一人で眠れないと嘘を吐いた雫ちゃんの言葉を丸呑みし、今日も同じ布団の中にいる。いつも嬉しさのあまり、舌で優しく人形の右頬を撫で回す。

「みーちゃん、今日の夕食はアイスクリームを食べたんだね」

撫でた瞬間、舌神経から脳のみーちゃん管理スペースが莓アイスを人形が食べた事を記憶する。

「うにゅう……うう」

雫ちゃんの手を両手でぎゅっと握り締め、雫ちゃんのネグリジェに頭をくっ付けたまま、声を発して吐息が肌に当たった。それが安らぎのような感情を呼び、夢の世界へと落ちてゆく。

夢の世界、ただ映像を見ているだけだ。

和国の国旗にも描かれている猫型ブロンズ像の口から水が落ちて、

庭の池へと溶け込んでゆく。池は漣の池と呼ばれており、朝露ノ漣が生誕した記念に作られたものだ。その漣、雫ちゃんのお人形が手を振りながら、よちよちとゆっくりした足取りで向かってくる。

「雫ちゃん、ダアトっていうアリアを覚えたよ。これでいつでも雫ちゃんのお怪我治せるね」

明るい声でそう言うお人形。急にそのお人形が憎たらしくなった。だって、持ち主である雫ちゃんよりも優秀だなんて。自然と指先に力が籠った。

お仕置きするしかない。

口をむずむずと、動かしながら発音を出さずにそう言った。

「漣、遊ぼう」

池の前に佇む兎の耳のように垂れた真つ赤なツインテールのお人形へゆっくりと近づいて、両手でそつとその背中を押した。

「うん、しずくちゃ」

お人形は最後まで言葉を言う事を許されずに頭から水の中に突っ込み、雫ちゃんの手を掴もうと手を伸ばす。伸ばされた手は空を切るだけで決して望みどおりのモノには触れられない。

春先の池はまだ、冷たい。その冷たい水に浸かり、重くなってゆく煌びやかなふんわりとしたスカート部位と淡い緑色が特徴的なドレス。それを脱衣する事も許されずに飛べない鳥のように手という羽根をばたつかせた。

そんなお人形をじつと……見下ろした。

「可愛い、可愛い、お人形。どうか、私の席を取らないでね」

許せなかった。可愛いだけのお人形でいなければならぬ妹の漣が雫ちゃんよりもエクスカリバーを扱うに相応しいという周囲の大人達の陰口が、そして、その事を聞いて無邪気に喜ぶお人形。また……陰口を言われ……何時の日か、漣がエクスカリバーを継承するという真実になってゆくのだ。継承するという事は王位を受け継ぐ事をも意味していた。

可愛いお人形だったが、自分の障害となる存在ならば捨てなければ

ばならないよね、雫ちゃん？

泳げないお人形が必死にもがいているのを尻目に、能面を被ったような表情を浮かべ庭から城の方向へとゆっくりと歩いてゆく。

「うわあ、うつぶ。うあ……お……雫ちゃん！」

水を飲み、それでも私に呼びかけようとするお人形の声が聞こえた。でもね、あなたはもういらないの。バイバイ、人間は雫ちゃんだけでいいの！

雫ちゃんの夢……あの時、死んでしまっていたらみーちゃんとは会えなかった。また、みーちゃんーお人形を愛撫できるんだと至福に心、踊る。何もない天井を見つめ、みーちゃんの微かな寝息を耳を澄ませて聞く。

「可愛いお人形さんのおかげだねん。ねえ、雫ちゃんのみーちゃん！」

そう部屋中に響く声でみーちゃんの耳に雫ちゃんが聞かせてあげた途端に、みーちゃんの右手がみーちゃんの頭下に敷いていた子猫型の枕を持って、雫ちゃんの顔面を叩いた。

「うるさい！ 寝ろよ。子どもは寝る時間だ」

「じゃあん、お休みのキスう」

雫ちゃんはみーちゃんの怒った童顔を熱の籠った視線で凝視し、唇を尖らせてみーちゃんの唇に近づこうとした。

「あるか、ボケ！」

ツツコミと共にまたしても、可愛らしい顔をみーちゃんの右手が握り締めた子猫型の枕で殴打される。こんな反応をするみーちゃんならもう、捨てなくても大丈夫だね？ 大丈夫と自問自答しつつ、目を閉じた。

>二<

早朝の麗しき太陽光が王の間にあるテラスへと射し込み、玉座に深く腰掛ける雫ちゃんを照らした。雫ちゃんは質素な黒い色のドレ

スを身に纏い、両腰にはそれぞれ日本刀を帯刀していた。和と洋の融合は雫ちゃんの威厳さを際立たせ、誰もが今の容姿を見れば和国の姫である事を疑わないであろう。

玉座の横には和国の三毛猫の絵が特徴的な国旗が置かれ、開かれた天井窓から入る風によりはためく。

睡眠剤入りみたいな心地良さに思わず、目を閉じそのまま……寝よう。

「うきゅ！」

寝ようとした雫ちゃんを今日も朝から無表情な背後に控えていた冬架が、背中の余肉を掴み、容赦なく捻った。無言で寝るなどという意のようだ。

冬架は雫ちゃんではなく、目の前にいる朱に言う。

「今朝、帰還した密偵兵からの情報を雫様に報告をお願い致します」
冬架の声の後、朱は雫ちゃんに会釈した。雫ちゃんは若干、不機嫌そうに深く頷く。

「グラン国は近く、クレアル収容所の和国の者を処刑する業務日程があるそうです。何でも肉が増えすぎて収容するスペースが、無くなったとか」

あまりにも残酷なグランの仕打ちに、朱は言葉を言いよどみながらも報告した。

「クレアル収容所か。首都の外れにあるとはいえ、救出に行きたい。個人的な心情としては。だが、雫ちゃん……」

「姫様！」

幼い子どものように自分をそう呼ぶ雫ちゃんの発言に、朱の横にいた中年の男性は叱咤した。

その中年男性は和国の軍服である茶色の制服を身につけ、右胸には幾つもの勲章を身に着けていた。それもそのはず、この男性は和国の総理大臣なのだから。勲章の他にもスキンヘッドが眩しい男性の名は圧影集という。

和国のトップは王。それから姫。そして和国の民から四年に一度

の選挙で選ばれる総理大臣と位は続く。つまり、和国の王である朝露ノ真の死去後は王の座は空席であり、その為、一番この国で権力を握っているのは雫ちゃんという事になる。だが、年の功に勝てるはずもなく実質、国を引張っているのは圧影集だ。

「すまん、大臣。気が緩んだ。今は兵力をそちらに向ける余裕はない。先週のステルス型戦闘機による周辺の村壊滅被害の沈静化。それで手一杯だ」

清ました顔とは裏腹に玉座の肘掛けに肘を掛けながら、苛立ちを募らせて小指を玉座にトントンと鳴らした。わざと鳴らして先ほどの叱咤に対して不服を現す。

そんな姫様らしくない態度を朱、冬架はまたかと呆れ返るのだろう。不満そうな顔をしている。だが、圧影はそうする事もなく、咳払いをした後に言葉を紡ぐ。

「我々にもつと科学力があれば。これもアリアマターという万能な要素に我々が頼りすぎた弊害なのかもしれません」

「ないものに頼る事はできません！ いざとなれば、エクスカリバーで和国を私が守護します。エクスカリバーはまだ、正式には継承してはいませんが、真の力でなくとも他を圧倒する戦力を誇ります」和国の中でも最強を誇るアリア、エクスカリバーならそれは可能だ。それに異論があるかのように軽蔑の眼差しを威張る雫ちゃんに冬架は向けた。

「エクスカリバーの放出形一発なら撃てます」

きつちりと真実を述べた冬架。

「冬架、どっちの味方？」

いつもの愉快的な表情を見せながら朱は、冬架に視線を送った。

「失礼」

冬架の言葉に対して、いいよと手を振る。

「そう願いたいものですな、雫姫。我々はあなたが真にエクスカリバーの後継者であるとは認めておりません。ですが、あなたしか朝露というアリアの才能に溢れた遺伝子を持つ家の人間はいないので

す」

ですが、という否定の言葉を聴いた瞬間、雫ちゃんは素早く両耳を両手で押さえつけてかっと思を見開く。目には見えないはずのものが写っていた。

赤い髪、左右共に水色のリボンで結わえたツインテール、緑色のドレスを着た姿がまるで子供が無理をして大人びているようだった。そんな小さな少女が雫の目の前に佇んでいた。

また、私の席を取ろうとするの？ と雫ちゃんの目は少女を威圧した。

「まだ、雫様を探しているのか？」

圧影は深い溜息を吐き、さらに言葉を続けた。

「そうですね、姫様。所詮、あなたには市民の偶像という立場しか勤まりません。アリアの詩い手の真価が問われるのはアリアを臨界点まで高め撃ち込む放成形にあるのではないのでしょうか？ その点で言えば朝露ノ雫様はアリアマターを全身に漲らせ、十一対のアリアを使いこなすという才能を幼い御身で見せていた。捨て置くには勿体無い人材です」

雫ちゃんと話しているというよりも、まるで朝露ノ雫という人物の凄さを友達に喋るかのように圧影の舌は饒舌に動いた。雫ちゃんは屈辱に唇を噛んだ。

「……の中でも最強なのに……この人達、……の蛙」

冬架はぼそつと何やら独り言のように呟いた。

「……」

冬架の独り言に気にせず、幻影である少女―月見 観空を睨み付ける。

だが、観空が振り向く事はない。

「では、私達はこれで失礼させていただきます」

「では」

朱と冬架が口々にそう言った後、雫ちゃんに会釈をして、自分達の背の十倍以上はある扉から廊下へと出て行った。それを見届け、

会話は圧影の言葉から再開させる。

「ですが、いない者に頼る事はできない。ここは我が和国最強の兵器を行使するというのはどうでしょう。アリアマターを全身に纏う兵器にな」

「大臣！ あなたは知って……」

アリアマターを全身に纏う兵器という圧影が知るはずもない情報を圧影が口にしたと同時に、雫ちゃんが見ていた少女は消失していた。

肩を震わせながら怒りに目をぎらぎらさせて、圧影を睨んだ。

「この虐殺が日常化した世界において、身元の分からない者を誰が自分達の国に招き入れるのですか？ 死者は所詮、死者。気付いている市民もいるかもしれませんが……そんなのはゴシップに変換する事ができるんですよ。新聞という大衆メディアを媒介にして人々の心に植えつけるんですよ」

圧影はもつともらしい言葉を並べて弁論する余裕も、隙も与えないままに持論を展開した。

「そんな事は雫ちゃんが許しません！」

圧影の言葉に激昂して玉座を立ち上がる。鋭い瞳が圧影を射貫く。自分の人形を自分以外の者に壊されたくない雫ちゃんと朝露ノ濤の力に神の姿さえも見ているらしい圧影、互いの視線がぶつかる。

「あなたにできるとでも？ 王位に就いた者ならば、政治に対する否決権を行使する事は可能ですがあなたは姫様。あなた様は王位継承候補なのです。それ以前に雫ちゃんか？ いつまで妹という存在を引きずっておられるのです。話になりませんな」

両手を背後に組みながら淡々と圧影は事実を並べてゆく。

「何故……仮にも王家の……」

震える唇を動かし、言葉に出すがその答えを雫ちゃん自身も知っていた。単純な事だ。

人には生存本能というモノがある。如何にして自分が生き残るのかというものだ。それを成す為には幾つもの方法がある。単純にい

えば、他者を利用するか？ 自分で動くか？ 賢い者は当然、他者を利用する。圧影の述べている事は人道的には不正解な方法だが、自分が確実に生き残る方法としては正解だ。

それが故に圧影を初めとした和国の人間は絶対的な力を持つ十一歳の少女を兵器と呼び、その力のみに期待する。それを姉である雫ちゃんは肯定出来ない！

持ち主の雫ちゃんが肯定できないと、圧影の頬を迷う事無く引っぱたく。

乾いた音が王の間に響き渡った。

「王家？ 死亡と公式に情報が市民に提示された時点でその名前は過去の者になっているのですよ。我々が公式に発表し直さない限りにね。どうします、姫様？」

動じる事なく、圧影は悪魔のような笑みを浮かべてそう何度も質問した。

圧影の背後にある和国という国の意図に自分の爪を噛んで苛立つ。和国は観空を兵器だったとしても、朝露ノ雫だったとしても利用する。

「それは、それはなりません。王家としての責務の名の下にロストガーデンを撃たなくてはなくなる。多くの人間を殺害するだけの、それこそ兵器になる！」

そう叫ぶ雫ちゃんは姫としての発言というよりも、妹を大切に思う姉としての発言をしちゃったかもしれない。

「甘いすな、姫様。雫姫様に関しては私の方で議会に適当な情報を流しておきましょう。だが、現状ではやはり、月見観空に行ってもらうしかありません。兵器が英雄になる為にもね」

雫ちゃんに背を向けながら一部の感情も揺れていない言葉を言い放った。

「え、涙？」

雫ちゃんに指摘されても涙を吹く事無く、圧影は俯きながら足早に歩き出した。

そういえば、圧影には可愛がっていた親戚の少女、奈式風羽がいた。だからといって年下の少女に殺人という愚かな行為をやらせる事でしか、復讐を果たせないなんて。

「復讐が復讐を呼んでいる悪循環が今の情勢を創っている事に気付かないんですか！」

その言葉を無視するように圧影は王の間を後にした。

雫ちゃんは圧影の苛立ちも理解していた。圧影は可愛がっていた奈式風羽という少女を失ってしまったのだから、永遠に。

「もし、人が永遠に生きられる存在ならば誰かを殺すという行為によつては何ももたらされないって気づくのだろうか」

悲しすぎる世界に、その優しい願いは残酷な願いなのかもしれない。

あんなにも燦々と輝いていた太陽は薄暗い雲に隠れて、空から人の愚行に涙するかのように雨粒が振り堕ちた。地面の上で雨粒たちは生死という牢獄に囚われている人々に、平穏に生きると言うようにダンスをする。軽やかに、自由に、ステップを踏んで。ターンした。

雨音に耳を傾けながら、私は自分の授業を受ける姉のはーねえごと、月見遥と生徒達をみかん箱の踏み台の上から俯瞰する。

私の生徒達と同じようにはーねえは木の椅子に深く腰掛けていた。周囲の生徒達も同じように深く椅子に腰掛けて、目線の先にある黒板と教卓から頭だけが辛うじて覗ける状態の私を真剣に見つめる。私達のいた世界とは異なり、私語をする者は僅かだ。

授業を傍聴する準備が出来ていると頷き、私は言葉を口にする。

「アリアには三つの形態がある。一つは前言霊無しでの早急形。これは威力を犠牲にする代わりにアリアマターを受信する人間の身体の負担を最小限に抑えるという特徴を持つ。兵士達はこれを軸にして戦う」

「ふんふん、分かり易いねん。九九、八十二い」

視界から消していたのに、やはり見えるものは見えるようだ。ナイフを逆手に持つ持ち方で羽根ペンを握り締め、表紙の中央にみーちゃん観刷日記帳と書かれた手帳に何やら、書いている馬鹿姫が目に入ってしまった。声を発するから、入ってしまった。

多量生産できる製紙工場という近代的な紙を生産するシステムが和国では存在しない。紙は人の手のみで作られている。当然、高価なモノとなり、白紙を手に来るのは富裕層の人間しかない。今現在、行われている私の授業を受けている生徒達の机の上には何も置かれていない。

授業の内容は全て自分の頭の中に記憶するか、先生に再度、聞きにくるという二通りの方法がある。

貧民層の人々の中に容易く溶け込んだ雫の生態に感心しながら今回は絡まずに放置しよう。

雫と同じくらい目立つのは、白紙の紙にインクの中に羽根ペンのペン先を付けて書くはーねえの猫背だ。

「ここで亜利須とウサギさんのお菓子食い競争を入れて……ウサギさんが亜利須と同じくらい食いしん坊だというイメージを形成と！ うーん、まさか、あたしの小説が国のお札の表紙になるくらい有名なんて感無量」

小さな声で自画自賛しながら、はーねえは自分の小説を書き続けた。良い小説、書いてくださいと何度も頷いた。

雫がクツキーを食べる音と、はーねえのリズミカルなペン音の響く教室。

それを遮るように深瑠が手を上げて喋った。

「早急形しか出来ませんよ、僕たち」

「いや、早急形が出来れば、それでいい。残りの二つの形式はアリアマターを、人間という器の限界まで入れる放出形。これは体力の消費が激しい。いわば、奥の手だ。もう一つは禁断消滅形。今日の抗議では禁断消滅形について知識を増やしてゆく事にしよう」

「禁断消滅形、か」

私の言ったその単語を繰り返すように平然とした顔で雫は俯いた。平然を装っているだけだ。片手に持っているクッキーが微かに震えるのを私は見た。

「奥の手よりも凄そうな形式なのに何でそんな動揺しているんですか？」

「はーねえは動揺バレバレの雫を見て雫にそう問う。馬鹿姫では答えられないと察し、私が答えた。」

「はーねえ。発動させて放ったら死ぬからだ。禁断消滅形を撃つて死なないのはダアトという生命維持アリアを使える私だけだ。尤もダアトの加護さえも失うロストガーデンを放ったら死ぬ可能性は高い」

雫が持つクッキーを奪い取りながら私はそう言った。クッキーを一口齧るが、人参の味がした。即座に、雫の手に戻す。戻されたクッキーをご馳走のように雫は食べていた。

「死ぬって、朱さんの話では」

「はーねえは眉間に皺を寄せて、搾るように言った。」

雫は私にクッキーを手渡そうとするが、断る。私は首を子犬のように激しく、横に振った。

「朱さんは言えなかつたんですよ。エクスカリバー並みの破壊力は得られますが、和国の法律では死刑に当たる違反なんです。例外として観空先生、冬架様、朱様、雫様は使用を許可されています」

「はーねえの隣に座っていた深溜が、遥の原稿を横目で覗き込みながらそう言った。」

雫は私の足元に跪いて、再びクッキーを私に手渡そうとする。無言で首を横に振った。

「死刑か。だが、死体を死刑にすることは不可能だ。法律違反であろうともし、お前達が多く敵兵に囲まれたら、迷うことなく禁断消滅形を使え。わかつたか、生徒達？」

そう言った後、私は雫のしつこさに負けて雫の手に持つクッキーを掻っ攫うように手にとって、クッキーを食べる。先程のクッキー

は人参の味がしたが、今度はババナの味がした。気にいった私は全部食べようとするが、子犬のようなうるうるした瞳で食べるな、私にくれろと訴える雫に食べかけのクッキーを手渡した。

「はい！」

深溜は私の言葉に理解の意を示し、そう言ったのだろう。

「はい！ 美味しかった！」

雫は私の唾液の付着したクッキーを食べ、それが美味しかったよという意を示し、両手を挙げながらそう言ったのだろう。奴の生態には詳しい。だが、雫の両手を掴み握り締めると激怒する。

「馬鹿姫、何しに来たんだ？ ここのところ毎日来ていないではないか？」

「みーちゃん観察日記を付ける事にしたの！」

雫の目線を追ってゆくと、みーちゃん観察日記と書かれたノートが机の上に置かれていた。

不思議に思った。観察日記？ いや、観察日記だろう。呆れた間違いに怒りを通り越して諦念した眼差しで雫を見つめ、観察日記と書かれた文字の刷の字に二重線を羽根ペンで入れる。その上に察という字を付け加えた。

雫に一言言おうかと口にした刹那。何か、この場に存在してはいけない者の気配を感じた。

威圧、恐怖、絶対的敗北感、邪悪、混沌……ここにいてはいけない……あいつは……だ。そう、あいつは……だ。そんなイメージが頭に駆け巡った。雫の羽根ペンを近くの机に置き、窓の外を指差す。「セフィ」

言葉と共に十一対の翼は展開された。絶対的な力を示すように輝き羽ばたく。

無駄、無意味、覚醒、覚醒、覚醒、自我、破滅……。その脈絡を得ない単語が私とセフィの精神を揺るがす。叫びたい！ 二人に灯る声にならない恐怖をアリアに乗せる！

集中せよ、早急形を放つのはそれのみ！ 私は伝う、セフィに。

「はい、観空。言霊は炎天の鎖、ゲブラー」
指先から鎖が放たれる。

「やり過ぎよ、観空！」

行き成りの事態に立ち上がるはーねえ。

「うわあ、うわあ。みーちゃん、ちよ、ちよ！」

咄嗟に両手で顔だけは守ろうとする雫を通り過ぎて……鎖は外へと一直線に伸びて行かずに生徒達を回避し、窓を豪快に割って進入する水状の槍によって、鎖は相殺された。

砕け散り、アリアマターの光の礫になってゆくアリア、ゲブラーと何者かのアリアである水の槍。互角かと気を抜いたのを狙うかのように、水の槍の破片は直線的に飛翔し、私の頬を掠めた。

「ホド、だと」

頬から出る血を右手で抑えながら、それが放たれた方向を凝視した。私の瞳には疑いと未知の恐怖が宿っていた。

ホドとは私の使用する水の槍を放つアリアで、水圧により斬れない物質はほとんどない。ゲブラーか、マルクトでなければ相殺できないアリア。それが今、撃たれたのだ。

右手の片を見つめて紅い色を眺め、それが夢でない事を知る。現実という悪夢である事を。

「あれは何？ あんなの出来るの……。観空先生と朱様、雫様以外にいるの？」

生徒達はそんな恐怖に彩られた言葉を口々に否定の言葉を言い、私の背後へと身を隠した。誰一人、立ち向かう等と考えるモノはいない。思考する以前の問題だ。狩人が子兎等に負けないように、これを放った存在は絶対的勝者なのだ。

教室を明るく保っていた五本の蠟燭の火が風に触れて一斉に消える。

恐怖は静かに割れた窓からすつと、教室へと光臨した。

「実はいるんですよ。初めまして愚かな人間諸君、あたしは神です」
人を舐めきった言葉を喋りながら、四十五度腰を曲げた丁寧なお

辞儀をした。

神と名乗る女性は異質そのものだった。紺色のブレザーとスカート。神の背から展開されている十一対の翼―それぞれ白、灰色、黒、青、赤、黄色、緑、橙色、紫、群青色、輝色の翼が私に絶望の言葉を引き出させるのに十分だった。

「十一対の翼……ああ……あ」

私と同質の十一対の翼をばたつかせている神なる人物が、ロストガーデンを詠唱可能であるという事実は、私の知性溢れる言葉を喪失させた。恐怖が蛇のように、全身に纏わりつく。

紺色の制服から見えるへそを隠すように、クロス路に交差した二つの黒いベルト。その二つのベルトが固定するものは二本の金色の鞘。その鞘には剣は収められていなかった。鞘だからと侮ってはいけない。その鞘から絶えず、アリアマターが放出され、神の身体へと消えてゆく。

「エクスカリバーの鞘。有り得ない」

雫は冬架であるはずのエクスカリバーの鞘を指差して呟いた。

ロストガーデンとエクスカリバーの鞘を当然のように持った長身の女性は獣のような舌なめずりをした。生徒達一人一人を眺め、私の目の前で神の視線は固定された。

「または朝露ノ遥と呼ばれていますね。我等が神の姫様、朝露ノ雫様と同等の力を使う存在でもある。今日は朝露ノ雫を」

雫という言葉を口にした瞬間、暗闇で見えない顔が歪んだ気がした。その表情には邪気という言葉に相応しい異常さが秘められている。

それを感じ取った雫は神に歩み寄ろうとする。私も同じように感じ取ったが、雫の手を掴み止めた。雫の力では万に一つも勝ち目がない。がっちりと掴んだ私の手がそれを物語っている。独りでに震えているのだ。

『神様、私が誰なのかを知ってますか？』

幼い私自身の声が雫以上の行動を取らせようと怒りの感情を掻き

立てさせる。

凜々しい表情を浮かべて私は雫の手を掴んだまま、神と対峙した。
「神？ 頭に雖でも飼っているのか！ セフィ」

アリアを駆使する為にセフィの名を呼ぶが、稲妻によって照らされた神の顔に嘆きの声を上げる。

「はーねえ…… どうして……」

セフィの声は囁くように呼んだ。

「はーねえ」

私も同じ口からその名を呼んだ。

いつも、常に自分の味方であった神―月見遥と対峙していた。セミロングの赤い髪。そして何にでも興味津々な面影を残す全身から溢れる明るい雰囲気。

だが、その雰囲気混じって凄みのような雰囲気が漂っていた。

「嘘、あたし？」

はーねえは泣き叫ぶ女子生徒の肩を抱き慰めながら、月見遥、神を睨みつけた。

「今日は妹を貰いに来ました。その力で私達に悲しい運命しか与えなかった世界に復讐しましょう」

私は理解した。この月見遥は相容れない存在だと！

この世界から争いを無くしたいという望みを持つ私と、この世界に復讐するという痛みを与えようとする朝露ノ遥は必然的に戦う運命にある。脳裏に運命の鐘が響いた。

「さてと馬鹿は放っておきたいところだが、そういう選択は出来ない。そうだよね、セフィ」

「真実です、観空。あの女性は間違いなく、神という人が死後に意思の強い者だけが到達できる種の一人です」

「神！ あんなのが神なわけない！ 幻だ！ 私は……何の為に。では私の正体は永遠に！」

セフィが肯定する真実を否定するんだと朝露ノ遥に向かって叫んだ。

朝露ノ遥はこの対峙こそが悲願であるかのように涙を流す。そして、今の遥のように優しい口調で私のいたずらをそれはいけないと諭す時のように言う。

「先程からあたしは言ってますよ」

私の手を握り締めながら、雫は言霊を呟く。

アリアを呟いていた。雫が飛び出さないように、指先に力を込めた。

――全ての主神。雫ちゃんはあなたの心に詩う。

奉げるべきものは雫ちゃんの根源。

示す奇跡は貫く雷光。天空の覇者の如く一点を制す。

雫ちゃんを邪魔する者に裁きを。

言霊は神々の雷、ミヨルニル。――

「随分と耳が遠くなった……よ？」

「みーちゃんに話すな！」

朝露ノ雫の言葉を掻き消すようにして、詠唱された神々の稲妻は朝露ノ遥が進入してきた窓から一筋の稲妻が迸り、そのまま、背後から貫くこうとする。朝露ノ遥はそれを予想していたように手で払い除けた。払い除けられた稲妻は意思があるように雫の元に帰り、稲妻状の槌を形成した。それを雫はすぐさま、手に取った。

朝露ノ遥の手にアリアマターの光状で出来たシールドのようなモノが形成されていた事を私は見逃さなかった。私のアリアであるケセドの早急形だと予測した。だから、意図も容易く、稲妻に触れたのだ。

「何故だ」

自分のアリアをいとも簡単に使われていることに、怪訝な表情を隠すなどという事はできそうにない。

「姉として……なんてわけないよね？ 馬鹿姫さん、あなたは妹を」

「やめろおおおおお！」

挑発するような朝露ノ遥の言葉を遮るよくに激昂しながら、雫は高く飛び上がって槌を振りかざす。

が、朝露ノ遥は一步、足を動かしただけで無駄な動きの多い雫の打撃を交わした。

「ケテル！ コクマー」

再び、雫が槌を振り回す中、朝露ノ遥はそう言いながら指を鳴らした。

「不完全な前言霊だけで動作するわけない」
深瑠の言う通りだ。成し得た者はいない。

朝露ノ遥は不吉な笑みを浮かべ、雫の猛打をひらりとダンスを踊るように回避する。回避された雫の槌による打撃は教室の机や椅子を黒焦げにした。

教室の生徒達は和国の姫である雫が赤子の手を捻るように弄ばれている事に恐怖を覚え、ある者は廊下へと絶叫しながら飛び出し、ある者は教室の片隅でしゃがみ込み震え、ある者は神の神々しさにメデューサに魅入られた者の如く固まった。

そんな殺伐とした雰囲気の中で、雫はついに朝露ノ遥の背後を取り、

「もらったあ！ うぎゃあああ！」

教室の暗闇の中からそれを待つていたとばかりに雫の身体へと突き刺さった。ケテル……光の剣が右足、右肩、右手に突き刺さり、コクマー——光の弓矢が左足、左肩、左手に突き刺さり、苦痛に顔を歪ませながら雫は、教室の床に転倒する。

「人間が神に触れるなんて出来ると思わないで馬鹿姫さん」

「うぎゃあああ」

血を流血させて床の上に倒れている雫を容赦なく、朝露ノ遥は踏みつけた。表情は優しいはーねえのまま踏みつけた。雫は言葉にならない呻き声を上げながら、私を見て涙を浮かべる。

私は身体を動かそうとするが急に激しい眩暈に襲われ、ふらつく。

「私が馬鹿姫の妹。朝露ノ遥だというのは？ それが私の正体？」

「し、しずくちゃんに手を出さないで！」

同じ口から流れる疑問、慟哭の声。

「セフィ……私は……しずくちゃんを、馬鹿姫を助け……」

苦痛に顔を歪ませた。朝露ノ雫という大切な姉を見た瞬間、それは再生される？

頭に浮かぶのは……庭にある池、小さな二人の少女。一人は不器用で努力家の姉、もう一人は天才肌の妹。いつも怪我ばかりしている姉に妹は、私はこう言った。

『雫ちゃん、ダアトっていうアリアを覚えたよ。これでいつでも雫ちゃんのお怪我治せるね』

少女の記憶を、セフィー小さな雫の記憶を還すべく、セフィは私に言う。

「私が私を見つけたからもどるよ、幼い雫を私に返す」

溶け込んでゆく記憶が私の身体を暖かく包み込む。アリアの紡ぎ方の知識が全て、濁流のように流れ込んでゆく。そして……その果てに満面の笑みを浮かべながら小さな赤い髪のツインテールの少女が私に手を振って口を動かした。

悪い神様にならないで……さよなら、観空、と。

頭から頭痛が消え去り、それと同時に全身へとアリアマターの光の礫が集約してゆく。

「さよなら、みお。しずくちゃん、助けるよ。待っていて」

床を強く蹴って朝露ノ遥との距離を縮める。それを待ち構える朝露ノ遥は普通の人間を超越した瞬発力に驚き、反応できずにいる。「神姫に覚醒した？ いや、雫の領域を出ていない。ケテル」

朝露ノ遥を中心として十二本のケテル、光の剣が空中に浮く。全てのケテル、光の剣が一直線に私へと飛翔した。思い出した私本来の身体能力でも躲せない、瞬時に判断し、アリアを紡ぐ。

「言霊は木々の守護、ケセド」

広げた両手にはアリアマターの光粒で形成された盾が現れ、その盾に次々とケテルが突き刺さってゆく。即座に朝露ノ遥は指を鳴らし、盾に突き刺さったケテルが独りでに盾から抜け出し、何度もそれを繰り返す。それは足止めとなって効果を発揮した。

「禁断消滅形か」

朝露ノ遥は全く動揺を見せていない。

膝を床に付け、苦悶の悲鳴を上げながらも両手のアリアを形成させ続けた。

「こわれちゃ……う……わたしのおにんぎょう……。だめ……」

雫の言葉に私は首を動かした。

ぐったりと床の上に仰向けになっている雫は放心しつつも手を上げようとするが、手と肩に突き刺さった光の剣がそれを許さない。雫の涙で霞んだ瞳は口から血を吐き出している私を捉えた。

「うわああああ。言霊は未知なる英知、ダート……。うわああああ」
アリアを支えようと気張る雄たけびに混じって紡がれたアリアは、観空の身体の崩壊を留めた。それでも、口から止め処なく血は流れ続けた。

ふと、背後から近づく人の気配がある事に気付き、その方向に振り向く。走ってきたのは「ねえ」と目が合うが言葉を交わす事無く、私の横を通り過ぎた。

「はーねえ！」

ケテル―光の剣の猛攻により、盾を張るしか選択肢のない私は止めようと叫ぶしかなかった。

だが、はーねえは止まらずに乱雑に置かれていた机の上に飛び移り、背後から跳んできた何者かが紡いだケテル―光の剣を両手で受け取り握り締めた。

朝露ノ遥が私に気を取られているうちに朝露ノ遥の右肩を斬りつけた。ケテルはすっと右肩に入り、はーねえはケテルを手放す。

「ケテル？ 人間、風情が神の剣を使うな」

明らかに不快感が露骨に籠った朝露ノ遥の視線ははーねえへと向けられ、朝露ノ遥のケテルが解除された。

ケテルという障害のなくなった私はケセドを解除し、口に付着した血を前腕で拭き取ってから、雫の所へと走る。

「風羽、僕にもケテルが撃てた」

走っている最中に深溜のそんな声を聞いたような気がした。

「あたしがあたしならば、あたしを殺したらあんたは消える。だから攻撃できない」

はーねえは未来の自分を指差しながらそう豪語した。

「しずくちゃん！ 今、傷を！」

眉を顰める痛々しい表情を浮かべ、雫の涙を優しく撫でるように拭き取った。

「だめ！ それ以上、アリアを使ったら……雫が死んじゃうよ……。それよりも、エクスカリバーと和国を……。きつと、雫の……」

雫の瞳が強く否定の意思を見せるが、私は首を振った。

「いやだあ、いやだあ、いやだあよ、しずくちゃん」

小さな少女のように泣きじゃくり姉の死に繋がるそれを否定する。

『かあさま』

『アリアマターの少ない世界で幸福に暮らすのよ。アリアさえ使わなければ、あなたは神にはならないから。ねっ、あたしの可愛い雫』
記憶の中から私と同じ髪の色之母との別れ、和国のある世界との別れを思い出し、

「かあ……さまあ、ごめんなさい。もう、なくすのはいやだあ。神に例え、近づくのだとしても！ 言霊は未知なる英知、ダアト！

禁断消滅形」

背から具現化された十一対の翼が俯く私と仰向けのまま、教室の天井を虚ろな瞳で眺める雫を包み込み、眩い光を放った。

「あたしと対等に戦えるとも思うのか？ そんな理由で？ 傑作だあ、これは」

光と光の隙間からケテルー光の剣を卓球のラケットのように身構えるはーねえと爆笑交じりの声を発する手ぶらの朝露ノ遥が見えた。褪せる心とは裏腹に、意識が薄れそうになる。

「何を笑っているの？」

「神になった時点で、神は別の者として世界から認識される。つまり、過去の私を殺しても私は存在し続ける」

朝露ノ遥は後退しようと右足を床から離したはーねえの首を両手で握り締めて力を込めた。

「う、うううう。うつつわあああ」

「はーねえを放せ！」

雫の治療が終り、雫の膝に頭を乗せて叫んだ。

「その程度の力を使用したくらいでもう、それ。観空、まだ神として覚醒していないようね。詩衣夏の差し金か？ それじゃあ、世界を壊せない」

「うっ、痛ったああ」

朝露ノ遥ははーねえの首を離し、咽るはーねえを無視して教室出入り口に作られた椅子と机のバリケード付近まで歩んだ。

「人間、知っているか？ 和国を何故、あたしが創ったのかを。あたしの下で世界を滅ぼす逸材が欲しかったからだ。でも、お前達にはガッカリだ。もう、いない」

朝露ノ遥は積み上げられた机を素手で殴り、落下してくる無数の机を蹴り上げては蹴り上げ、やり場のない怒りをぶつける。それを生徒達は怯えた瞳で見つめる。

雫の膝の上に頭を寝かす私は叫び、震える右手は何かを掴むようにして強い途方もない怒りによって上げられた。

「はーねえ！ 頼る者のいない人の気持ちを私達は痛いほど、身に刻んでいるはずです。なのに！」

朝露ノ遥はその声に振り向く。

「観空、遠い昔の話です。今はあたし達は種が違うのです。人間とは！」

「違う！ 言霊は最期の剣、ケテル！」

私は十一対の翼を展開させ、高く掲げた手に光輝くアリアマター状の剣―ケテルを握る。強い意志を宿したケテルが朝露ノ遥に突き刺さるか否かの刹那、朝露ノ遥の瞳から大粒の涙が零れた。

私の殺意がずっと、何処かへと溶けてゆく。ケテルは弱い意志によって消滅した。それは月見遥を印象付ける涙だった。私との暮ら

しの中にあつた涙だと私は思い、呆然と立ち尽くした。

私の瞳には割れた窓から教室へと土足で入るア力が映る。ア力はそつと、歩み、朝露ノ遥の右手首を掴まえた。朝露ノ遥が振り向いた時、ア力は朝露ノ遥の潤んだ瞳をしばらく見つめる。

「さあ、あたしと一曲、踊ってもらおうか？」

「踊りたいところだけど、ゲームの準備をしなければいけないから。本当は観空にも手伝ってもらう予定だったんだけど、こんなに弱いのでは……ねえ」

朱の手をやりわりと振り払うと真っ直ぐ、雫に膝枕されている私に歩み寄ってゆく。

雫は守るように私の頭をぎゅっと抱きしめ、目を閉じて俯いていた。

すつと、雫の横を通り過ぎた恐怖は、朝露ノ遥は突然の嵐が過ぎ去るかのように眩いアリアマターの毒々しい光に包まれて私達の前から姿を消した。

「独り……なのか？ 望まない。望まない」

私が求めていた事はこんなにも望まぬ事だったのか。私の記憶が肯定する赤い長髪のローブを纏ったいつも笑顔の絶えない女性が母親だと。

「かあさま、私は神でしょうか？ それとも……げほっ」

届いているのかはわからない。だって口の中は血だらけで開く度に、血が噴出しているのだから。こんなに脆いという事は、私は神ではないのだろうか。壮絶な顔で涙を流しながら駆け寄ってくるはーねえに問う。

「こんなに血が赤いから人間なのでしょうか？」

「観空！ 何、言ってるの？ ねえ、ねえ！」

はーねえの言葉から察するに私の言葉は人間の言葉としてしつかりと発音がなされていないようだ。過去に私を突き落とした後先を考えない馬鹿な姉に、今も私の頭に馬鹿みたく鼻水を垂らす姉に問う。

「私はまだ、しずくちゃんの可愛いお人形？」

「しん、しんじゃあいやだぁああん」

馬鹿な姉の膝枕は居心地が良いが、上から垂れてくる鼻水が髪にべとついて余計だ。目の前が真暗になってきた。私は死ぬのだろうか？ 私という存在の何たるかを理解できずにみんなの世界から隔離されたままで死ぬのだろうか！ いやだ！

「神様、私は嘘を吐きました。本当は、それが目的ではありません。私は、私は、一人ぼっちでいたくない！ その為には、知る必要があるんだ……。私が誰なのか、知ってますか、神様？ 私は……。そこから、根を張り、自分を……。咲かせたい……。わたしは……。」
唐突に、意識が途切れた。

>三<

私はいつも、孤独だった。孤独が故に自分という小さな世界を作り上げた。ダンボールハウスの奥に置いてある箱には、誰にも覗かれないようにガムテープという粘々した不思議な物質で止めた。その中には月見遥という人間から貰った『なんでも知っている神様』という絵本が入っていた。ゴミ漁りから帰ってきたボロボロのワンピースを身に着けた私はいつものようにそれをダンボールハウスから取り出す。

そして、夕焼け色にお化粧をした綺麗なお日様の陽が当たる公園の滑り台の天辺にちょこんと座り、ページをゆつくりと捲った。

「神様はお犬さんの無残な死に悲しみました。神様は知っていたのです。このお犬さんが車に轢かれそうになっていた子猫さんに体当たりして、自分が子猫さんの身代わりになった事を。神様は優しい優しいお犬さんを生き返らせる事にしました。お犬さんは元気に野原を駆け回り、今も平和に暮らしています。神様は良い事も、悪い事も何でも知っているのです」

いつものように朗読をして、最後のページに描かれている金色に

輝く神様を見つめて本を閉じ、ビール瓶によって生じた私の切り傷のある両前腕を見つめた。何度も見つめている間に、傷が巻き戻し映像のように塞がってゆく。自分の得体の知れなさに恐怖を感じた。私の紅い長髪を揺らしながら風が走る。身を竦めた。それでも私の中にある恐怖という風の恐ろしさだけは、何処かへは行ってくれなかった。

こんな時に私は見るのだ。絵本の中にある金色に輝く神様を何度も、何度も見るのだ。

「神様なら知ってますよね。もつと頭が良くなって神様の所に行く方法を考えて、私は神様に聞きたいです。私が誰なのかを」

私の呟きに答える者は誰もいなかった。

夢見がちな記憶のない私は信じていた、神様とはそういうものだと。

砂場で遊んでいた二組の同世代の少女達は帰り支度を終えて、それぞれ友達に手を振って自分の家へと帰ってゆく。私は目を細めてそれを見つめた。

公園で遊んでいた人々が帰ると、そこからは公園全体が私の家になるのだ。夜になると怖い人々が公園に屯する。その人々から身を守る為に、ダンボールハウスの周囲に鉄線を巻き、そこに電流を流す作業をする。それをする為に絵本を脇に抱えてダンボールハウスへと戻ってゆく。

それが終われば、私は眠りに就き、朝日と共にゴミを漁る。そして、夕日の映える公園で絵本を朗読する。

これが私の小さな、小さな世界。ささやかだけど、静かな誰にも邪魔されない世界。

> 四 <

自分の脳が自分というモノを認識する。それはパソコンが起動し、デスクトップの画面が起動するという段階を踏んだプロセスがある

のではない。急な微睡みという認識から自分がまだ、生きているという事にはっと気がつくのだ。私はそれを感じた後、目を擦りながら寝返りを打とうとするが、何か身体に引っ掛かって両手が金縛りにあったように動けない。足をバタバタと動かそうという命令を脳に伝達させるが動かない。

あれだけのアリアを使用して代償がない事は考えられない。きつと五体不満足になっているのだろう。冷静に今の状況を私は勝手な推測で理解し、それが真実かもしれないという覚悟を決めて 目を開けた。

天井に観空、私の様々な写真が貼られている事から雫の部屋だと認識する。

右手の方に私は首を向ける。右手はちゃんと存在していて、怪獣のような鱗を掻いている雫にぎゅっと両手で掴まれていた。左手の方に首を向ける。左手もちゃんと存在していて穏やかな寝息を立てながら、はーねえがぎゅっと両手で掴んでいた。その意外でもない光景に安堵の溜息を吐く。

確認するまでもなく、両足もちゃんと私の身体にくっついていてはーねえの両足と雫の両足に絡まっていた。

いつものように水色のリボンが絡まっている右の前腕を見つめ、毎朝の恒例となった日課をする為に静かに口を開く。

「言霊は最期の剣、ケテル」

すると、一本の輝く剣が私の前腕付近の中空を駆り、前腕を何回も切り裂いた。切り裂く度に赤い血が飛び散り、その血の深い赤い色を凝視して歓喜した。

「まだ、血は赤い。私は人間だ」

だが、その歓喜も一瞬のものに終わる。体内から淡い光の粒が漏れ出し、前腕の裂けた傷を包み込む。そして、意思を問わずに傷は塞がった。それが私に言うのだ。

お前は人間じゃない！ と。

「うぁうぁうぁうぁ。私は何処の仲間に入ればいい」

声にならない呻き声を上げながら前腕の痛みが消えた事に心を痛める。

「みーちゃん、泣かないで。何が悲しいの？」

「わかんないよお、馬鹿しずくちゃん。私は……」

泣いている私の涙を雫は両手で掬う。言葉を詰まらせてその先が言えない私に困惑しているのか、難しい表情をした雫は助けを乞う為にはーねえの頭を叩いて起こす。

「痛い！ 地震か！」

そう言うベタな台詞を上げてはーねえは頭を両手で押さえ、防御した。

「お姉様、みーちゃんが」

その言葉に従って、はーねえは眠そうに欠伸びながら私の方を見る。私は咄嗟に目を赤くしながらも頬を膨らませて涙が零れないようにする。はーねえは私の顔が付くくらいまで近寄った。

「また、一人の時だった頃の夢を見た？」

違うと首を振る私。それに対して、はーねえは優しい微笑みを浮かべて私の頬に触れた。

「じゃあ、いつものように不安になったんですね。大丈夫です、あたしがいつも一緒に居てあげるからね」

「はーねえ、うん」

いつも一緒に居てあげるというのはーねえの言葉が真実だという事を私はよく知っていた。孤独だった私に初めての仮初の場所を与えてくれたのだから。この人は信じられると、催眠術に掛かったように自然と首を縦に振り、笑顔が溢れてきた。

それに嫉妬した雫は観空のお腹の上に押し掛かりながら叫ぶ。

「馬鹿姉じゃないよ、みーちゃん。さあ、昔のように偉大なる雫ちゃんって呼んで！ 偉大なる雫ちゃん！ リピート アフター ユー？」

自信無さ気に英文を言う雫を押しつけて立ち上がった。そして、雫を指差して怒鳴る。

「リピート アフタ ミーだ！ 偉大なる馬鹿姫！」

私の適切な言葉を無視するかのように雫は私を変態の眼差しで見つめる。

私の癖のない流れるような紅い髪は背中まで伸びていて、その背中の先には雫にとつても、とある人々にとつても理想郷である子猫さんパンツがお姿をお見せになっていた。息を呑みながら歩腹前進の姿勢で恐らく、子猫さんパンツを観る為に雫は絶景ポイントへと向かっているのだろう。

「み、みーちゃんの下着姿、はあ、はあ」

「おまけに変態か」

雫の顔面を蹴り上げようとするが、とんでもない反射神経を持つてして布団のある方向へと蛙のように跳ぶ。それに驚いている私に再度、雫は背後から抱きしめるように飛翔！

「みーちゃん！」

私の背中を守るようにしてすつと横から出現したはーねえが、柄にしくちゃん最強と彫られた卓球のラケットを手にして振り上げた。

「詩乃学園中等部卓球部奥義、ラグナロク！」

名前負けしたサーブ名と共に雫のぺちやぱいを強打した。

「うぎゃああああ」

そんな大げさな悲鳴と共に雫は布団に転がり悶えた振りをした。

それを見てはーねえは満足したようにラケットを鞘に収める振りをし、言った。

「ふつ、これが全国の強豪と渡り合った我が詩乃学園中等部の奥義です」

「いや……はーねえ、詩乃学園卓球部にそんな凄い奥義ありません。はーねえが、よし、ブラウス装着」

飾り気のない無地のブラウスに細い腕を通してから、

「ドラゴンスラッシュとか、ゴールデンブレイクとか、果て無き罪の連鎖とか、適当に名前を試合中に奇声を上げていただけでしょう、

奇声の遙」

子猫形の枕の傍に置かれたピンク色のランドセルからジーンパンを取り出し、布団に投げ置いた。

「そうとも言っね、観空」

はーねえは平穩を装おうが、顔が人参色だ。私は人参には敏感だ。雫は私の似顔絵が描かれた筆笥を覗き込みながら興奮した口調で叫ぶ。

「今の。雫ちゃんの和国の国技、卓球の技に全てありますよ!」

「朝露ノ遙、はーねえ」

右前腕に水色のリボンを巻きつけながらじっと、はーねえを見つめて低い声で言った。

「未来のあたしに抗議してね、観空」

と言いながら、愛想笑いを浮かべた。

「みーちゃん、そのブラウス脱いでこれ、着よう。これ!」

肩の部分がふんわりと微妙に盛り上がり、スカートの部分には兎の形のフリルが付いた全体的に真っ白な洋服。いわゆるゴスロリ服を雫は私に見えるようにして広げた。

「却下だあ。何故、ゴスロリ系なんだ。私には似合わない」

水色のリボンで結んだツインテールのお下げ部分を指で弄びながら、紅い髪の自分には似合わないと思っぽを向いた。

「似合うから」

雫はそう言いながらゴスロリ系の服を持った両手を微かに動かして強調した。

「それには同意する」

同意しないではーねえ。

「わ、わかりました。着ますよ、着ますよ」

投げやりな言葉を言い、雫からゴスロリ系の服を引ったくる。

社会という人間の作ったシステムはよくできていて、意図的な綻びさえもその中に隠蔽する事が容易に可能である。そんな事を観空という天才である私は十時間前に痛感した。総理大臣と名乗る禿、いや、圧影という学名の猿が超天才で美麗な私に対して命令口調でクレアル収容所を襲撃して、囚われている民間人を保護しろと。当然、私は姫である朝露ノ澪がそのような場所に赴くかと反論した。そしたらあいっは姫様は死んだのだと言った。どうやら、公にならなければ何と叫ぼうが自分の意のままに操れる兵器として使えると判断したのだろう。

十時間前の私はそんな感じだった。今の私も……。

正直、頭にきていた。フリルを両手で掴みながら、暗闇の中にお化けが蠢いて居そうな洞窟内を不機嫌な表情で黒いブーツの踵をわざと歩く度にもう一足のブーツの踵にぶつけながら歩いていた。

お腹の中に煮えたぎる怒りが程良く、煮詰まってきた。私の頭の遥か上空を飛ぶ黒いコウモリを睨み付けて言う。

「おい、場違いな服装だぞ、しずくちゃん。おかげで奴等に目、つけられているぞ」

「なあに、雫ちゃんの服の袖を掴んでいるんですか？　もしかして怖いんですか？」

姉であるという事実を完全に忘却の海へと馬鹿天然の力で投げ捨てた雫が、ねちっこい口調で私の前腕を時計回しに小指をグリグリと押しつけながら言った。

咄嗟に手を離そうとするが年上の力には適わなく、そっぽを向いた。

「そついうお前こそ、いつぞやの時みたいに熊さんパンツを濡らしているだろう？」

なるべく大きな音が反響するように大声でそう言った。

雫は激しく首を横に振る。

「濡らしていません。あれは蒸気です」

雫の言葉から、蒸気機関車が雄大な草原の中、煙を上げて走って

いるのを連想し、私は笑いを堪えた。そして、前を歩くはーねえの元へと走ってゆく。

「はあ、これじゃあ遠足だ。あたしの求めるファンタジーが！ 洞窟内には進化という概念を、全ての生物が辿る行程を無視したような恐竜型のモンスター、仮名称ウルトラザウルスがいねえ」

はーねえは肩を落としながらそう私に呟いた。

遠足も何もクレアル収容所へは私一人が行くはずだった。それを権力という力に屈して、承知していた。それは風羽の事があるからだ。代わりというわけではないが、弔いというわけでもないが、それらが入り交じった何とも不思議な高揚感に包まれて、最終的に承諾したのを私は覚えている。決意を胸にアリアゲートの裏門に来た私を待っていたのが、はーねえ、雫、冬架、深瑠だった。はーねえはタンクトップにジーパンとラフな格好で背中にははーねえの背丈と同等くらいの日本刀を帯刀していた。雫は社交用の赤いドレスに私から以前、誕生日に貰った水色のリボンを両前腕に身につけていた。冬架は白い巫女装束に身を包んでいた。異様な集団に混じって一人だけ、深瑠は長袖で防寒にも優れている蒼代学園の白いブレザーとズボンという容姿。だが、彼らにはあるモノが欠けていた。

その記憶を手繰り寄せて私ははーねえにぼそつと、言う。

「さすが、食料は？ と私が聞いた時にコンビニで買う。支払いはマナちゃんカードでねつと答えただけの事がありますよ」

「まかせて、小説家というのね、迫り来る締め切りという名の悪魔と常に対峙しているから。現実逃避っていう奥義を会得する事ができるのよ。天才な観空でも知らなかったでしょう？」

「あ、いや、そ、そうですね」

馬鹿姫みたいだと思ってしまった私ははーねえの言葉に微かな動揺を洩らしながらも頷いた。

歩く度に普通は新しい視野が絶えず更新され、世界は変化に富むがかれこれ二時間、洞窟内を歩いている。私の視線にはまだ、平坦な道と黒一色の世界が広がり、先頭に行く深瑠の持つ松明の灯りだ

けが鮮やかな朱色を放っていた。その風景に飽き飽きして大きな口を開けて欠伸をする。

ゆらゆらと眠らせる五円玉のように上下左右に微かな動きを魅せる松明の灯りが、何の前触れもなく停止した。それを持っていた深瑠が私の方を振り向き、情けない声で喚く。

「池があるんですけど、観空先生？」

「とりあえず、私を肩車して池を渡れ、弟子」

眠い目を擦り、けだるそうに言った。

「はい」

「駄目、甘やかさないの！」

深瑠が私の元に駆け寄ろうとするがはーねえの一声が止めた。

「仕方ない。ビナーで渡るから良いか。言霊は天空の覇者、ビナー」
そう答えた後、十一対の羽根を展開させて、池の向こうまで飛翔した。その飛翔時に身体から放出される黒い光粒は深瑠の松明に照らされて、俯くと池の中に振っている様子を辛うじて確認できた。それを降らせている小さな妖精のような私は天を優雅に駆ける。右へ左へ、遊ぶように、軽やかに。

そして着地した。

「さてさて、他の凡人とはーねえはどうやって渡るかな、楽しみ！」
地面に転がる小石を両足で弄びながら、目を細めて向こう岸の様子を見つめる。

何やら雫とはーねえが喋った後に、雫ははーねえに手を差し出して反射的に雫の手を取った。雫の手の中に雷の網が具現化され、手持ちを確保してから池の中央天井にある犬歯のようなでっぱりに向けて放つ。上空に歪曲を描き、でっぱりへと意志のあるように巻き付いていた。

雫とはーねえは地を強く蹴り、中空へと身体を投げ出した。

「はーねえ、蝙蝠がいますよ」

私の呟きが届くはずもなく、天井にいる蝙蝠と目が合っているであろうはーねえは、

「ああああああ！」

こちらにまで、響いてくる麗しき私のお姉様、はーねえとは思えない男声を上げた。

遙の顔面へと襲い掛かろうとする蝙蝠を目の前にして、はーねえと雫は急降下する。

能天気にも雫は口を尖らせて口笛を吹いていた。私が耳をすませて聞くとみーちゃん愛してるうと聞こえた。

「私は愛してないぞ」

背負っていたピンク色のランドセルからパンの耳を出して、頬張る。膨らんだ頬がキュート！で今すぐ抱きしめたいとはーねえはいつも言うが、ハムスターではないぞ。

不相応な雫の態度にはーねえは怒りを募らせ、上空で吼える。

「もつと、スマートに渡れないの！」

「それは無理ですね。馬鹿姫に発想の転換を期待したら駄目」

ちやつかりと両腰の剣、エクスカリバーとなっていた冬架が失望よりも深い哀れみに富んだ声を洩らした。

はーねえと雫、冬架は地へと足をつけた。壮絶な体験にはーねえは中腰になって息を整える。

私は横目でその姿を一瞥し、パンの耳をもう一つ食べようと手を伸ばすが、うーんとしばし悩んで理性が勝ってしまい、先のことを考えてパンの耳をピンク色のランドセルに戻した。

ただ一人男の子な深瑠が池を隔てた地できょとんと私達を売られてゆく牛の如く、凄まじい瞳で見つめていた。

パンの耳を十分に食べられなかった欲求を深瑠で果たすか。いわゆる八つ当たり。

「言霊は炎天の鎖、ゲブラー。巻きつけ」

十一対の翼が一瞬、私の背に出現し、その中の紅い羽根が他とは逸脱し点滅した。指先から鎖が具現化されたと、寸分のズレも生じない頃合で十一対の翼は背から跡形もなく、すっと消滅する。そんな事など構う事無く、私は赤く輝く鎖状の光の集合体を助走をつけ

て投げた。

すっと、直線のまま、中空を駆る鎖。

深瑠の華奢な身体にまるで予定調和であるかのように、鎖は巻きついた。

鎖の中でジタバタ動く深瑠の心の準備なんぞを待たずに、鎖が縮まるイメージを！

強固な意思に変換し、自分の意思―アリアへと伝わせてゆく。それは刹那で行われ、深瑠の身体を巻き込んで暴走したロープウェイ並みに急速に縮んでゆく。

深瑠をこちらに放る事が目的だ。そう、放る事がねと私は無邪気な笑みを浮かべた。

「うりゃあ。弟子の一本釣り！」

鎖の束縛から放たれ、天高く舞い上がる深瑠を仰ぎ見ながら言った。

「流石、みーちゃん上手い」

私の無駄も隙間もないアリアの応用力に手放して賛美を送り、万歳する雪。

「わーぱちぱち」

それに悪乗りして人の姿に戻った冬架がいつもの人形のように微動しない顔つきでこれから苦痛を味わう深瑠へのささやかな手向けだとばかりに乱雑に拍手した。

「うきやああああ！」

女の子のような可愛いらしい悲鳴を上げながら落下してゆく深瑠は、身体を丸くして衝撃に備える。そして、深瑠は軟らかな地面に転がり、仰向けに倒れた。

結果、深瑠の制服は泥で着色される。泥に陵辱された童顔を両手で擦るが、さらに酷い有様になるだけで何ら意味がない。

「非人道的な……惨い……」

深瑠はぼそっと人事のように言った。

深瑠は自分自身の姿を舐めるように見回す。清廉なイメージであ

った白色のブレザーが今では白と黒く濁ったとの近寄りがないコン
トラストを描き、白いプリーツスカートも同様だ。

眉をしかめて深瑠の有様を凝視していた私は子どもならではの
言を放つ。

「深瑠、汚い。私に触れるな」

悪臭を放つてそうだからと感情のみの言葉の後、理性で考察した。
「痛いあ。当初のプランはこんなに痛くなかったのに。観空先生、

勝手に変更するんだもの」

雫は深瑠に私がアニメ柄になったハンカチを貸し与えた。

固まっている深瑠に何故か、強い近親感を持った。

「みーちゃんの不始末は姉が片付けるのが当然だよ、お姉様あ」

松明にマッチで火を点けながら雫が胸を張っては「ねえに言った。

「甘いよ、馬鹿姫さん。観空を叱ってあげる事も大切なんですよ」

「さすが、お姉様ですね。愛のムチです。愛のムチ」

ムチを振るう動作をしながら雫は一人、離れた場所に立ち尽くし
ている私へと近寄り、私の頬をいつものように、ぷにいと指で軽く
押した。それが挨拶のように。

私はあえて何の反応もせず、我ここに在らずといった虚ろな表情
で、目だけが流し目でそれを認識していた。

馬鹿姫ではなく、かあさまと一緒に来てくれれば良かった。

「かあさま…… かあさま…… かあさま」

枯葉が宙に舞うかのような儚げな声で、私は何度もその単語を咀嚼
した。それはかあさまが恋しいからではない。かあさまの告げた
自分に残された時間の恐怖から、かあさまと喧く逃れられそうな
気がした。唯一、強く生きていられる精神安定剤のようなモノだ。

時折、そう喧かなければ、雫はともかくとしては「ねえに自分の
膝ががたと震えているのを気付かれてしまう。

さあ私、演じる。仮初の自分、月見観空を！

私は深く息を吸う。

「馬鹿姫？ お前の流行りか？ 随分と可愛らしくて憎たらしい遊

びだな。私も混ぜろ」

そう言いながら、雫の頬を指先でぐりぐりと弄んだ。雫にとっては悦楽が向こうから飛んできたのだから私の行為に抵抗しないのだろう。

さあ、行こう。かあさま、私は必ず、自分で自分の最期の選択をします。

そう胸に決意を仕舞い込みながら、私の厳しい眼差しは洞窟の先にあるクレアル収容所の先にあるモノに向けられていた。それが必ず、仮定になるのならば、

私が誰なのかを知っている？

私の存在証明は成立する兆しがあるのだろうか。

>六<

神と名乗る存在との出逢いが私、月見観空を雫に変革させた。雫であるからこそ、私は全てを知ってしまった。アリアマターという物質は奇跡を齎すものであり、雫や神のような強力な器を持つ存在にとっては劇薬でもあるという事実を知ってしまったのだ。

今朝、目覚めなければあの夢の中に、邂逅の中に埋もれてしまった方がどんなに楽だったのだろうと何度も雫の部屋のドアノブに触れては、手を離す。ここから出てゆけば、容赦なく明日という希望のない現実が始まる。それを思い、私は自分の前腕を強く指圧した。「みーちゃん、早く、早く！」

「はーねえと雫お姉ちゃん、先に行っちゃうよ？ 観空の大好きなパンの耳ぜーんぶ食べちゃうぞ」

何も知らない私の姉達がドアをノックして、私が出てくるのを催促した。

感情がこの場所から留まるように言うが、大人びた理性という同年代の少女よりも高性能な器官がどんなに悩んでも立ち止まっているだけでは何も変わらないと言った。

心に蟠りのあるまま、ゆつくりと扉を開く。

のつそと出てきた私の目の前にアカの端整な顔が目に入った。自分の思惑とは裏腹に、私はアカの身体に抱きつこうとする。その自然さに……

ああ、かあさまは本当にかあさまなんだと触る。

アカ、かあさまは受け入れて私を高い高いしてくれた。

「おはよう、観空」

かあさまはにこりと微笑んで言った。

「おはようございます、アカ……か、かあさまあ」

「顔、赤いよ。赤ちゃんみたいだね」

「むう、私はもう、十一歳です」

「そうね。大人な観空に話があるの、良いかな？」

無論、肯定の意を必要以上に頷く事で表した。そこには幼い少女の等身大の期待があった。一緒に暮らそうかや、今晚の食事は一緒に食べましょうや、今度出かけましょうか？ 何処が良いとか……。だが、そうではない事を私は連れて行かれた場所の雰囲気から察した。

城の奥にある煌びやかな飾りのなされたダンスホール。

周囲に様々な宝石を散りばめた豪華なシャンデリア。常にアリアによって具現化された炎が灯され、今からでも白光の灯火の下で優雅に踊れそうだ。だが、今晚は公な晩餐会は開かれないのか、それ以外は意外と何も無い。大理石の敷き詰められた床を二人の靴音が空しく響いた。前を歩いていたかあさまが無理向き、唐突に言う。「選りなさい。神になって永遠の苦痛を味わい心をいつか、アリアマターに食われ朝露ノ遥のような道を選択するか？ 化け物、兵器として生きて体内に内包できるアリアマターを消費して死ぬ道を選択するか？ さあ、さあ！」

今にも噛み付かんとばかりに寧猛な視線を私に曝け出した。それは真実を知る者が真実を軽薄なモノと認識している者へのある種の叱咤のように、私に突き刺さる。

本当は全てを知っているんだろう？　そこにお前が望む幸福など存在しない。

それを意味する言葉を幼い少女らしい激しい首振りで否定し、円らな紅い瞳は迷いなく懇願する。その瞳は幼い子が母に示す防衛本能に似ていた。今は知性などいらない。

「いや…… あ。私はかあさまと馬鹿姫と、はーねえと！　一緒に暮らしたい！　もう、一人はやーなの！　どうしてよ！　どうして、かあさまあ！」

「無理だよ。神に近い者は孤独という影からは逃れられない。ならなくても、なっても孤独にはなるよ。頭の良い観空ならわかるだろう？」

撫でるような優しい母の声に涙を見せ抗議する。

「一人は、いやあ。私が誰なのかもわからずに確定するというのか」「人はね、観空…… 曖昧なの。自分という存在認識を確信する事もできずに、世界というシステムの中に組み込まれて朽ち果ててゆく。それが幸せな事でもあるの」

私の目線に合わせるようにかあさまはしゃがみ込み、じっと見た。私の胸の中に奇立ちが生まれ急速に育ってゆく。それはかつてない逆鱗となつて叫ばせる。

「漣って呼んで下さい！　かあさまあのくれた名です！」

慣れない大声に途中、枯れた声になった。それでも叫んだ。

私の叫びに動じる事無く、平然とかあさまは私の涙を指で拭くと、私の髪を撫でた。

「自分という存在認識を求めるなんてまだ、子どもね、漣？　観空？　兵器？　化け物？　人間？　神姫？　唯一、意識すれば、あなたは一度だけ、その認識を死が訪れるまで確定できる。それを決める為にあなたはここに行きなさい。この後、厚影から命令が下るはずです」

私の手に紙を置こうとするが、私はそれを手で払った。

中空に舞った紙は表返しになり、床に落ちる。表返しになった紙

にはグラン地下洞窟完成予想図と書かれており、頬を膨らませて怒りを漲らせながらもちらつと、一瞥する。

そして、瞬時に理解する。これがあの場所へと繋がっている事を。「クレアル収容所真下へと続いている。風羽、私はどうすればいい。どうすれば」

ミニチュアのような唇に指を添えて思案する。

「あたしが観空に、神を殺させる為に作り出した洞窟。その数ある中の一つ。各国に存在する」

目を瞑り、思考する。これを利用すれば、奈式風羽の、友達の無念を晴らせる。いや、晴らしてみせる。だが、神を殺させる為という事は朝露ノ遥と遭遇する可能性を孕んでいた。

涙で濡れていた幼い瞳に大人びた理性が宿る。

「私がはーねえを殺す？ できないよ、できないよ」

優しい姉を殺す可能性があるかもしれない。だが、そこへ辿り着かなければ、奈式風羽の死が無駄になる。

その二種の事柄が私を俯かせた。姉か、友達か？

私の頬に触れてかあさまは語るように諭す。

「見定めるの。あなたの知性と感性で。はーねえがそれらを全て育ててくれたんでしょ？」

流れるように思い出されてゆくはーねえと親しみを込めた月見遥との日々。

はーねえがトナカイの着包みを被り、私がサンタクロースの真っ赤な衣装を着て過ごした二人だけのクリスマス。鬼は外、福は内と豆を二人で巻いた節分。あれ、そう言えば、はーねえは豆を七つしか食べなかったんだ。まだ、若いのよとか言っ

て。自然と溢れてくる笑顔が懐かしく、悲しかった。

もし、言葉のとおり……朝露ノ遥、はーねえが世界を壊そうとするならば許容できない。

だから、出来る限り、澄ました顔つきで言う。

「は、はい」

肯定とは裏腹に迷った。それは殺す、殺さないではない。全てにおいて自分の手から離れてしまう現実に迷うのだ。彷徨う。それは私という少女の腹の中に掬う癌のようなものだ。

人生経験が豊富ならば、この掬うモノの正体をいつか、知る事が出来たのだろう。

「なら、信用しなさい。それが証明するあなたの存在認識をね。後方はあたしが守るから」

そう冷淡に言っつかあさまは踵を返した。

「頭では理解しているのに、このもやもやは何？」

胸に手を充てて、心臓が早く波打つを感じた。

はーねえを殺すかもしれない。はーねえを殺したくない。風羽の仇を討ちたい。だが、はーねえを殺すかもしれない。そもそも、人を殺したくない。殺したのはしょうがなかったんだ。だが、それは罪ではないのか？ 罰を受けなければならない。仕方ない。殺したくない。もう、殺したくない。でも、やらなければならない。そうしないと全部が消えちゃう。はーねえを殺すかもしれない！

頭の中が知恵の輪のようだ。

三章、私が誰なのか知っている？

三章、私が誰なのか知っている？

>—<

クレアル収容所一階の奥の部屋で平然と和国の人々は実験に使用され、食べられる。それがグランという国に囚われた和国の人間の末路だ。

部屋には文明の利器である蛍光灯の光で、薄暗いはずの部屋は朝日が目の前に拝めるかのように眩しく照らされていた。コンクリート剥き出しの部屋には多くのパソコンとそれから線で繋がっている巨体な機械の数々。実験台が離れた場所に置かれていた。

「実験体九八七九六の解剖を始めます」

そう言ってメスを握ったスーツ姿の三十代の男性が物を見るような目つきで、手術台に横たわって眠り姫のように目を瞑る少女を軽視の視線で見下ろした。男性の他には二十代の女性が男性と同じスーツを着込み、両手には黒い手袋をはめていた。女性は食材を眺めるような無機質な視線を少女に向けた。二人の足は微かに震えていた。

無理もない事だ。グラン国の大統領、見鳴雲であるあたしが解剖実験に付き添う事など、めったにないのだから。

「あたしがいるからって緊張しなくてもいいよ。当面の天敵であった和国は今頃、アリアボックスで滅んでいるだろう。天使の羽根程度で防ぎきれ程、あたし達の文明は柔くない」

心の底から冷えるような含み笑いを浮かべた。

「そうですか、見鳴雲大統領」

あたしを媚びた視線でじっと見つめる女性はそう言い、メスを少女が仰向けになっている手術台の横にあるテーブルに無造作に置く。

その視線が妙に脆弱で役に立つとは到底、思えなかった。だから……。

「な、」

女性は突然の腹部の痛みに慌てて自分の腹部に両手で触れた。腹部がない事に気付き、あつと大口を開ける姿をあたしは滑稽だと、唇をにやりと吊り上げた。女性は自分の両手を蛍光灯の光に晒して……両手から頭上へと一滴、血が垂れ、身体を地面へと反転させた。そのまま、絶命。

突然の出来事に驚いていた男性の首も寸分の差なく、吹き飛んだ。あたしは彼ら二人の血の付着したメスを両手でお手玉のように弄び、眠っている少女を愛しむように見下ろす。

神という存在はロストガーデンによる素粒子レベルにまで分解させるアリアか、もう一人の月見遥がしたような膨大なアリアを消費する時空移行のアリアで神から人に戻るくらいしか、永遠という牢獄から開放される事はない。それは退屈だ。だが……。

「人を殺す時のぐしゃって潰れる感触だけが面白い。あたしは根っからの殺人鬼だったのかもしれないよ？　ねえ、どう思う穢れを知らない少女ちゃん？」

少女は怯えた大きなエメラルドグリーンの瞳を渴開き、一呼吸……間を置いてから言う。

「しんじゃえ」

掠れるような小さな声。それは少女の精一杯な反骨心から生まれた言葉だったのかもしれない。少女は手足を金属の輪のようなもので拘束され、身動きが取れない。多分、もうここから出る事は叶わないと、理解しているのだろう。

「随分と生意気な子ね。名前は？」

少女の長い金髪の流麗な線をなぞりながら、あたしは言った。

「ふゆか。あなたをたおすものよ」

健気な少女だと涙を浮かべる様子もないふゆかを見つめた。頭痛がした。

『観空を！ 観空を！ 還して！ どうして！ どうして！ あたしは復讐する。いろいろ頑張つて運命は変わっていったのにどうして！ どうして！ あたしは世界に復讐する。その為に神になる』

遠い過去、変わらない慟哭の中、死ぬ事で神に成りえて、完全な意志を手にしたというのに目の前のふゆかはそれを既に持っている。羨ましくなった。だが、世界を壊す為に観空がくれた力があるではないかと十一対の翼を発現させる。

「なるほどね。神様は残酷だね。本当に残酷だね。あんたでは倒せない！ ケテル」

宙に浮いたケテル―光輝く無数の剣がふゆかの円らな瞳に目視できる位置に浮かんでいた。あたしが片手で空気を捕まえるような動作をした後、光輝く剣の一つがふゆかの右足に深々と突き刺さった。それでも……ふゆかは泣かない。

左足に剣を刺した。

それでも……ふゆかは泣かない。

両肩に剣を刺した。

それでも……ふゆかは泣かない。

息が絶え絶えにもがこうと手足をくねくねさせたふゆかを狂気の笑みを浮かべ、観察した。

「たおしてやる！ ころしてやる！ おまえを！ ふゆかからかぜはを、ぱぱを、かあさまを奪ったお前を！」

「残念、殺せません」

身体中、杭のように光状の剣を打たれたふゆかの死体を見下ろして侮蔑の眼差しを向ける。

四肢を串刺しに刺されたふゆかは目を見開いたまま、絶命した。

少女の眼からは涙のような血が流れていた。

それにさえ、心を動かされる事はない。

そう……あたしはみ……何かを失った。その喪失が人間らしい感情を忘却させてゆく。既にアリアマターが全身に回り、感情によって形成された記憶というものさえも蝕んでゆく。

「あ、あれ、あたしは誰なのだろうか……誰だ？ 月見観空……それしか覚えていない。そうだ、観空の為に世界を壊すのがあたしの存在の全てなんだ。けど……観空と約束し……た……あれ、誰それ？ あ、あたしは朝露ノ遥。世界を壊す神のはず？」

頭を抱えたまま、その場に蹲る。そして、自分がわからないという悲痛な悲鳴が室内に木霊した。

私とはーねえ、以下略は思い思いのペースで暗い洞窟内を歩いてゆく。頼りになるのは、雫が手に持つ松明の淡い光だけである。淡い光が忙しく上下していた。

「ぴよんぴよん、ぴよん」

私の前をハエのようにステップして飛ぶ馬鹿姫という名のハエをどうしようか、顎に指を当て考え悩んだ。

閃いたように目を瞬いて雫の肩を驚掴みにする。

「う？ 何、みーちゃん」

振り向いた雫の頬をぶにと指で潰した。私は自分の目論みが成功した嬉しさにほくそ笑んだ。

「うきいいいいい！」

姉としてのプライドが許さないのか、猿のように顔を真っ赤にしながら雫は片足を振り上げて柔らかい地面を何度も強く蹴る度に、飛び散った泥が雫の顔に付着した。

「うあつ」

雫の足は予想外のモノを蹴った。その予想外のモノー小石は美しい曲線を描いて横を歩いていたはーねえの肩にぶつかった。

「痛い！」

はーねえは肩を摩りながら雫を横目で睨みつける。

「ひいいいい、鬼がでたああ」

「こらあ、待てガキ！」

逃げた雫をはーねえが追う。まるでか弱い兎と狩人の命を掛けた死闘のような様だ。私はそれを欠伸びながら見つめ呟く。

「緊張感のないお姉様方だ。お、パンの耳、食べよう。私にとってこれが精神安定剤なんだ」

煙草を啜えるようにパンの耳を啜えた。そのまま、ゆっくりと手を使わずに口の中に入れる。

「あ、光がなくなった、観空たん」

「あ、そうだな」

「ほのぼのしないで下さいよ観空先生、冬架さん！」

「深瑠、それ以上寄るな、泥臭い」

寄ってくる泥で出来た人間のように泥だらけの深瑠に対して、私は嫌悪な顔つきでしっしつと手を振った。相当嫌いなので、涙ぐみ、必要なまでに距離を取る。

深瑠はその場に立ち止まり、嘆きの言葉を吐いた。

「これだから子どもは、こどもは」

「需要のあるロリっ子と需要のある女装少年は相容れないものだよ、と不思議っ子の冬架たん」

肩を叩きながら哀れみの表情で深瑠の顔を覗きこむ。敵国から辛うじて逃げてきたような泥だらけの深瑠は訳が分からないと首を捻りながらも、とりあえず雫の言葉に頷いた。

「そ、そうですね冬架さん」

微かに見える雫の持つ松明の炎を頼りに歩いてゆくと、私以外にとつては衝撃的な光景がそこにはあった。

はーねえは雫を片手で抱き上げて、雫の可愛い熊さんパンツを眼には留まらぬ速さで、何度も叩いていた。思わず、目を覆いたくなる悲惨な光景に冬架は両目を自分の手で塞ぐ。

「熊さんパンツたん、いと哀れなり」

が、指の隙間からワザとらしく、雫の悲惨な光景を見入った。

「あれがはーねえのお置き方法だ」

私は指を差して平然な顔をして言うが、両足はマッサージチェアの如く震えていた。

「やめて！ ください……。お姉様、それはあんまりです」

両手をバタバタ激しく動かしながらは「ねえに審判を乞う。

は「ねえは神話に出てくる優しい女神の微笑みで雫を見る。そして、裁きの言葉を下す。

「い、やあ」

「ぎよええええ」

馬鹿姫の悲惨な悲鳴が洞窟内に響く中、地面に置いてあった松明を私は手に取り、先を見通そうとしたが、松明の火が映したものは硬い岩盤だった。慌てて、ポケットの中からかさまに貰った地図を取り出した。

地図によると、私の立っている場所はクレアル収容所の武器庫の真下のようなのだ。

「収用棟へは繋がってないみたいだ、行き止まりだ。どうする？

いつそう、我が偉大なる姉を放り込んで暴れているうちに私達が入り込むというナイスな案が」

「偉大なる姉ってやつぱり、雫ちゃんですか、照れちゃいます」

偉大なる姉という称号に対して目を輝かせている雫は私の方を向いた。マジで本当にやりそうだと私は啞然とした。

「ふう……退いて遙たん。先に言っておくけどゴメン、殺す」

は「ねえを見るギラギラした冬架の瞳が氷柱の先端のような殺気に満ちていた。

「え？」

は「ねえの力が弱まった隙を狙って雫は猫のように柔軟な身体の手繰りで飛び、手足で地面に這い蹲る。

それに遙は気づく事無く、その場に固まっていた。

冬架はは「ねえの力ない声を見捨ててアリアを紡ぐ。

――全ての主神。冬架はあなたの心に詩う。

奉げるべきものは冬架の根源。

示す奇跡は絶対障壁。何者にも侵されない聖域。

冬架達を囲め、絶対障壁拡大。

言霊は失われし神門、天使の羽根。――

凜々しい女性の声が辺りを包み込んだ。それは奇跡を意思により具現する理力の詩。

天使の羽根。和国の奥義として王家に代々継承されるアリアを、王家以外の冬架が難なく使用した事にその場にいる誰もが疑問の声を上げられず、立ち尽くした。

怒りの感情が籠った冬架の大人びた顔つきがはーねえを射抜く。

「冬架は朱と同じ人を慈しむ神の一人。遙に殺された年端もいかないう少女、ふゆかよ」

冬架はアリアマターで構築されたシャボン玉のような膜を全員の外側に創造する。それを徐々に広げてゆく。軋んでゆく冬架達の頭上が嘆きの声を発てた。

軋む音に混じってはーねえは叫ぶ。

「あたしは！ あたしは！ 絶対に冬架さんを殺さない。絶対……」

「無理。未来はね、変える事が出来ないの」

冬架は優しく、もの悲しそうに微笑んだ。

「嘘だ！」

はーねえは青々とした表情を浮かべて、岩を両手で殴る。

「それを、それを証明したのは朱……他ならぬあなたよ。朝露ノ詩衣夏は観空を産み、あなたの育った平和な日本に送ったのよ！ はああああ、広がれ！」

冬架は両手を広げて障壁をさらに広げた。頭上の岩盤を強引に見えない圧力で破壊し続ける。洞窟はバランスを失い、所々落ちた天井が崩れ、私の上にも降りかかろうとしていた。

思わず、私は近くにいたはーねえの腰にしがみついた。

「かあさま」

弱弱しい声ではーねえと呼んだ。はーねえは観空の顔を両手でそっと触れ、まじまじと覗き込む。

「似てるなって……本当の姉妹みたいだな……って。でも、あたしはそれでも嬉しい」

はーねえと私の姿を崩壊によって生じた砂埃が包み込む。

濁った白い白い煙が全方向の視界を盲目にした中、私は深く頷いた。

砂埃の霧が晴れ、はーねえと私は仲むつまじく、互いの手を握り締めていた。

冬架は自分が天井に開けた風穴を仰ぎ見た。

「雫たんには黙っていましたが、和国にいたのは観空さんのアリアの英才教育の為なのです。冬架さんは神といえども多少食事を摂取しないと死んじゃいますから、詩衣夏さんに頼み込んで零姫さんの家庭教師というバイトをしていたのです」

いつもの棒読み口調で暢気にもグラン国の公共施設を破壊したテロリストは言った。

「エクスカリバーと天使の羽根、は」

雫が疑問を言い終わるのを待たずに下にいる私達に向かって数人の防護服を着た兵士が銃を向ける。銃で痛い思いをした事のある雫は咄嗟に冬架の影に身を隠した。

「撃て！」

一人の兵士が他の兵士に檄を飛ばす。

銃弾の音だけが洞窟内に響き渡る。

銃弾は冬架が作り出した壁に阻まれて、殺傷力を生み出す速度を殺され、一発残らず軽快な音を立てて地面に転がった。

「あれ？ おかしい」

皆一様にその言葉に頷く。

愚兵達は知らないのだろう。アリアという現代に存在する魔法に近い作用を、呼び起こす物質反応を知らないのだろう、愚かだと私は天井の光を浴びながら含み笑った。

「冬架さんの力の一旦です！ こんなのも出来ます。言霊は風打つワルツ、ストームブレイド」

冬架の紅袴が地面から昇ってくる風によって捲れる。その風が冬架の遙か頭上を目指す。

>二<

「何か？ もの凄い風が」

不気味な黒の空間を凝視していた一人の兵士が片手で風を防ぎながら、横にいた兵士に話しかけた。

「まじかよ」

そう言っただけで覗き込もうと闇に目を凝らした横にいた兵士の首から上が、話しかけた兵士の肩にぶつかり、重量感のある音を立てて床に転がる。

切り口はとても綺麗だ。まるでギロチンに掛けられた囚人の首だ。血も飛び散らない速さだった。

それを一瞥して、横にいた兵士は肩を震わすしかなかった。が、それもすぐに終わった。

だって、首がずれているのだから。

闇から光差す天へと上がってきた風は魔王の如き猛威さを持って一瞬、兵士達に爽やかな疾走を提供しただけで全ての兵士を蹴り殺しにした。

>三<

銃声が全くしないのを、耳を澄ませて確認した後冬架は指を鳴らす。指を鳴らすと風はぴたりと止まった。冬架は障壁を展開させたまま、私に目を向けた。

「観空たん、放出形のビナーをお願いします」

私は頷くとすぐに実行に移す。

――我はイグドラシル。七つの世界の根源。

奇跡は我の必然。

示す奇跡は天空を翔る翼、地を翔る脚。

天使の羽根を浮遊させる。

言霊は天空の覇者、ビナー。――

私の詠唱したビナーによって私達はクレアル収容所に辿り着いた。左右には銃がずらりと並んでいた。私ははーねえのような銃に対する知識は持っていないが、強力な黒々とした銃口達は並列に何段もの棚の上に無造作に鎮座していた。

無機質な壁には真っ赤な鮮血が所々、飛び散っていた。その血を凝視しながら、殺すという意味を考えた。殺すというのは私の足元に転がっている兵士達のような肉の塊になるという事だ。

私は数多くの生きている者を肉の塊に変えた。残酷に、機械的に精肉工場のように切り刻んだのだ。

怖くなり、両足が震えた。あれ、こんな事なかったはずだが。視界が揺れている。行くべき、直線的な長い廊下が幾重にも見える。眼を擦った。それでも幾重にも見える。

兵士の生前、足と呼ばれていた肉に足を取られ、私は転倒しそうになった。はーねえが優しく私を抱きとめてくれた。耳からはーねえの鼓動が入ってくる。

どくっん、どくっん、どくっくんと。

「観空、大丈夫」

「わっぷう。ゴメンなさいはーねえ」

私は……

どくっん、どくっん、どくっん。

私は殺さないといけないのか？　優しいはーねえの、未来のはーねえを。

「ちよつと、どうしたの？　観空、急に泣き虫さんになっちゃって」

「私は殺せません」

「ん？」

泣いている泣き虫の私の顔をはーねえが覗き込む。はーねえの赤い瞳は私がクラスで浮かないようにと、姉もそうなんだと見せる為のコンタクトレンズだ。

はーねえの髪に両手を広げて触れた。はーねえの赤い髪は私がこれ以上、自分を殺さない為の精神安定剤だ。はーねえのタンクトッ

プにしがみ付きながら私は嘆く。

「はーねえ、やはり殺せません。でもね……私は、私はただの殺人鬼だ。何人も人間を殺したのにセフィという架空の人間のせいにして逃げていた」

「うん、知ってるよ。観空」

「私は死ぬべきなのだろうか、はーねえ。罪を償う為に」

優しく見守っていたはーねえの瞳が瞳の色と同色の感情に染まって私の頬を引っ叩いた。

「観空は確かに悪い事をした。けどね、そうしなければ生きられない今の人間社会は狂っているんだ。いや、その予兆はあたし達の世界にもあった。カッとしたから人を殴った。こっちを見ていたから殴った。それが世界の真実。けどね、そんな世界色に染まっちゃ、駄目。あたしを殺すのは今までのピュアな心を持った観空じゃないと駄目。それはね」

「あ」

私の瞳とは異なる作り物の赤い色から滴り落ちる涙を見て、私ははっとして冷静さを自分の頭の中に呼び寄せた。私にはーねえの最期を託そうとしている。なんて絶望的で、なんて愛しいのだろうか。その愛しいという感情は全て、自分の思い通りにしたいという未成熟な者が誰もが描く感情だ。私の年代では色濃く心の中に残っている。私は自分を探す使命の為に淡い飴玉を投げ捨てて様々な本を読み解いた。

私は様々な本——大人びた知性を今、一時捨ててはーねえの剥き出しの真心に向き合う。

「最期の瞬間まで最愛の観空を見ていたいから。それがあたしの最高の死に方。ほら、観空」

はーねえは私の前に小指を差し出した。私はその小指に、自分の指を解けないようにしっかりと絡ませた。私は約束を必ず、果たすと頷いて、名残惜しむようにはーねえの小指を離す。そして、様々な本を読み解いて得た知性で武装した未成熟な子どもに戻った。

いつの間にか、姿が消えている深瑠、冬架、雫の後を追う為にまっすぐ、歩もうとした私の手を掴み、無理やりはーねえの顔のある方角に向けられた。

「私が誰なのかを知っている？」

「えっ？」

「あなたは観空。優しいはーねえの子ども」

「私は、観空。私ははーねえの子ども。私は観空。私ははーねえの子ども」

私は舌の上で甘すぎる苺飴を転がすように何度も心の奥底へとその味を流し込む。

名前は、観空。

> 四 <

遙に嫉妬した。

胸を茨の生えた蔓に全身を束縛され、血を流すくらいに心は激しく揺れ動いた。

雫ちゃんと雫ちゃんの従順なお人形である冬架、深瑠は色のないコンクリート剥き出しの通路を息つく暇もなく、激走する。雫ちゃんはこのメンバーで一番強くて可愛いので、一番前を意識的に走った。

「はぁあああああ！ 私だけの人形なんだから、雫は！ 雫は！」

雫ちゃんは物凄く、今機嫌が悪いです。

警告音がなる中、雫ちゃんは発動したミヨルニルを握り締める。手を塞ぐ兵士―醜いお人形をミヨルニルで乱雑に殴り倒してゆく。

一体目、二体目のお人形は頬が変な形になった。思わず、笑ってしまった。醜い！

三体目、四体目のお人形は歯が数本吹き飛んで床の上で血を吐き汚し、悶え苦しんでいた。最近のお人形の創りは手抜き工事だ。何も可笑しくないのに、笑ってしまった。ダサい！

「ひえええ、血が飛び散ってますよ、冬架さん。僕、今日眠れなくなりそう」

「ヘタレだな、深瑠たん。エクスカリバー無しで戦う直線的な雫たんもこういう狭い道では強い。馬鹿を馬鹿にしてはいけませんね。馬鹿と天才は紙一重」

深瑠と雫の二体のお人形もちゃんとして来ている。世の中にあるお人形の種類は二つしかないと言っている。雫ちゃんは信じていました。一つは冬架、深瑠、和国のお人形のような雫ちゃんに絶対服従のお人形。もう一つは今、雫ちゃんの足元に無造作に転がってぴくりとも動かない不細工お人形、雫ちゃんの足元で許しを乞う不細工お人形のようない敵対するしか脳のない不細工お人形。

雫という妹が生を受けるまではこの世界で人という種は雫ちゃんだけだった。昔鑑賞した宇宙人が地球に侵略するSF映画のように、雫は私の席を奪うんだという恐怖。

けど、雫ちゃんはその恐怖だと始めは理解できなかった。だって、人形しか世界に存在しなかったのだから。

雫ちゃんは自分の足に何か、生温い感触を感じて俯く。足のないお人形が雫ちゃんの足を握り締めていた。まるで命綱であるかのよう。

「助けてくれ、お願いだ！何でもするから」

臭い息が雫ちゃんの足に当たっている。邪魔だ、不細工お人形！雫ちゃんはお人形が足に巻きついたまま、足を壁に横薙ぎする。

不細工お人形は壁に頭から突っ込んだ。

「う」

そんな低い声を出して雫ちゃんの足からようやく、離れて壁と熱いベレーを交わす。最後に不細工お人形は壁に鮮血を描き、事切れた。

だからね、何の感情も沸かない。全ては演技です、えっへん。

「凄いです、みんな倒すなんて。流石はアリアマスター 朱、兵器月見観空に次ぐ……」

「みーちゃんは兵器じゃない。人だよね、深瑠」

雫ちゃんは馬鹿ばい、何も考えていない天真爛漫に深瑠の肩に指先を芋虫さんの行進みたく這わせる。

人であるからみーちゃんを憎しみ、同時に愛しているんだ。殺したいくらいに。

「おつ、馬鹿姫。最後の仕上げは真打、冬架たんに任せなさい」

「ちょ、ちょっ！ズルイ」

そう口に出したが、雫ちゃん的にはどうでもいいのです。それよりも別の事柄が気になりました。冬架は雫ちゃんの間合いに簡単に侵入し、差し障りなく、自然に雫ちゃんの背後で棒読みで抑揚なく喋った。神という選ばれた者のみが到達する極みとはどれほど、底知れないモノなのだろうか。

動揺する雫ちゃんを冬架は横目で一瞥した。

「ハイエナは賢いんですよ、雫たん」

冬架は正面にある鉄の扉の前で立ち尽くし、ぶつぶつと口を忙しく動かし始めた。アリアを詩っているのだろう。予想通り、冬架の手には鉄さえも溶かせそうな赤々とした炎が集約されていた。威力は壮絶なものだろう。雫ちゃんは見守ろうとした。

「はーねえ、やっぱり運動、して」

微かだが雫ちゃんの耳に舌足らずなキュートで愛らしい声が入ってきた。雫ちゃんは逸早く、みーちゃんに会いたいと駆け出す。

「みーちゃん！」

>五<

相当、走った。膝が悲鳴を上げていた。

十一対の翼を通して体内にあるアリアマター、感情共鳴物質を神経強化、肉体強化に使用していなければ、自分は十一歳の子ども並みの体力しかないのだ。

ここに来る間の辺りの風景は惨たらしいもので、吐き気を催す程

だった。

人間の力によるものではないアリアのような強力な熱を発する現象によって絶命し、そのまま放置された死体の形は異様だ。横頬が完全に炭と化して絶命している黒い防護服を身に着けた兵士や、口を焼かれたまま放置されて悶え苦しんだのか、壁には血が転々と付着させて冷たい床の上で黒い防護服を着た兵士が仰向けになっていた。そんな殺伐とした風景の中を走り続け、ようやく冬架達の姿を目視する。

前方に見える鉄の扉が中心から赤い円形を拡大させて、遅れてその中心から腐るように空洞が拡大していた。扉の目の前にいる冬架という構図から、それを成し遂げているのは冬架だろう。

「みーちゃん！」

雫が私へと両手を広げて走ってくるが、敢えて私とはーねえは無視して鉄の扉の向こうへと滑り込むように走り向けた。

「う」

「何、この匂い？」

口々に私とはーねえは言い、鼻の穴を指で摘んだ。

周囲には悪臭という言葉は何回重ねても足りない程の悪臭が、形を持っていくかのように私へと襲い掛かってきた。その悪臭の根源を探る為に周囲を見渡す。

部屋の大きさはプレハブ小屋を四つ程足したくらいの規模だ。暗闇で何か大きな無数の影が蠢いている気がした。

よく、目を凝らすと老若男女三十人以上の人間が生氣のない顔をして身体を仰向けにして、手足を汚物塗れの床にだらりと預けていた。皆が同じような布切れのように薄いローブを身につけていた。それ以外の装飾を身に付けている者は誰一人いなかった。何人か異変に気付き、愚鈍な動作で視線をこちらに向けるが、誰も喋ろうとはしなかった。

しばらくして、

「だ……れ……あなたは、わたしたちを……ころすの？ たべるの

？」

青い髪の痩せ細った少女が力ない声で怯える事もなく、無表情でじーと、見つめた。人形のような蒼く濁った瞳は私には何処か、浮世離れしている気がした。

少女の身体は足も、手も、首もお腹もまるで小枝のように細く、理科室の骨格標本のようだった。重力に逆らい、頭天边の毛が何本も逆立っている。私はそれが怖くて何も言えなかった。そんな私にはーねえは静かに頷いてから、逃げようもしない少女の目線に合わせて屈んだ。

「あたしは月見遥。あなたを助けに来たの。怖かったでしょう？もう、大丈夫だよ」

「たすけにきたってなに？」

生気のない人形のように棒立ちしている少女は微動だにしなかった。栗鼠のような小さな背丈は私と同年代の少女が有する特徴だが、はーねえが向かい合って会話している少女は、栗鼠は栗鼠でも弱いきり、自分が弱っている事にさえ気付かない栗鼠だ。

「え、あ」

小鳥が鳴くような呻き声を上げ、はーねえは狼狽えた。そのまま、思考が停止する様相を見せるはーねえを流し目し、

「助けにきたって意味も知らないの、一般少女？」

「な！ おまえ、同じ背の癖に！ 兵器の癖に！」

私の心無い言葉に少女の凍った時計の秒針は再び、刻み始めた。それは誰もが目を見張る変化だった。少女は覚束ない生まれ立ての子鹿みたく、私の方へと徐々に近寄り、両手をぎゅっと握り締めてきつ、と頬を膨らませて威嚇する。

構わず、私は一息してから捲くし立てる！

「だがな、一般少女。私の背には希望が満ち溢れていてどんな絶望の間でも、まるで東京タワーの鮮やかな平和ボケ光の如く、輝いているのだ。お前は自由の女神の再来のような兵器、月見観空と比較して。いや、私に失礼だな、これは。お前は一言で言うなれば薄汚

れた、」

私の言い付けを守り、腐ったジャムのような黒々とした血のべつとりついた壁をじっと、眺めている深瑠を一瞥し、

「深瑠の影のようだ。お、哀れ、背筋が凍る。馬鹿姫よ、私を暖める」

相手にされずにしょんぼり、体育座りして、収用されている人々を指を差しながら一、二、三……と数えていた。段々と目は虚ろになっっていたが暖めるという単語を聞いた瞬間、びくっと身体が跳ね上がった。

少女は雫を怯えた表情で凝視した。

「あの怖いゾンビみたいなのが、流々達を統べる王女様なの。信じられない！」

「はいな、みーちゃん。むぎゅーん」

可哀想に微々たる国民の信頼がまた、一雫減ったなと私は優しい眼差しで私のスリムな胸の中に顔を埋める馬鹿姫を殴った。

「痛いよ、みーちゃん」

「役目を果たせ、馬鹿姫」

私は雫の背を押し、はーねえの隣で顎に手を当てながら難しく眉毛に寄せた冬架を手招きした。

冬架は私の意図を理解したのか、即座に頷くとゆっくりと言葉を諳んじる。

「言霊は真なる悠久の王、冬架」

冬架の身体が眩く白い光に包まれて、人である証の四肢が消えて、丸いボール状の形に変質する。それを冬架と知る私達以外の人々は指を差し、それぞれ口々に熱狂の声を上げた。

その中で一際、甲高い声が狭い室内に響いた。五歳くらいの男の子の声だ。

「アリア……でも、あんなの観た事ないよ、ママあ！」

小さな男の子が臉を瞬き、黒い宝石を揺らめかせた。小さな男の子の母はその透明な澄んだ瞳に微笑んだ。

「あれはね、お姫様だけが許されている剣よ。ふう、ふっ……」

母親は浅く、何度も息を吐きながら瞼をゆっくりと閉じた。閉じた瞳からは一閃の涙が零れ落ちて閉じられる。雫を見つめていた若い母親とは思えない老女のように衰退したやつれた顔立ちだったが満面の微笑みを浮かべ、かつくと頭を頷いたまま、止まった。

止まった意味を知らないであろう男の子は何度も母親の名前を呼び続けている。

アリアは完遂されていた。雫の両手に実量を持った黄金の柄を有する両刃の巨大な剣が具現化されていた。天井を掠めるような長さを持つ剣の先端を不安そうに見つめている雫に痺れを切らして私は雫の両手に両手を添えて半ば、無理やりに天井へと掲げる。

私の顔を雫は一瞥してから意味深く、口の両端を横に広げた笑みを浮かべた。

「私は朝露ノ雫。こちらは私の妹、朝露ノ……観空！ あなた達を救出に来ました」

「馬鹿姫」

私の呟きに構う事なく、言葉を続ける。

「朝露の姉妹が、エクスカリバーに誓おう！ お前達を祖国へと連れて行くと！」

多くの人々が一つの巨大な柱のような刀身を眺望し、強弱、リズム様々な拍手を打つ。

雫はどうも、どうもとお辞儀をした。私はピンク色のランドセルを地面に置こうと屈むが思い直してリュックサックを投げた。

「みーちゃんの私物、ナイスキャッチ、雫ちゃん」

拍手が巻き起こすリズムのみの音楽に勝手な歌を口ずさみ、飛んだ。見事に雫の前腕にすっと、ピンク色のランドセルの革紐が通された。

雫という持ち手を失ったエクスカリバー、冬架は即座に眩い光を放ち、人の姿に戻った。鉄仮面のような無関心を装っているらしい冬架はピンク色のランドセルに頬擦りを何度もしている雫から、ピ

ンク色のランドセルを奪い取る。

「雫たん、良い判断です。使いこなせませんから、言う手間が省けました」

「む、今の雫ちゃんにはみーちゃんのくれたランドセルがあります。それだけで雫ちゃんはパワーアップ出来る気がしちゃっているのです。そういう訳で返さない！」

冬架は迫り来る雫の腕を掴み、ちゅちゅと舌を鳴らして侮蔑の視線を浴びせた。

「あの……雫姫様、どうやって流々達は脱出すれば良いのでしょうか？」

流々が人々の代表をして当然、疑問に沸く言葉を恐る恐る、問った。

しかし、流々の声は緊張感いつでもナッシングな雫の耳へとは入らなかったようで、雫は冬架の肩を繰り返し、両手の拳で激しく叩いていた。

「そこの一般少女、私が教えてやるっ」

「観空様が、ですか。小さな流々達、子どもは大人達の良い、いけんを聞いてした、したがうべきです」

珍しいモノを見るかのように私の顔と身体つきの間を透き通るアカブルーの瞳が上下し、普段使い慣れていない事が誰からも明確にわかる淀んだ口調で言った。

多分、同じ年齢だと推察しているのだろう、私は十一歳の立派な大人だと反論しそうになったが、口を噤む。やっとな、冬架から雫の手へと渡ったピンク色のランドセルから無言で地図を取り出し、クレアル収容所の構図を睨むように確認した。

しばらくして、ふつと溜息と共に感嘆の声が私の口から紡がれる。「何処の建築物も同じようなモノだ。外からの防衛は強固な癖に、内からの防衛には脆弱だ。笑いがおかげで漏れそうだ！」

口を地図で押えて込み上げるクレアル収容所を建設した愚者への皮肉交じりの笑いを抑えた。地図から比較的に新しい紙特有の生ク

リームのような甘い香りがした。

「ふえ？」

何も理解できていないという小鳥の囁くような声を目の前にいる流々は上げた。その流々の口の中にピンク色のランドセルから取り出したパンの耳を近づけた。

流々は余程、お腹が空いていたのか、すぐにパンの耳へと口ごと突撃した。

「どうだ、病み付きになる食感だろう？」

「パンの耳でしょ、ただの」

そう言う割りにはもう一つ、頂戴と言わんばかりに口をもぐもぐさせながら手のひらが私の方へと向いていた。

> 六 <

様々な困難があるという予測は全く立ててはいなかったが、静寂したような似たような縦長く横狭い廊下を何度も通過した。やっと発見した何の特徴もなく、細長い蛍光灯が朝のように明るくしている階段を上がる。

残念ながら私のパンは無限にある訳ではなかったので、囚われていた彼らの意見も取り入れて結局、流々のような小さな子ども達に全て与える事となった。私はその出来事を思い出しながら、自分もパンの耳を獲得する為にクラスと戦った辛い記憶を……。

「パンの耳はやはり、偉大だな」

「観空、疲れたのならはーねえの背に乗りなさい」

はーねえが振り向き、手を伸ばす。私は首を横に振った。

それを確認したはーねえは流々の手を握り締めて颯爽と階段を駆け上がってゆく。それに続くように囚われていた人々が私を追い抜かして我先へと、希望の光がその先に在るかのように走った。あゝる者は一段、階段の段差を抜かして飛び跳ねていた。

「マズいな。この先には……おそらく。誰も阻む者がいないという

点から、な」

何時の間にか、自分以外の吐息が耳へと入り込んでいた。私はふと、首を横に向ける。

私の横側を淡々と変わらぬ機械的な両手の振りと足運びでツインテールを私と同じく靡かせて階段を駆け上がる冬架に、私は囁くように言った。

「さて、冬架。お前は朝露ノ遙に因縁があるようだが、殺すのは私の役割だ」

冬架は私を一気に追い抜き、階段の踊り場の中心部分で両腰に手を充て仁王立ちした。私は冬架の異様な変化に気付き、足を止める。

見えない威圧の塊、空気の厚みが私を敵のように血走った翡翠の双眸で見下ろす冬架と、冬架を見上げる私のレッドスピネルの双眸、両者の合間には形成されていた。

どちらも動かない。一秒という時間が一時間に解釈され直した沈黙が続く。

踊り場付近に設置されている壁際の蛍光灯から、ぱちつと単純な音と共に一匹のどす黒い蛾が何度も……蛍光灯に繰り返し身体を激突させた。

「罪人の妹に殺せるわけがない。死ぬっていう事がどんなに辛いかなんて分からない癖に」

震えた声で腹の底から冷たい感情を吐き散らす冬架。

「はーねえを殺すのは私の役目だ！ はーねえから頼まれたんだ！ 自分でも驚くほどの声が階段中に反響した。

私の怒り狂う声に反応したのか、自分の心臓の鼓動が激しい波紋を生み出し続ける。色様々な十一対の翼が出現した。

「本気ですか」

「本気だ。あれはもう、はーねえじゃあ……ない！」

「そうですか。行きなさい」

「え？」

「行きなさい！」

冬架は叫んだ。そして、いつものナマケモノのような顔つきで言葉が続ける。

「冬架さんの復讐心よりも、姉を殺害しなければならない観空さんの方が辛いから。観空さん、ゴー」

私は頷き、アリアを口ずさむ。すると、私の身体が中空に浮かび上がった。

振り向くとピンク色のランドセルを両手で包んだ雫が恍惚な表情を垂れていた。スキップなんぞをしている。

「みーちゃん、行くんだね」

「雫、ちゃん。私は戦う。セフィではなく、朝露ノ観空の戦いをする」

「痛いよ、きつと」

雫は姉が妹を心配するように眉を顰めてさめざめと泣き、私の指先に触れようとする。

私は静かに首を振り、天井を仰ぐ。

天井にはステンドグラスに描かれた二人の女性の絵が目細め、ぼんやりと見えた。

「それでも、戦う。生きる事は痛みを伴う事だから！ 今度こそ、生きる！」

前腕をぎゅっと掴み、一気に飛翔する。

一閃の眩い光が両目に注ぎ込む。だが、視線を逸らさない。きつと睨みつけた。

ステンドグラスの天使と悪魔の詳細が徐々に私の赤い瞳に晒されてゆく。両手に光状の剣を携えた両端の黒髪を紫の薔薇で束ねた白いローブを纏った少女と、肩まで伸ばされた黒髪の少女が互いに睨み合っていた。

私はその絵の真ん中を打ち砕くように、

「言霊は大いなる輝き、ティファレット」

十一対の翼の内、黄色の翼が濃い輝きを放ち、私の四方に光状の

壁が形成された。

ステンドグラスという壁を構う事無く、突撃してゆく。頭上の光状の壁にグラスが当たり、一瞬間にして砕けた。飴のような粒となったグラスは地へと落ちていった。その行方を見届ける事無く、私は青い色へと吸い込まれた。

何処までも透き通った青色は空だった。それは穏やかではない私の心にはないものだった。両手を伸ばして空を掴もうとした。

「やはり、か」

私達が目指していた屋上には私の推測通り、プロペラの付いたミニチュアのようなモノが見えた。それも何台も規則正しく、横一列にお行儀良くしていた。私のいた世界ではヘリコプターという名前で広く知られていた。視線を横へと移すと、東京と同じような町並みが広がる。赤い細長い三角形の建物は紛れもなく、東京タワー。この世界では既に消え去ったそれと瓜二つだった。それを囲むようにして見慣れたコンクリートジャングルが生えていた。大小様々な木々ビルの合間を縫うようにして、蟻と大差ない規模の人々が右往左往している。また、視線を移すと、錆びた茶色い二本のレールの上を物凄いスピードで走行する列車の姿も目に入った。それが通過した付近には巨大な看板があった。髭を生やした短髪の中年男性がピンを握る写真がプリントされていて、

三年目にして新しい境地にグラン栄養ドリンクは生まれ変わります！

と日本語で書かれていた。

「和国以外に日本語を、何故だ。和国の人々を周囲の国は嫌っているはずだ。その国の標準語」

「観空、『我が闘争』を著作したのはだあれ？」

それを口にした朝露ノ遥は私の首に両手を回して頬擦りをした。嫌な気持ちにはならなかった。このアイロニーに富んだ声の主は私の姉、月見遥の一つの可能性なのだ。

気を持ち直して、私は朝露ノ遥の両手を振りほどこうとした。

「そう簡単に解けないよ、同じ十一対の翼。神姫って呼ばれ、神から恐れられている観空と同じ翼があるのだから。さあ、『我が闘争』を著作したのはだあれ？」

「アドルフ・ヒトラーだろう」

「随分と不機嫌だね、観空。めっ」

朝露ノ遥は笑う。私の背中にくっ付いた朝露ノ遥のお腹が前後に蠢いていた。私が口を開く前にさらに言葉を続ける。

「観てよ、市民の陰気な顔を！ 本当の自由は不自由から生じる恐怖にこそ、あるのよ。これがあたしの『我が闘争』の成果。観空が暮らしやすいように日本のような外見にしてみたんだ。さあ、観空、世界を壊そう」

私の視線の先には生気を無くした人たちがこのドタバタ劇の中でも、日々を営もうとする姿だ。朝露ノ遥の言葉通り、人々は何処か、生気を失った機械的な動きをしていた。

齒を噛み締める。

まるで、私の怒りが解るように、笑った。その笑顔は観空、ご飯よ、の笑顔に似ている。だから、叫んだ！

「記憶を亡くしたら、人はこうまで自分を忘れられるのか！」

全身から流れるアリアマターを一気に放出させて、光の波へと変換させる。波は私から外れて周囲に流れた。朝露ノ遥はそれに戦き、私の身体から離れる。

「言霊は最期の剣、ケテル……。集約、マルクト！」

空中に出現した光状の無数の剣が針山の如く、重なり溶け合って一つの剣を生み出した。私は空中に浮かぶその剣を手取る。私のアリアの中でロストガーデンに継ぐ偉力を持つマルクトは赤く刀身が塗装され、柄にはルビーの宝石が無数に散りばめられていた。

「風羽、冬架！ 私は朝露ノ遥を撃つ！ 遥、あなたの存在が人々に悲しみをもたらす」

「マルクト、ケテルを無数に圧縮した剣。あたしを殺すの……観空！」

悲痛な叫び声が私の耳の中に入った。決意が、揺れた。

朝露ノ遥を見つめる。肩まで髪伸びた、すらりと流れる赤い髪。紺色の上衣を着込み、紺色の下衣と上衣の合間から覗くへそ。背中には二本の金色の鞘を交差させていた。

違う、こんなのはーねえじゃない。

朝露ノ遥は唇の片端が歪んだ。その歪みが哀れに思え、かつての言葉を蘇らせた。

『最期の瞬間まで最愛の観空を見ていたいから。それがあたしの最高の死に方』

「殺します、はーねえ」

「ケテル……」

残念とばかりに朝露ノ遥は肩を竦め、指を鳴らした。

百、二百をも越えんと無数に増殖する光状の剣が空中に生える。

増え続ける剣に囲まれてゆく朝露ノ遥という光景は、私には異様に映った。

光状の剣を右手に一つ、左手に一つ、手にして朝露ノ遥は空を三度、斬る。

「観空、動けなくしてあげる。世界がロストガーデンによって消滅してゆくのを見つめましょう」

充血した絡み合った蔓が赤く着色され、白目に存在していた。そんな珍しいビー球のように見開いた朝露ノ遥の瞳が私の心を捉えた。私はぎゅっと、柄を両手で垂直に構え、握り締めた。

「はーねえ！ はーねえ！ はーねえ！ ごめん！」

紺色の膨らんだ右胸と左胸の間に存在する心臓部分だけに狙いをつけて、朝露ノ遥との距離を一気に詰める。

一息の間もなく私の身体をあらゆる方向から、切り刻もうという意思が芽生えているかのような瞬く輝きを放つ剣が俊足、駆ける。

私は意図も簡単に身体をダンゴ虫のように丸ませて回避する。

再度、心臓を突くという明確なイメージを心に描き――

「あああああ、まだ！」

唐突に生暖かいという感覚が生まれ、痛みが生暖かいという感覚の中心に一滴垂らされた。垂らされた痛みが布巾に染み込むようにじわりと。

音も無く、身体に異物がめり込んでゆくのを私は呆然と見つめた。ただ、痛い。右肩に刺さった針のような剣、同様のモノが左肩、右足、左足。両前腕にも突き出っていた。ただ、痛いんだ！

マルクトを手放し、私は右前腕に刺さったケテルを抜き落とす。興味本位に見た右前腕に巻かれた水色のリボンは、私のクリアな赤い瞳とは比較にならないどす黒い赤いリボンになっていた。

小指へと赤い血線が流れ出し、下界の人々が行き交う交差点へと落ちてゆく。

「あああ、あああ、あああ、あああ。はーねえ」

透明な水によってぼやけた視界の先には、私を嘲笑する朝露ノ遙がいた。私は手を伸ばした。

助けて、はーねえ。

その願いも空しく、腹部に鋭敏な光の剣が突き刺さった。

「お眠りなさい。いくら、観空でもケテルの乱撃からは逃れられない」

「痛い、痛い。言霊は痛覚変容、イエソド」

虫の息を口の中に留め、期待を含めた力強い声で言った。

赫然と背にある紫の翼が光る。その光は一瞬、私の視界を遮った。痛みが身体から抜けてゆく事に安堵し、赤いリボンに付着する青色を見た。この青色以外は、

「血」

人間は血溜まり風船だ。血が抜けてしまえば萎んでしまうと、壊れてしまう！

死への恐怖、未知の痛み、死の向こう側といった大小様々な悪寒が一斉、背筋を走った。

「勉強不足、観空。幾ら、痛覚を消したとしても血というモノがある。あなたの精神を崩壊させ」

「ああ」

眠気のような欲求が襲う中、私は瞼を瞬いて逆らおうとした。朝露ノ遥が私へと歩み寄り、両手で私をオブラートに包んだ。

「おやすみ」

はーねえであつた頃の満面な笑顔を見せる朝露ノ遥からそつぽを向いた。

偽りだと目頭を熱くさせながら、朝露ノ遥の両手を振り切る。

それが最期の力だったのか、背にある十一対の翼の感覚が消えていった。同時に私を大空に羽ばたく鳥の如く飛翔させていたトリックが掻き消えてゆく。

落下。

スローモーションな情景。みずばらしい青空に一点だけ、真ん丸とした梅干お日様が在った。

落ちてゆくという感覚に恐怖は無かった。

私と軟らかな空気との衝突によって奏でられる子守唄にただ、疲弊した身体を委ねた。

ふんわり、ふんわり、ふんわり、ゆらゆら、ねむりましょう、わ

たしのおにんぎょう。

「しずく……ちゃん」

ふんわり、ふんわり、ふんわり、ゆらゆら、ねむりましょう、か

わいいむすめ。

「はーねえ……かあ、さま」

自分でも笑窪の形が、小弓な形が分かるくらいだ。瞼を閉じた黒い世界の中で私はそう思った。

>七<

あたしは迫り来る和国の人々の壁に巻き込まれたら階段から転落しそうと怯えながらも、屋上へと辿り着いた。腕で汗を拭う。

目の前には飾り気の無い漆黒のヘリコプターがあたしの目に飛び

込んできた。あたしは不愉快な溜息を吐く。

驚いた事にあたしがいた世界と同じようなビルが幾つも顕在していた。ビルに付属されている看板には日本語で会社名が記載されていた。あたしの知っている世界に名立たるムニーの名もあった。確かに日本の存在していた場所にグランがあるのだから、在り得るには在り得るが、気味が悪い。

「一番、乗りか！ やっぱり、卓球で……鍛えた……」

右のヘリの在る場所へと駆け寄ると、そこにはまだ、屋上に上がってきていないはずの朝露ノ観空がコンクリートの上に仰向けになつて、眠っていた。

レッドスピネルにも負けない赤い髪のアインテル少女、観空の身体のおちらこちらに刺し傷があり、例外なく血が溢れている。

血の海に沈んだ観空をあたしは割れ物のように大切に両手で掬った。

「はーねえ。来ちゃ駄目」

目をゆっくりと開けた観空は弱弱しい声で言った。

観空の視線を追つてゆくと、遙か頭上に人影が見えた。あたしは鏡に映った自分を見るような首を捻りたくなる不思議な感覚に包まれた。それもそのはずだ、あれはあたしなのだ。

「朝露ノ遙！ 妹に、妹に何をしたああ、降りて来い！」

パトカーの赤色灯のような丸い照明と照明が地面に均等な距離であたし達を囲んでいた。その中に赤色灯の赤とは違う赤をあたしは見つけ、駆け寄り手にする。

その赤は何億戦と血の雨を潜り抜けた凶暴さを称えている刃の塗装を持っていた。強く両手で握り締めた柄には豪華なルビーがふんだんにあしらわれていた。

「人間がマルクトを使えるか！ そうか、あたしはあたしだったわね。そう、あんたのせいで観空は」

金切り声を立て、光状の剣を持った朝露ノ遙はあたしの頭上を狙うようにして降りてくる。何故か、あたしには避ける余裕があると

いう錯覚めいた予測が頭を過ぎた。

誰かがあたしにその意思に従えと囁いた気がした。

あたしは朝露ノ遥の剣先を紙一重で一步、後退して避ける。その動作と連動して手に持った剣を振り、朝露ノ遥の首筋を横薙ぎろうとした。

剣先に硬い衝撃が生じる。

空から落ちてきた無数の光状の剣に剣先は行く手を阻まれて剣を一旦、構え直すしか無かった。構えるといっても、剣を持った事など、深溜のケテルしかないあたしはとりあえず、自分の身体の中央に剣がくるように前方に構えた。

膝を地面についた紺色の制服を着た背には色数多、鮮やかな十一対の翼がしなやかに輝いていた。それを背に持つ女性、朝露ノ遥がこちらに冷淡な眼差しを送る。まるで何かに度胆を抜いているかのようだ。

何事もなかったように朝露ノ遥はけたけた笑い、指を鳴らす。何度も、何度も。

その指の音に応じて無数の剣先があたしを目掛けて、一斉に突貫する。

先ほどの一撃であたしの持つ剣は重さがない事が判明していた。肩の事を考えず、構わず、ただ、がむしゃらに剣達を叩き落す。

「ケテルか、剣。剣。剣。素振りの練習は嫌いだって忘れたのか、あたし！」

剣を在らぬ方向、空へと飛ばしながら慟哭した。

「面白いよ、あたしとあたしの殺し合い。何故か、殺すって事が楽しい」

喋りながらも、朝露ノ遥の指を鳴らす動作は止まらない。

「あんた、観空のお姉ちゃん失格よ。子どもには暴力は駄目。今の時代はゆとりなんだから、」

観空を想う度にあたしの持つ剣は刃を赤く、眩く……輝かせた。剣をぎゅっと握り締め、振り子のように加速度をつける。

「ね！」

加速度の付いた赤く輝く凶刃は当たりもしない無数の剣事、激突した剣先の羽根のように軽い光状の凶器を空に舞い上げた。

「小説家如きが！ マルクト！」

あたしに吹き飛ばされた剣が統率力を持つかのように直線を描いて、朝露ノ遥付近の中空へと集まる。

集まった剣は自ら光を放ち、その光へと溶け込んでゆく。構成されたのは赤い刃を持つあたしの持っている同様の剣だった。

「あんたも元小説家でしょ。それにね、あたしはただの小説家じゃないの……。主人公が必ず、勝つ小説を書く小説家なのよ」

「はーねえ」

仰向けに倒れているはずの観空がいつの間にか、雫と冬架の手を借りて、あたしの所へと歩んでくる。雫は朝露ノ遥に頭にきているのか、いつもの天真爛漫な笑みはない。冬架も同様だろうが、常にクールを猫かぶりしてきた彼女の無表情は理解できない。

「みーちゃん、今こそだよ」

「馬鹿姫、エクスカリバーを借りるぞ」

珍しく、真剣な雫の声に呼応して弱弱しい観空の声が紡がれた。

雫の答えを待たずに冬架は言霊を吹き、光の粒子が生み出すカーテンの中で異様な姿へと変質してゆく。

数秒も待たず、観空の両腰に二本のエクスカリバーと呼ばれる最強の剣を収めた鞘が具現化される。

「ご都合主義は……」

十一対の翼をはためかせて鞘から流れる光の粒を纏う観空をはつとした驚いたような表情を浮かべ、ふと慈愛に満ちた瞳で見つめる。それが最期に見る何かのように。

あたしはその瞳を知っていた。あたしだからこそ、気付く。あれは観空との思い出を読み返している時の幸福に満ちた瞳だ。

「え、あたし……。だめ、あんた死ぬ気でしよう。どうして……」

あたしは声を零してしまった。けれども、もう独りのあたしは観

空を頼んだと言うみたい四十度、腰を曲げて丁寧に頭を下げた。俯いた顔から一滴、一滴と透明な何かが零れていた。

頭を上げ、もう独りのあたしは芝居染みた怒りをぶちまける。

「読者にも、あたしにも、嫌われるんだよ！」

そう言っであたしの持つ剣の刀身を意図も簡単に剣で払い飛ばす。離れた剣は赤い刃が真つ二つに折れて、コンクリートへと何度かバウンドして物言わず、仰向けになった。あたしは視線で剣の無残な姿を確認し、首を横に振った。

「どうして！」

あたしは悲嘆に叫んだ。

もう独りのあたしは、

「約束、約束があたしにはまだ、あったからね。もう一つの約束は破るけどね」

はーねえの剣が折れて地面に転がって、朝露ノ遥ははーねえを突き飛ばした。

その事実だけで死に値する。

私の両手に握り締めた巨木な櫂の杖が私の体内に存在するアリアマターと冬架のアリアマターを吸収して、杖の先端の一点に眩い光を生み出していた。

冬架は耐えられないのか、低い呻き声を上げている。

私は迷わず、両腰に携えていた二本の鞘を雫に向かって投げた。

雫と冬架が何やら、喚いているが……どうせ、馬鹿の戯言だろう。

口を硬く蓄み、朝露ノ遥に櫂の先端を向け、

「その翼、遍く世界を越える虚無にして無限。その少女……全てのアリアの祖、イグドラシルに在りて神を制する者なり。確固たる意思において、観空が詩う」

朝露ノ遥も私と同じように櫂の杖を先端に向けている。先端が光輝いていた。

朝露ノ遥が、私が異口同音に叫ぶ！

「具現化せよ！ 言霊は神の裁き、ロストガーデン」

直線的な光の束と光の束が激突する。

断続的に続く反動が私の身体を襲う。十一対の翼の加護をロストガーデンに全て注いでいる為、踏ん張るのが精一杯だ。

歯を食いしばり、全身の痛みに耐える。前腕から血が、両足から血が、両肩から血がじわりと流血した。

「観空、めっ！」

はーねえの悲痛な声が聞こえた。だが、それに答える余裕は無く、苦笑した。

「朝露ノ遥！」

「朝露ノ観空！」

私と朝露ノ遥の悲鳴にも似た叫びに共鳴するように、光と光の合間に光渦が発生する。私と朝露ノ遥は成す術も無く……吸い込まれた。

> 八 <

私はいつもの滑り台の上で、月見遥という食料を運んでくる一般的な子どもを待っていた。遥の艶やかな髪をさりと触るのが好きだった。それを思い出しつつ、滑り台の急坂を一気に滑り降りた。長い髪が微風に晒されて、ふわりと私の背へと戻たり、晒されたりと繰り返している。

あれ？ 顔を上げて私は私の姿を見回す。

苺ジャムや、青色のペンキ、黄色いクリームなんかの染みが付着して、白いぶかぶかのワイシャツの色を侵食していた。

髪を触った途端、手にはくもの巣が張り付いた。

髪が伸びすぎて目の前が見え難い。私は髪を掻き揚げ、周囲の風景を眺めた。

夕暮れ時の日差しに照らされて、オレンジ色に染まる砂場。誰も乗っていないのに、風に弄ばれてゆっくりと前後に揺れるブランコ、

大小様々な高さに設定された鉄棒。そして、公園の隅には懐かしいダンボールを何枚も重ねてガムテープで繋ぎとめた歪な家が在った。「え、私の家。どうして、もう存在しないはずなのに。夢なのか、いや……」

「夢ではないよ。感情共鳴物質の臨界現象があたし達の一番望む世界を構築した。もう、帰れない遠き過去をね」

周囲を木々に囲まれた公園の入り口に私とは対照的な清潔な真っ白い色のワンピースを着た少女がいた。両手には真新しい本が握り締められている。タイトルはここからは残念だが目視できない。

少女は困ったように眉をへの字に曲げて、私を寂しげに見下ろしていた。

私は爪先を伸ばして、背伸びする。

「でも、私ははーねえを殺さなく、て……あ」

歡喜の表情が見る見るうちに絶望へと彩られてゆく。瞳孔が定まらずに左右する。それでも私は受け入れるしかなかった。

はーねえとかつて呼ばれていた朝露ノ遥の身体が徐々に、透明に透けてゆく。

透けた向こう側にはチラシのような紙がべったりと貼られている電信柱が見えた。

「ねえ、觀空、そんなに悲しい顔をしないで。あたしは未来のない未来から解放されたんだからね」

はーねえはしゃがみ込んで私の目線に合わせてくれた。黒いびーだまのような双眸が私にほほ笑みかける。

胸から込み上げてくる怒りを出さないように口を嚙み、こくりと頷く。

「昔の觀空は素直だね。今の觀空なんて口を開けば、一般人どもだね、こいつ」

おどけて私のおでこを突付き、はーねえは弱弱しく息を吐く。失敗したねと言っている様だった。

「はーねえ、き、き」

氣遣いすぎだよと言葉にしようとしたが、上手く喋れない。涙が
どうしようもなく、止め処なく、流れた。

「観空、覚えてる、この本？」

「はい、はーねえ。なんでも知っている神様ですね。七歳の少女が
読むにしては哲学的でした」

「うん、観空。それはね、観空が寂しそうな目をして絶望だけしか、
この世界にないような顔をしていたからあたしが作ったんだ。希望
はいつもどこにでもある、あたしが貴女の希望。神様になるよって」
「はーねえ？」

はーねえが差し出した絵本を受け取ろうとした。

絵本が何の前触れも無く、地面に落ちた。はーねえの両腕が消し
ゴムで消されたように無くなっていた。

「どうやら、観空のロストガーデンがあたしの存在を蝕んでいるよ
うね」

ようねってのはーねえ！ どうしてそんなに達観して！

私は十一対の翼を発動させようと目を瞑る。

「あれ、なんで発動しない。嘘、そんな嫌！ 観空、私の力はこん
なモノなのか！」

そう、こうしているうちにもはーねえの身体は虚無に帰してゆく。
私は必死に抱く！ どくんって心から安堵できる音楽を奏でる心
臓を持つ人を！ 正しい道へと導いてくれた両手を持つ人を！ 捻
くれた私を受け入れてくれた黒い双眸を持つ人を！

はーねえを抱いた。

「観空、希望を捨てないで明日に向かいなさい」

ぎゅっと、ぎゅっと、力を手に込める。けれども、感触はなかつ
た。手は空気を掴んでいるようだ。

「これから観空は数多くの困難と闘う。けどね、負けそうになつた
ら……思い出しなさい。心の片隅であたしが諦めたら、めっ！」

桃みたく爽やかな夏風が私の髪を撫でて、はーねえの消えた場所
へと向かってゆく。

「ああ、ああ、はーねえ！ はーねえがせかいを、こわす、いうからわたしは。しずくちゃんが、ふゆかおねえちゃんが、きゃしいーさんが、みるおにいちゃんが、いまのはーねえがいるせかいをこわしちゃ、めっだから！ いやだよ、はーねえ、はーねえ！」

夕焼け雲を仰ぎ見て、大きな口をめいっぱい開いて泣き叫んだ。叫んでも、叫んでも、叫んでも、はーねえは返事してくれなかった。

私の声を聞いて仲間だと思ったのか、セミ達が騒々しい声で大合唱し始めた。

> 九<

いつの間にか、意識がふんわりと途切れていた。異様に下手な音程外れの歌声によって私の意識は覚醒した。

眠たいと目を擦る。

「丘を越え飛ぼうよ！ らん、らん、らんらん、歌詞を忘れましたらんらん」

叩いたら埃でも舞い上がりそんな茶色のシートにどっしりと腰を掛けた雫が歌っていたのだ。

私ははーねえの膝の上に縫い包みのようにはーねえの両手で支えられていた。

「馬鹿姫さん、黙って操縦して下さい！」

ヘリの操縦桿の一つであるステックを一定のリズムで叩く雫に対して激昂した。

「はーねえ、その馬鹿は勝手に歌わせてとけ。馬鹿は死ぬまで馬鹿だ」

私は右頬を膨らませてそう言った。

ヘリの狭い窓枠からしばし、空を眺める。

雲ひとつない晴天。建物一つない山々の碧色が何者にも侵されていない聖域のような気がして、妙に神秘的だった。

私はふと、口を開いた。

「いつか、私とはーねえは別れるのでしょうか？」

「別れないよ、観空。あたしは観空の傍に最期までいる」

「私もです、はーねえ。例えば、死んだとしても何かの方法で、私は」
「約束」

私の後に続いてはーねえも、

「約束」

私とはーねえは声を弾ませてそうお互いに言い聞かせた。

生きてゆくと決めた、この地で。けれども、未来は示している。

私達、姉妹がいつか、遙か遠い場所へと離れていってしまう事を示していた。

私は信じる。

ヘリの窓枠から観える空という世界が私の知る世界の全てではないように、未来もそれだけが全てではないのだから、未来を信じた
いのだ。

終章、遙か遠い観空

終章、遙か遠い観空

>
—
<

朝露ノ観空が未来を信じる事を決めて歩き出した一時間前。
一つの鮮やかな赤い、赤い光が爆ぜた。

昼下がりの猛暑の中、汗をびっしょり掻きながら、小さな少年と背の高いすらっとした整然とした女性が果物を主に販売している露店の前で品定めをしていた。

「かあさん、あの林檎かつてえよ」

露店の商品棚に置いてある林檎を驚掴みにして、子どもは無邪気な笑みを浮かべて母親に見せびらかせている。母親はそれを嗜めるように子どもの手を引っ叩く。熱風に乗って軽い音があたしの耳にまで届いてきた。ああ、親子なんだなっと感じる。

「駄目ですよ」

「かあってよ」

子どもは両手を広げて、空気を叩くように何度も振った。

「駄々を捏ねても駄目です」

母親はきつぱりと子どもの大きな瞳を見つめて正す。

微笑ましく感じた。遙か遠い日に同じモノをあたしも感じていた。いや、あの風景の中にいたから。

「昔の滯も……いえ、昔の観空も……あんなだったか……」

思い出にある観空は常に強がりばかり言う子だった。いや、いまさら思い出に浸るのは止めにしよう。月見遙としての最期の仕事を果たさなければならぬのだから。

あたしは雲ひとつない空を見つめる。さらに記憶と目を繋げると

空の果てから、人の脳みそを乗せてコンピュータ制御でアリアを暴走させるシステムが搭載されたミサイル―通称アリアボックスが和国を破壊する為にここへと直撃するのが見える。

月見観空の死後、月見遥の未来が分岐して一人はあたし―詩衣夏こと朱、もう一人は朝露ノ遥になった。あたしは未来を変えようとした果てに観空と喜びを分かち合う為に濤を産み、もう一人は未来に復讐する為に子孫を残した。観空の求める神様はなんて優しくて、厳しいのだろうか。そう心で呟きながら最期のアリアをあたしは唱える。

月見観空が帰ってくる世界、月見観空が未来の果てに創設する新世界の礎となるならばと、あたしは微笑んだ。だが、涙が出るのだ。「願わくば……観空と雫と冬架とあたしの四人でまた、馬鹿でどうしようもない日々を過ごしたかったね」

涙が後悔を鈍らせる前に唱えよう。あたしの近くには先程の親子が仲良く、手を繋ぎながら野菜の入ったバケットをその握った手の間に通していた。それは守るに値する光景だ。

あたしはそっと、お腹を撫でる。月見観空がくれた力を今、解放する。

十一対の翼があたしの意思に反応するように眩く輝く。

「朝露ノ観空の意思を継ぐ名の元に置いて全セフィラ開放」

突如出現した白光に輝く別空間からあたしの身長の上五倍以上長さのある櫛の杖が出現し、あたしの手に自然と収まる。そして、その杖を両手で強く握り締めて、天空に突き立てた。

あたしの中にいる月見観空のアリアマター―感情共鳴物質が十一対の翼から溢れ出し、櫛の杖から懐かしい人物が具現化される。

紅い髪、紅い円らな瞳。前腕には青色のリボンを巻きつけて、雫にいつも着せられていた黒いゴスロリ系の服を無理なく着こなし、相変わらず胸は絶望的でない。十一歳のままで時が止まってしまった人と神との間の存在―月見観空があたしの手に触れ、満面な笑みを浮かべた。

あたしは泣き喚いた。アリアマターの生み出す光のカーテンが観空とあたしを包んでゆく。

「はーねえ。久しぶりです。諦めたら、めっなんですよ？ さあ、和国の人々を救う為に私と力を合わせましょう」

観空が手をすつと差し出す。あたしがそれを愛おしむように両手で包み込んだ。

「観空……。みそらあ。うん。行くよ、久しぶりに」

二人の手は櫂の杖に触れた。

「その翼、遍く世界を越える虚無にして無限」

あたしと観空の背から現世では在り得ぬ紅い、紅い、深遠な一對の布のようなアリアマターの帯がひらひらと光の奔流に乗る。

「その姫……。全てのアリアの祖、イグドラシルに在りて神を制する者なり」

威厳に満ちた観空の声が周囲に響いた。

「二つの意思において母、子が詩う」

「具現化せよ！」

あたしの言葉の後をまるで、同じ人物が続けて言うようなリズムで無理なく、観空が叫んだ。

「言霊は神姫の裁き、ロストガーデン。禁断消滅形」

重なり合う最期の二人の声が櫂の杖の先端へと伝う。あたし達を軸にして、瞬時にして周囲へと光の奔流は肥大化してゆく。人々はその母なる海に似た光海に魅了され、包まれてゆくしかなかった。人々の瞳には恐怖といった俗世の感情はなかった。ただ、無心にその光に憧憬の念を刷り込まれた。

遙か上空を飛ぶアリアボックス五機が和国から溢れ出す光に満ちてゆく。その光はアリアボックス内に縛られていた人々を浄化するように、アリアボックスと内部で電極に繋がれた人々の体を抱擁し包み込んでゆく。

ある少女はその光を見てこう言った。

「やっと、しねるのね……ありがとう。かわいい、おねえさん」

少女の瞳には涙が一閃、輝いた。その少女に対して光の中、立っていた紅いツンテールの少女は言う。

「もう、誰も憎まなくても良いんだよ。私が悪い奴をやっつけてくれるからね」

少女はこくりと頷き、慟哭の微笑みと共に光海に還った。

完成と同時に櫂の杖は消え去り、紅い二つの光が空へと、空へと高く飛んでゆく。

大きな紅い光であるあたしは小さな紅い光の観空に話しかけた。

「終わったんだね、あたし。でも、悲しくないよ……。観空、二人で何処に行こうか？」

「はーねえ、そう言っただけで締め切りだったんだ。ゴメン、いけないって言うからな」

「もう、締め切りはないよ、観空」

「秋葉はないですよ。動物園に行きましょうか？」

「そういう可愛いところは変わらないね、観空」

二人は止め処ない会話をしながら和国をぐるりと巡回した後、何処かへと飛んでいった。その先を知る者はいない。もしかしたら、遠い日々のあの時へと。

―ねえ、その一般的な子ども―

―なん、なんですか。金なんかないですよ。お菓子も持ってないです―

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3917z/>

遥か遠い観空

2011年12月16日18時45分発行